

長江～黄河の間の霸王街道
南京大虐殺30万人記念館
我が古戦場開封と中牟の旅

(下図は鳳凰)



平成7年9月15日～24日

(1995)

寺 前 信 次

長江～黄河の間の霸王街道、南京大虐殺30万人記念館

我が古戦場・開封と中牟の旅 目 次

まえがき	．．．．．1	明の太祖・洪武帝・朱元璋	．．．．．48
9月17日	．．．．．4	9月19日	．．．．．50
成田～上海～南京	．．．．．4	明皇陵	．．．．．50
南京の概要	．．．．．6	明 中都城	．．．．．54
9月16日	．．．．．7	鳳陽～蚌埠～亳州	．．．．．57
南京市内観光	．．．．．7	亳州的概要	．．．．．58
中華門	．．．．．8	9月20日	．．．．．59
中山陵	．．．．．11	亳州的朝	．．．．．59
明孝陵	．．．．．14	華祖庵・華佗記念館	．．．．．60
玄武湖	．．．．．17	古地道	．．．．．62
南京大虐殺30万人記念館	．．．．．18	湯陵	．．．．．64
莫愁湖	．．．．．26	花戲樓（大関帝廟）	．．．．．66
9月17日	．．．．．28	漢石墓と曹四孤堆	．．．．．68
馬鞍山・采石磯	．．．．．28	9月21日	．．．．．70
采石磯	．．．．．29	漢方薬市場	．．．．．70
烏江の渡し	．．．．．33	亳州～商邱～開封	．．．．．72
項羽と劉邦	．．．．．34	開封の概要	．．．．．74
垓下～烏江の戦い	．．．．．34	9月22日	．．．．．77
西楚霸王霊祠	．．．．．36	開封の朝の散策	．．．．．77
烏江霸王祠～滁州	．．．．．39	黄河・柳園口	．．．．．78
9月18日	．．．．．40	鉄塔	．．．．．80
滁州	．．．．．40	宋都御街と竜亭	．．．．．80
琅琊山	．．．．．41	鼓樓	．．．．．81
琅琊山景勝区	．．．．．42	古戦場の中牟城	．．．．．91
醉翁亭景勝区	．．．．．43	9月23～24日	．．．．．101
100滁州～鳳陽	．．．．．45	開封～鄭州～成田	．．．．．101
鼓樓	．．．．．46	あとがき	．．．．．101
鳳陽の概要	．．．．．48		

まえがき

「歳（トシ）を甃（モアツ）び日（ヒ）を貪（ムサビ）る」の通り、戦後50年、いたずらに歳月をむさぼり過ぎた我が身をかえりみると、万感の思いが錯綜してくる。ゆきつくところは、甘苦を分かち戦旅をともにして戦い、うら若い尊命を犠牲にされた友の慰霊に帰着するのである。

「老與病相仍」、老いと病とが一つになって相仍（ヨ）ってきた現在、思いは殷殷たる砲声に神経を磨り減らし、連日連夜、匏（カナ）で背骨が削られるような思いで戦った友が、鬼哭啾啾として眠る激戦場の跡であった。

国内での慰霊については人後に落ちない積もりでいるものの、戦後50年という節目の年ともなると、万水千山の道を越えて直接死地に詣でたいという帰心は、本当に矢の如しであった。

中国・儒教の經典である「礼記」（ライキ）に「狐死首丘」という言葉がある。これは、狐が死ぬ時には自分が昔棲んでいた丘の方に首を向けで死ぬという意味で、畜生でさえも故郷に恋着を覚える。まして一身同体と誓いあった友の死地を、この世の見納めだと、帰心を覚えるのは極く自然であった。

去る3月イランを旅したときの紀行文を綴っていたところ、激痛の頸椎骨脊髄症という奇病に罹り、その紀行文が最後になると覚悟していた。しかし夢を追わなければ生きていけない私は又、慰霊の心を通じて旅心が芽生えてきたのであった。

「旅心」とは単なる遊び心ではなく、心を遊ばせることである。即ち、心を遊ばせて人間の道に近づいていこうとする生き方の探索である。大袈裟な表現だが少々は禅宗の「遊戲三昧」（ユゲサンマイ）の思想に、一步でも近づきたい心もあった。

天の神は樂を与えるために我々に老境をもたらし、我々を休ませるために死をもたらし、と莊子は述べているが、人間には時間は一つしかなく、悲しく感じても楽しく感じても同じように過ぎていく。

そこで私は「華（ハ）は再び揚（アガ）らず」と言われるように、時は重ねて来らずと旅を決意し、各旅行社のパンフレットの検討を始めた。

遠い瘴癘（ショクリ）の地・ビルマの慰霊には体力気力とも限界を覚え、帰趨は中国・中原の古戦場の訪問と決め、揚子江から黄河に至る安徽・河南省のコースを選んだ。

その旅程の中には、明の始祖・朱元璋が人倫の道は「孝」だと父母の陵墓を造った「鳳陽」がある他、「殷」の都でもあり、三国時代の魏の始祖・曹操の古里でもある「亳州」（ハクシウ）も含まれ、中原の歴史を彩った歴史街道は一段と私を魅了した。

漢民族は5000年前に我々が戦った黄河流域におこり、四隣の異族より卓越した最も古い文化をもった民族である。彼らの文明は他の総べての民族を融合同化して、「世界の中心」であると自らを「中国」「中夏」「中華」と称した。

天の覆うところ、地の載（ノ）すところの世界は、一人の天子（為政者）が支配するものとして、これを「天下」と称した。天下とはもともと世界的帝国の観念で、中国は「天下思想」のもとに4000年の永い間政治が行われ、戦争が絶えたことがなく、20数回も為政者が替わっている。

中国の古聖は政治を「王道」と「霸道」とに分ち、王道を以て理想的な政治とし、

徳を以て仁を行うものを王者としている。これに反する政治を霸道としてきた。

日本と唇齒輔車の関係にあるべき最近の中国はどうであろうか。「唇亡べば齒寒し」という中国の諺からきている「唇齒」とは、隣接する一国が亡べば他の一国も危しという意味である。「輔車」の「輔」は頬骨、「車」は歯牙の下骨のことで、互いに助け合い共存共栄、相互扶助、日中親善でなければならないのである。

しかし残念ながら、中国は58年も前の盧溝橋事件記念日の7月7日前後から、抗日戦争勝利50周年記念日の9月3日にかけて、各新聞は連日大きなスペースを割いて特集を組み、テレビも毎晩のように抗日映画を放送し、誇大妄想的に旧日本軍の残虐を印象付けていた。

戦後50周年を記念した抗日戦争のキャンペーンは、予想を超える激しいものだったと日本の外務省関係者は述べている。中国当局の目的は国内向けの愛国主義教育だと強調しているが、日本の政界をにらんだ牽制の狙いがあったものと思われる。

海外に中国事情を紹介する週刊誌・北京週報の8月14日の英語版では、「JAP」という日本人を軽蔑する「蔑稱」が繰り返し使われていた。

公的な刊行物で、これだけあからさまに蔑稱が使われるのは異例なことで、日本の侵略者を指す「日本鬼子」などの表現も頻繁に使われていたのであった。

江沢民国家主席は抗日戦争勝利50周年記念日の記念演説の中で、日本との長期的な友好協力関係の推進を強調している。これは国家目標である「富強」の実現に向けて、日本の経済協力への期待感の表明であり、日中関係を対米関係の発展や台湾問題解決に役立てたいという、中国の政治的意向を反映させたものと言える。

江沢民氏はまた日本の一部には、「侵略と植民地支配の歴史を美化しようとする」（靖国神社参拝などを指す）勢力が存在していると批判し、「日本軍国主義による侵略の歴史の正しい認識と深い反省が、重要な政治的基礎となる」と述べている。恰かも隷属国家への発言のようで、憤慨に堪えない次第である。

上海の有力紙である市共産党委員会機関紙・解放日報の論説委員を勤める凌河氏は、抗日キャンペーンは「第一に国内向け愛国主義、民族主義教育だ」とした上で、「日本批判がこんなに激化したのは、日本の閣僚が侵略を否定する発言を繰り返したことが大きい」と説明している。これも事実反した品性下劣な発言だ。

外資系企業に勤める国際関係に明るい中国人会社員は、中国は台湾沖のミサイル実験で、台湾独立を志向する李登輝総統に圧力を掛けたが、抗日キャンペーンの標的は橋本竜太郎通産相（遺族会会長）らが本夏、靖国神社を参拝したことを特に問題視していると分析している。

村山首相が核実験の中止を求めた直後に中国は核実験を実施し、中国首脳は中国の核実験は自衛のためだと繰り返すばかりか、虫のよいことに、日本からの借款を当てにしてG N Pの倍増を計画しているのが現状である。

核兵器は防御（自衛）的兵器ではなく攻撃的兵器であり、日本の政治家の生温い抗議は中国に舐められている。中国首脳の根本思想は、怨念に基づく日本イジメを以て、世界や自国民をリードしようとしているのに他ならない。

言うことと成すことが本来と逆であることの譬えとして、「困歎止動の誤り」という諺がある。狐はうれしい時には「コン」（困）と鳴き、困った時には「カン」（歎）と鳴く。馬を動かす時には「シ」（止）と言ひ、止める時には「ドウ」（動）と言う。

このように反対のことを通用させているのが、中国首脳と言わなければならない。

我々の出発直前に開催された国連世界女性会議では、人民日報は「我々は奇跡をなしとげた。国連史上最大規模のフォーラムを成功させた」と言う談話を発表した。

しかしながら、実際の会議は隔離された会場で行われ、自由な言論は封殺された。「中国とは違った考えを持つ人たちの意見を聞いてみたい」（20代女性）といった北京市民の期待も、殆ど叶えられなかった。即ち自国民との対話を許さなかったのである。

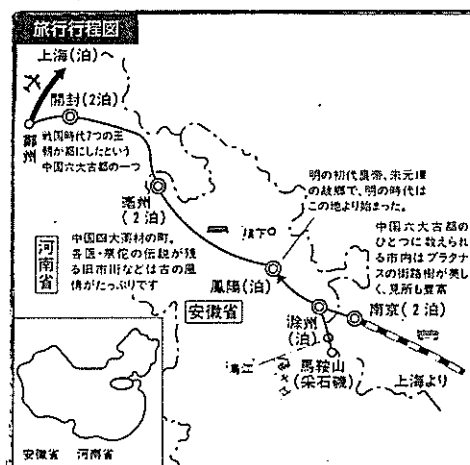
国際平和と安全の維持が目的の国連も、今や第2次世界大戦の五大戦勝国がその使命を無視し、勝手気儘に振る舞っている機構に成り下がってしまった。世界の願いである「核拡散防止条約」も、これらの大国のエゴで潰され、彼らは揃って武器輸出の「死の商人」となっている。

現在に生きている我々はマスコミの支配下にあると言っても過言ではない。情報という霧の中をさ迷っている人間は、いつの間にか声の大きい方に吸い込まれていく弱点をもっている。従って耳目に触れる様々な情報を鵜呑みにせず、良く消化する習性を養わなければならない。

「まえがき」として異例の文を綴ったのは、戦後50年の節目の年に当たり、「戦争には勝敗はあるが正邪はなく、戦勝国と敗戦国はあるが、その間に正義が割り込む余地がない（正義は国の数だけ存在する）」ことを述べたかったからである。

理も非もないのが「戦」である。戦争に善悪正邪を持ち込むと永遠に尽きない論争になる。それは原爆問題が明らかに証明している。古代中国の賢人は「春秋に義戦なし」と言ったが、総べての「戦」はこの一語に尽きるのではないだろうか。

（下の地図は今次旅行の経路図）



9月15日

(金) 晴

成田～上海～南京

出発便が日本航空から中国東方航空に変更された一行15名は、13:50に成田空港を飛翔した。1年10ヶ月ぶりの中国旅行は今回で17回目を迎え、国内旅行と全く変わらない気持ちで上海までの秋空の旅をおくった。

搭乗して直ぐ昨日、友人の亀井一夫氏から贈られた「封印の昭和正史」(小室直樹・渡辺昇一共著)を開き、我を忘れたように読み耽っていた。

戦後の左翼全盛時代、進歩的文化人全盛時代を通じて、汚染された昭和史を正すべきだと徹底的に批判し続けてきた両氏の言は、共鳴するものばかりであった。

細川内閣以来の日本政府は、自動的に外国に頭を下げる「謝り人形」になってしまった。「戦後50年決議」(正式には『歴史を教訓に平和への決意を新たにする決議』というらしい)がその最たるもので、「わが国は侵略国だ」と決議する国会がどこにあるのか、と両人は述べている。

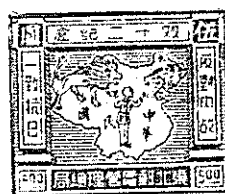
このような摩訶不思議な政治家が輩出するようになったのは、戦後教育が社会主義、日教組によって曲げられたからで、南京大虐殺は誇大妄想、支那事変の発端は中共だと述べているのも正しく、我が意を得たりであった。

わが愚息もまた、戦後の風潮に迎合して進歩的教育者と任じた東大教授の影響を受け、父親たちの時代の者と違った歴史観を抱いているが、50年を経過した今こそ、各角度から検討すべきだと感じながら頁をめくっていた。

眼を休めるために、シートのポケットの中にあった、パンフレットの写真に目を通したところ、日本人乗客で採算が取れる中国東方航空は恥じも外聞もなく、大活字の見出しで『勿忘昔日「萬国皆戎馬」』と書き立てていた。昔日を忘れてはならない、世界はみな戦争を構える蛮族だと言うのである。

これこそ他民族を東夷、西戎、南蛮、北狄と輕蔑する中夏(中華)思想である。更に抗日戦争勝利を記念した数種類の郵票(切手)を印刷してあったが、これらは国際線には不適當極まるものと鋭い抵抗を感じていた。

50年も前のことを蒸し返す中国政府に対し、一言もない腰抜けの日本の政治家の不甲斐なさに憤りを覚え、パンフレットの数枚を手荒く引き裂いて持ち帰った。



(右は抗日戦争勝利の記念切手)

「遼東の豕(イノ)」、即ち世間知らずで自分だけが偉いと考えている中共の首脳に申したい。中国の聖人は「天下を以て天下を治む」(天下は世界を指す)、或いは「天下は天下の天下なり」と述べている。

即ち聖人は自分の意見や党の考えのみで天下を治めず、天下(世界)の人と心をつにして共に治めると言っている。原爆実験反対にしても世界の人の声であることを忘れてはならない。

更に述べたい。中国には「羊頭を懸げて狗肉を売る」という格言がある。羊の頭を看板にして実は狗(犬)の肉を売ること、実質と一致しない言動は慎むべきである。

15:50に快晴の上海空港に着陸すると、全行程を添乗する「毛」氏と上海の添乗の「胡」氏が出迎えた。その時、中国人女性が私のところに喜色満面で駆け寄り、「張英」ですと挨拶した。しかし突然のことで誰だったか脳裏に浮かばない。

彼女は黄山（安徽省）に登った時の添乗員だったと自己紹介した。当時、丸々と太っていた彼女はスマートになり、結婚して一児の母になっていた。毛氏と同じく合肥の出身だったと思い出しながら、暫く懷古談に花を咲かせていた。

彼女は車中の無聊を慰めるため、得意になってクイズを出すガイドであった。その一つに「中国の四大美人は誰か」という問題が出されると、即座に私が楊貴妃、王昭君、西施、貂蟬（ちょうせん）だと答えた。すると彼女から中国通だとお褒めにあずかったことが記憶に残っていた。

思い出は最高の宝だと言われるが、人生の余祿の時期に入った私を良く覚えていてくれたことに感謝し、貴重な思い出になったと固い握手を交わしていた。

膨大な人民と国土を擁す謎の国の中国で、想像することもできないような奇遇は、北京と景德鎮について3回目のことである。「有朋自遠方来不亦楽」（朋、遠方より来たるあり、亦た楽しからずや）と言った思いで語り合い、笑みを浮かべて離別した。

上海市内の雑踏は毎回のことだが、二階建てのバスの数は目に見えて増加し、浦東地区の発展と共に、香港返還後の世界金融の中心を意識する空気が漲っていた。

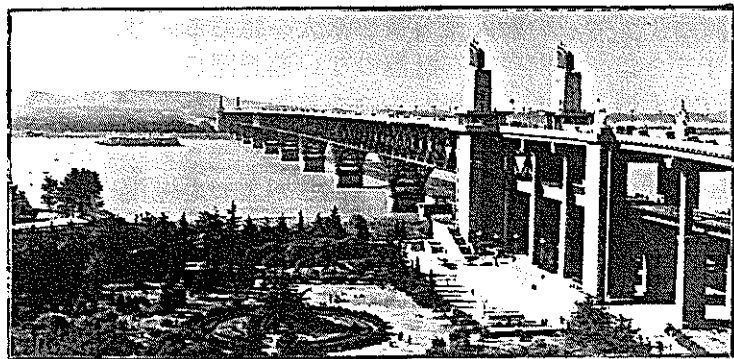
市内のレストランで夕食を摂った一行は上海駅に移動した。3年ぶりに見る駅前広場は車が氾濫し、遠くで降ろされてトランクを運ぶのはひと苦勞であった。南京までなぜ飛行機を利用しないのかと、文句の一つも言いたくなるのは当然であった。

19:52上海発の列車の最後尾の軟車に乗車した。懐かしい思い出の多い蘇州、無錫、鎮江も闇の中で江南の叙景は書けず、ただ売り子に急変した女性車掌と戯れながら、数点の絹製品を買い求め、5時間という長時間の末に半睡状態で南京駅に到着した。時間は翌日16日の午前0:58である。

約12時間を要した鵬程万里の南京は4年ぶりであった。長途の旅の疲れを癒すことになった「中心大酒店」は新築の超一流ホテル（香港返還を期して進出した香港資本）で、これだけが今日の唯一の満足感を味わったものと言えるだろう。（就寝は午前2時）

早速ながら南京のガイドに対し、私の念願である「南京大虐殺記念館」（正式名は侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館）への単独行動とハイヤを依頼した。

（下の写真は南京長江大橋）



南京の概要

南京は江蘇省の省都で、昔この地方は呉の国であったから、別名を呉州とも言う。江蘇省というのは江寧（南京）と蘇州の二府の頭文字をとってつけたもので、南京の略称は「寧」である。

揚子江（長江）に臨んだ江蘇の肥沃な平原の中央に位置するため、古来から天下を窺うものは幾度か此処に国を建て、都を置いたのであった。

春秋戦国時代に於いてはまとまった国の形成は見られず、楚、呉、越などの抗争の舞台となった。

呉を滅ぼし、さらに楚に向かおうとした越王勾践は、この地に拠点を築いたと言う。越は逆に楚に滅ぼされ、この付近も楚の領域に入ったが、楚の威王のとき、この地に王気が見られるとして、これを鎮めるために「金」を埋め、今の清涼山付近（城内西側の台地）に城を築いたことから、「金陵」と称したと言われる。

三国時代には長江下流の呉（蘇州）に勢力をもっていた孫権は拠点を京口（鎮江）、さらに秣陵（南京の中心部から南6キロ）に移し、212年に石頭城（清涼山）を築き、秣陵を創業の意欲を現すために「建業」（ケンギョウ）と改めた。

蜀の名将・諸葛孔明は、当時の姿を「鐘山に竜がどぐろを巻き、石城に虎がうずくまり、真に帝王の宅なり」と絶賛した。鐘山は現在の紫金山で、古名を金陵山、三国時代は蒋山と称した。

次いで隋、唐時代には都が長安（西安）に移り、それ以来長く金陵あるいは江寧という名称が用いられていた。東晋時代になって「建康」（ケンコウ）と名を変え、350年あまり南朝の都であった。

元末の反乱の中から江南を掌握した朱元璋（明の始祖・洪武帝）は、この地を「応天府」と改めた。1368年（洪武1年）に全国を統一して「明」を建てたとき、暫定的に応天府を京師（天子の都）とし、より北方に国都を設けるべく、当初は「開封」を「北京」（ペキン）とし、応天を「南京」（ナンキイ）と呼んだ。

南京の名はここに始まった。開封の北京はやがて廃止され、次の永楽帝のとき元代の大都（北京）に遷都してから、副首都の南の都として「南京」と呼ぶようになった。

近代以降の南京は激動の運命を辿ることになった。中国が西欧列強の半植民地に陥る、最初の切っ掛けとなったアヘン戦争は、1842年8月の南京条約で終息した。

南京の下関の長江上に停泊する英艦上で調印された南京条約は、香港の割譲、広東、上海など5港の開港、アヘンの輸入量の追加拡大を認める屈辱的な条約であった。

11年後の1853年、差別や私有財産のない理想国を建設するという、洪秀全の太平天国軍は南京を占領し、11年間もここを首都とした。

清朝を倒して1911年に辛亥革命が成立すると、翌12年5月、孫文は臨時大統領として此処に中華民国を樹立し、以後は蒋介石の率いる中華民国の首都となった。

上記のように南京は、3世紀の三国時代以来15世紀までの間、東呉、東晋、宋、齊、梁、陳、南唐、明など8王朝の都が置かれ、北京、西安、洛陽とともに中国四大古都の一つとなっている。古い都としては洛陽の次である。

9月16日 (土) 晴 南京市内観光 (下図参照)

世界を駆け巡ること60数回に及ぶ私は、歴史的に見ても兄弟の国として中国には深い愛着を感じ、17回目の訪中の朝を活潑地の心境で迎えた。

同文同種の唇齒の關係にありながら、戦争が終結して50年を経過しても、未だに中国首脳の日本に対する言動は下劣な嫉妬心のようにしか思えず、ますます友好親善を悪化後退させ、猜疑、奸猾、(わるがしこいこと)、誤解だと思ひながら、唳唳とした甲高い建築現場の音で飛び起きた。

隣接した国際大厦ホテルの作業は早朝の6時から開始され、窓から覗くと高層建築の足場は竹と木の簡単なもので出来ており、非常に危険で安全性は感じられず、建築技術は高度急成長の進度に追いついていけない感じであった。(ホテルの中心大酒店は上図の中央の交差点)

市の中心部の中山路にある中心大酒店の周辺には、各種ホテルや銀行、百貨店、大商店街が櫛比して林立し、そこには懸命に自転車を漕ぐ通勤労働者や輪タクで野菜を市場に運ぶ農民、簡単な朝食を売る露天商の屋台などが見えていた。

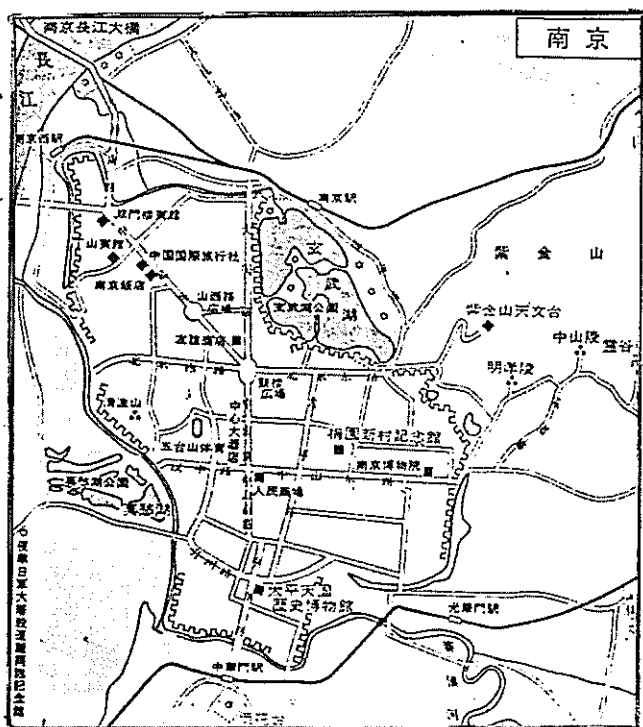
自転車の波が次第に膨れあがるにつれて朝靄は流れ出し、気になる今日の天気も快晴のようで、それに釣られるように私の足は自然にホテルの外に向いていた。

中山路をゆっくり散策している時、茶褐色の中国服に赤い襷(タスキ)をかけた二人の女性が私を呼び止めた。襷には「唐人食街娯楽中心」と店の看板と同じ文句が染め抜かれ、戯笑を浮かべて手招きながらカードを渡された。

それは「壹拾元」と印刷した唐人街食府(店の名称)のカードで、早茶市、午飯市、晚飯市、歌舞行と略字で書かれていた。この店は唐時代の装飾を施し、唐時代の料理を食べさせるレストランで、日本人にとっては10元(約100円)という安い価格は、驚くばかりであった。

しかしながら、中国の衛生状況を知り尽くしている私などは、不潔を思い出して店内に入る気にはなれず、そこを去って露天食堂の並んだ街道を静かに歩いた。

洋式化した高層建築が聳え立つ、街道筋の華洋折衷の光景を眺めていると、生活習慣の改善は容易なことではないようであった。しかし、我々が直接彼らに接して生活した50数年前に比べれば、その進歩は著しいと言わなければならない。



中華門 (南門、前頁の中央下側)

ホテルを10時に出発した一行は、プラタナスの街路樹が延々と緑なす中山南路を南に進み、人口520万（市内は208万）の古都の観光は先ず中華門からであった。

近代化の息づかいを感じさせる中にも、落ち着いた雰囲気が漂う街を南下すると、前方に如何にも王城らしい城壁が市街を囲み、バスは城門の手前で停車した。これが中華門であった。

現存する南京城の城壁は明代初年（1366～86）に造られたもので、南北約10㍓、東西は前頁の地図のように凹凸が激しく一定しない。周囲の全長は33、67㍓、高さ14～21㍓の堅牢なものである。（右は中華門の城門の一つ）

城門の前に立って見上げる城壁は大きな山のように、城門の横の急な階段を喘ぎながら杖を頼りにして登り、2階から更に3階へと進んだ。

四重に構えた城門の上は通路で連結されているが、往時は各城門の上には絢爛豪華な二層の高楼が立っていた。

（中華門の中に展示された模型による）

南京には昔は13個の城門があったが、現在は6個しか残っていない。その中で中華門は南京城最大の堡壘式城門で、明時代には「聚宝門」と呼ばれていた。その後1931年に中華路が建設された際に、中華門と改名されたのである。

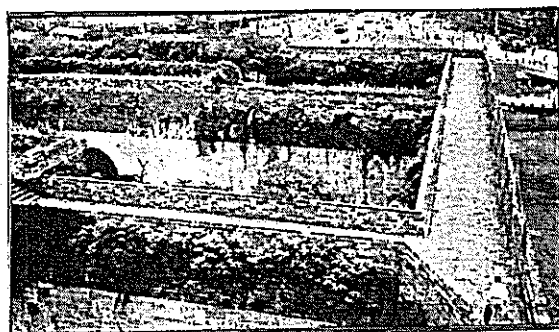
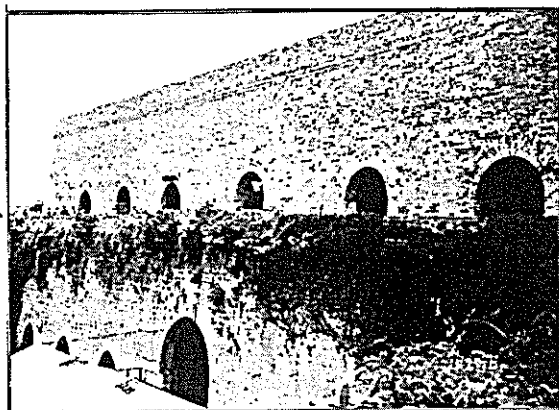
（右は中華門の鉄壁な構造の一部）

南唐時代の南門の跡に再建された中華門は、東西118㍓、南北128㍓、総面積15、168㎡という縦長の長方形の要塞である。

四重の門がある中華門の各門には観音開きの扉の他に、上下に開く「千斤閘」という扉が付いていて、完全に閉じるようになっていた（現在は扉の溝跡しか残っていない）。（右上は城門の上の通路の写真で、兵力の移動が容易である）

城門の内部には兵士が隠れるための「蔵兵洞」が24ヶ所も設けられ、合計3000人の兵を潜伏させていたから、古代の戦闘では難攻不落の城門であったと推察する。

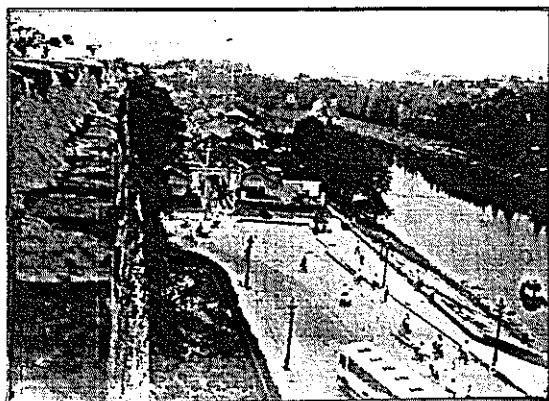
昔の北京城の2重構造に造られていた東安門、西安門を見たことがあるが、城門に更に3重の小城を造った中華門の比ではなく、640年前の明の築城技術の偉大さが窺えるのであった。



どっしりとして気品に溢れる城壁の上はペンペン草が生え（前頁下の写真）、「国破れて山河あり」と言うような感じがしていた。しかし600年以上も経過して、幾多の滄桑の変（滄海が変じて桑田となるような変化）に遭遇しながら、なお城門や城壁の基礎石や城磚（せき、ゑん）は厳然と残っていた。

上海文化出版社発行の南京旅遊手冊によると基礎石は花崗岩で、煉瓦は特別に焼いたもので、規定の寸法、重量に統一されたものを使用し、その一個一個に造った者の姓名を刻み、約20万人の民工によって造られている。

上の幅が10甃（下は15甃）もある城壁の上に立ち、落ち着いた古都の優雅な景観を展望すると、中華門の南側に秦淮河が静かに流れていた。（上の写真は中華門の城壁と秦淮河の流れ）

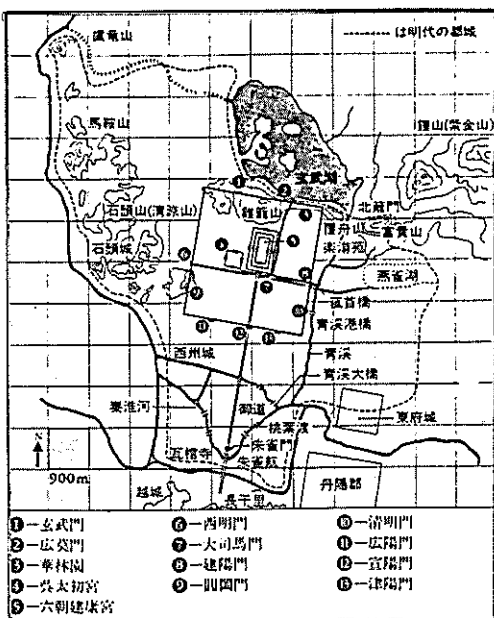


有名な秦淮河（シツイカ）は長江の一支流で幾千年来、古城とともに民族的な風情を残しており、「秦河」は南京の代名詞となっていたことが、彷彿として浮かんできた。

秦の始皇帝が東方巡視の時、この地に「王氣」があるという占者の言を用いて開いたことから、秦河の名があると伝えられている。

昔は川上に船が集まり、遊人たちが酒を飲み美人を招いて舟遊びをしたところで、清の乾隆帝もよく此処に舟遊びをして、詩を詠じ歌を唄ったと伝えられている。しかし、今はただ昔の伝説を偲ぶだけの汚い運河に過ぎないようであった。

南朝時代の都城の地図（右の地図）を繙くと、中華門付近では城壁内に秦淮河は取り込まれ、そこにあった門は朱雀門であった。明代の城壁の位置は右図の……線の位置で、随分と変化していることに注目しなければならない。（上は南朝時代の南京地図）



秦淮河の南に小高い「雨花台」（7頁の地図参照）の丘が見えていた。昔から雨花台を制した者が南京城を制すと言われているが、その通りの高台であった。

梁の武帝の時代に雲光法師がこの丘の上で経文を唱えていると、たちまち天上から花の雨が降ったという伝説があり、名称の由来となっている。現在も城壁の下のお店では、紋様の入った小石を「雨花石」として売っていた。

日中戦争の戦史を繙いてみると、日本軍の中華門の占領は昭和12年12月12日午前0時10分であった。一方、南京城一番乗りを果たした福井県鯖江市の歩兵36聯隊が、中華門の直ぐ東側の光華門を占領したのは10日午後5時で、2日間の時間

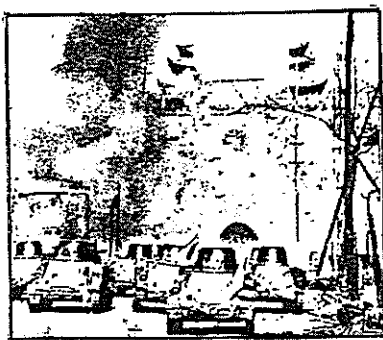
差がある。そのことは勇猛果敢な日本軍といえども、堅固極まる中華門には無謀な攻撃をしなかったことを証明している。

最近の日本の新聞報道を見ると、日本軍の砲撃で破壊した南京の城壁修理のために、多くの日本人のボランティアが煉瓦運搬に訪れているとの記事が出ていた。これは全く戦闘の経験のない者の、軽々しい報道だと言わなければならない。

私は城壁攻撃や城壁防御の実戦を身を以て経験している。75ミリの級級の砲弾が命中しても煉瓦は2～3枚程度の破損に過ぎず、南京城の分厚い煉瓦を砲撃で破壊できるものではない。城壁攻撃は砲兵支援のもとに城門の爆破が戦法であった。

城壁の煉瓦の破損は蒋介石軍と共産軍との内戦、文化大革命の混乱期に於ける土地住民の我が家の建設のためが主因で、それに加えて風化作用である。南京戦は追撃が急なために砲兵は歩兵に追従できず、弾薬の補給も困難であった。戦闘を知らないものは無尽蔵に砲弾があると勘違いしており、煉瓦に対する砲撃の威力は微々たるものである。

無責任な戦後の日本の報道には、血が逆流するような激しい憤りを覚える。反日本文の思想の強い彼らは、悪いのは総べて日本だと決めつけ、自虐思想の虜になっている。現在の中国各地を見よ。戦闘のなかった都市や農村も殆ど城壁は取り壊されしまった。50年前の中国を知らない輩の報道を信用してはならない。



上の写真は日本軍が中華門に突入した時の写真。城壁上の楼閣は煙のために中央部は隠れているが、楼閣も城壁も明瞭に残っており、戦禍は明瞭である。



上の写真は最も激戦場であつた光華門の占領時の写真。楼閣もあり城壁も写真の通り厳然として残っている。

角がたった稜稜とした城壁の上から降り、城門内の蔵兵洞を利用した売店で書籍を購入し、路上に並んだ露天商の雨花石を眺めながらバスに乗車した。

紺碧の空に綿のように浮かんた南京市街を東に向かう車の中で、ガイドは私に対してハイヤは12時半、中山陵の下に迎えに来ると告げた。見ると時計の針は11時半を指しており、中山陵を参観する時間の余裕はなかった。

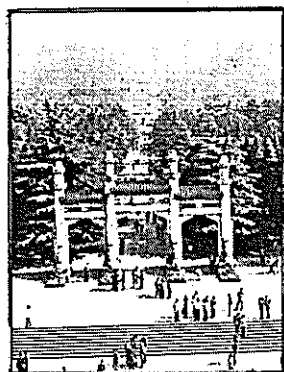
時は得難く失い易しと意を決し、人生万事は出たところ勝負だと昼食は攝らずに空腹を克服し、中山陵に向かうことにしたのであった。

中山陵（7頁地図の右側中央）

プラタナス並木の繁る中山東路が、紫金山に突き当たったところに広場が広がり、その山の中腹に向かって孫文を祀る陵が見えてきた。（右は広場から眺めた中山陵）

一行が広場に面したレストランに向かうのを尻目にして、鬱蒼と茂った杉並木に囲まれた真っ白い石段を、快々の快々のと心の中で驚馬に鞭打つように登り始めた。

ツアーと離れて単独行動をすることは慣れているが、画龍点睛を欠いて龍頭蛇尾とならないようにと、時計を見ながら玉砂利を踏んでいた。先ず我が国とも関係の深い孫文の概要を記すことにする。



1866年11月12日、中国革命の父といわれる孫文は、広東省香山県（のち孫文の号にちなんで中山県と改称）翠亨村の貧農の家に生まれた。日本では慶應2年で、その2年後は明治維新の年である。

中国はアヘン戦争で開国を余儀なくされ、領土をとられ且つ不平等条約を押しつけられた清朝は、国内では太平天国の乱によって揺さぶられていた時期である。太平天国で首都・天京（テングイ・ティン）が陥落したのは、孫文が生まれる2年前のことであった。もちろん翠亨村も動乱に巻き込まれた。

孫文の幼名は帝象（テイショウ）、のち文（ブン）と改めた。字（アザ）は徳明、号は日新（シン）あるいは広東語で同音の逸仙（イツセン）と言った。日本では本名の孫文の名で知られているが、西欧では号の孫逸仙の名で知られている。

中国では孫中山の尊称で呼ばれているが、これは後に孫文が日本に亡命したとき、中山樵（カヤマシヨウ）という変名を使ったことからきている。その他、孫文には陳文、陳載之、呉仲、高達成、杜嘉諾とか、日本人名の高野長雄といった変名が多数ある。首に懸賞金を付けて追い回される反逆者になった孫文が、必要にせまられて身を守るために使ったものである。

26才の年に西医書院を卒業して医者になった。しかし憂国の士の彼は植民地化の様相を深めていく時代の危機を憂慮し、清朝の変革を清朝重鎮の李鴻章に訴えたが入れられず、1894年11月、清朝打倒の決意を固めて革命結社興中社を創設した。

会の目的は「韃虜の駆除」、つまり満洲族王朝の清朝の打倒と、「中国の恢復」、「合衆政府の創立」、つまり中国民族の独立自主、民主共和国の樹立にあることを、入会秘密誓詞の中で明らかにした。

日清戦争の敗戦でますます騒然となってきた当時の政情をみた彼は、直ちに武装叛乱の実践行動に移り、1895年、香港では香港興中会を、広州でも興中会を組織した。しかし最初の武装蜂起計画は事前にもれて失敗した。

危うく難を逃れた孫文は日本に亡命し、首に懸賞金を付けられて清朝から追い回された彼は、1912年の中華民国の成立までの17年間、日本を始めとする海外での亡命生活を余儀なくされることになった。

一方の清朝内では1898年、若い光緒帝を担ぎ出し、日本にならって立憲君主政治を樹立し、清朝の革新を図ろうとした変法維新運動が起こった。しかし僅か100日で西太后のクーデターによって失敗した。これが戊戌（ごしゅう）の政変である。

このころ列強による「割地狂潮」と言われる激しい領土・利権の争奪が相つぎ、1899年3月、山東省で義和団が「扶清滅洋」をとらえて蜂起し、1900年春には天津・北京に雪崩れ込んだ。

これに対し列強は同年6月、権益擁護のため8ヶ国連合軍を編成して義和団の鎮圧に向かい、8月には北京を陥落させ、西太后は西安に逃亡した。

このような騒然とした情勢をみた孫文は、「時機すでに発す、断じて猶予すべからず」と広東省惠州で2回目の軍事蜂起をおこした。しかし武器弾薬の調達がつかず解散となった。

1903年ころになると在日留学生は千人以上になり、「排満興漢」の声が上がった。またロシアが義和団事件後も協約に違反して満洲に居座ったから、「拒俄（こくわ）義勇隊」まで組織された。

1905年8月、すでに8000人に達する中国人留学生や、清朝に追われて亡命してきた革命家たちは、孫文が日本に戻った機会に中国同盟会を正式に成立した。同盟会成立後は中国各地で武装蜂起がおこり、孫文は再び日本を離れて中国各地の武装蜂起を指導した。

1911年10月10日、同盟会員のほか新軍兵士たちまでが、自然発生的に武昌で武装叛乱をおこし、武漢を占領して中華民国湖北軍政府を樹立した。叛乱は全国各地に拡大し、僅か2ヶ月の間に全土の約3分の2の17省で、清朝に叛旗をひるがえす新政権が相次いで誕生した。

これが中国の歴史上、数千年の王朝政治に代わり、初めて民主共和国を打ち立てた「辛亥（しんがい）革命」、或いは民国革命とも言われる革命である。孫文は革命の勃発をアメリカ・コロラド州のデンバーで知った。

孫文はその年の12月25日、亡命以来16年ぶりで革命の元勳として迎えられ、祖国上海の土を踏んだ。時に孫文は45才である。

翌1912年元旦、孫文を臨時大統領とする中華民国が、17省の新政権の代表者たちを集めて南京に成立した。

しかし、これが中国における民主共和国の創設を意味するものではなかった。僅か3ヶ月後には早くも清朝を手玉にとり、革命派をまるめ込んだ軍閥の巨頭「袁世凱」は、孫文に代わって臨時大統領の職についた。

袁世凱は大統領に就任すると間もなく、軍閥の本領を現して革命派の領袖を暗殺し、独裁専制政治を強行して1916年元旦、年号を「洪憲」と改めて自ら帝位についた。

これに対して第3革命と言われる反袁闘争が全国各地でおこり、袁世凱は3ヶ月後にやむなく帝制を取り消し、間もなく憤死した。しかし彼の死後、彼に代わって政権を牛耳ったのは華北各地に盤踞する軍閥であった。

軍閥たちは帝国主義の諸列強と結びつき、政権の争奪をめぐって離合集散を繰り返し、1916年から27年にかけて入れ代わり立ち代わり北京中央政権の座に就いた。即ち孫文たちの民国革命は挫折して失敗したのである。

魯迅の言葉をかりれば彼は「永遠の革命家」である。「中山先生の一生の歴史は嚴

然としており、世に出た時から革命であり、失敗してもなお革命であ……と」

1925年3月12日、「余、力を国民革命に尽くすこと凡そ40年、その目的は中国の自由、平等を求むるにあり。40年の経験を積みて深く知る。この目的を達せんと欲すれば必ずや民衆を喚起し、平等をもって我を遇する世界の民族も連合し、共同して奮闘すべし、と。現在、革命なお未だ成功せず……」と遺言を残し、北京で病死した。

時に孫文は59才。孫文が最後に口にした言葉は「平和を……奮闘を……中国を救え……」であったと言う。

中国の太祖のように国民の尊敬を受けている孫文、その彼が永遠に眠る中山陵の石段を歩むごとに、名を竹帛に垂れた彼の歴史を思い浮かべていた。

紫金山の南麓を拓いた楚々として清楚な環境の中に立つ石の牌坊には、「博愛」の二字が刻まれていた。（牌坊は11頁写真）

そこから一直線に伸びる真っ白い参道の石段を登ると、中国式の碧い甍をのせた陵門が建っていた。（右上の写真は陵門）

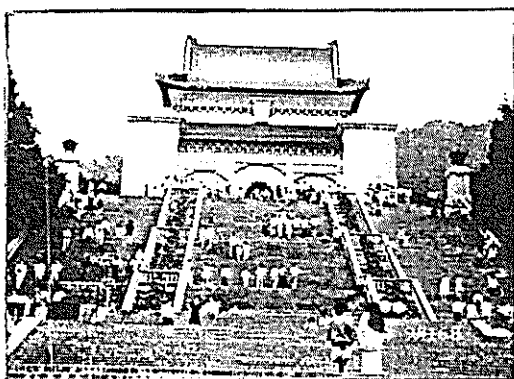
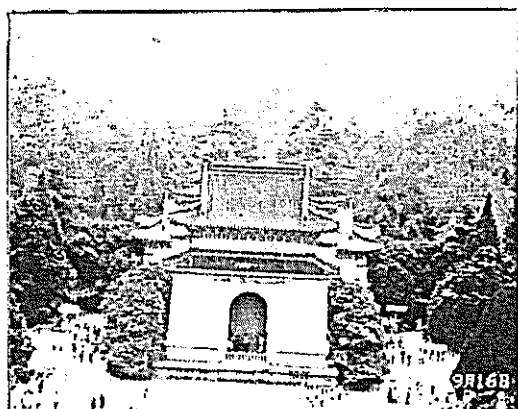
陵門の上には孫文の直筆の「天下為公」の四文字が横に刻まれている。これは彼が好きな儒教の經典の一つである礼記に出ていた言葉で、孔子が堯舜の時代を賛美した文句でもある。

孫文は「家天下」という中国2000年の帝制に代わって共和国を建設し、その後の政權は大家族的な人民に属し、政治は「公天下」（故名は天下為公）の為に行わなければならないと言うのであった。

陵門の内側には大石碑が凜乎として立ち、中華民國18年6月1日、中国国民党が總理孫先生をここに葬る」という意味の中国語が、金文字で書かれていた。

陵門から頂上までの石段の数は339段、下の牌坊から数えると合計392段もあり、ハイヤの時間を気にしながら杖をつき、中国人参詣者に混じって氣息奄奄として登った。

標高158mの頂きには紫色の瑠璃瓦で葺いた祭堂が、全てを睥睨しているように建っていた。その後方にある穹窿状の天井の下の墓室には、大理石で彫んだ若々しい孫文の座像が莊嚴な空気に包まれて立っていた。その奥には臥像のついた大理石の柩が安置され、周囲の壁には遺作の「建国大綱」が彫られていた。（右の写真の中段は頂上の祭堂、下段は祭堂内に立つ孫文の座像）



国民政府時代には陵墓を大切にする意味から、写真機や傘を携えて石段を上ることも許さなかったと聞いていたが、今もその伝統が受け継がれているようで、不潔な中国人に似合わず塵紙一つ落ちていなかった。

中山陵の入口から祭堂に至る三つの門には、孫文の唱えた三民主義を示す「民族」「民権」「民主」の文字が刻まれていた。

これはフランス革命の「自由、平等、博愛」、アメリカ独立宣言の「人民の、人民による、人民のための」と言う民主主義精神に感銘した彼が、欧米をそのまま真似したのではなく、中国独自の民族、民主革命、社会革命を進めなければならないと考え、民族、民権、民主の三民主義思想を構想するに至った、と後に述べている。

三民主義の主張は国民の覚醒を促して、不平等条約の破棄などを主張しているが、孫文自身は中国の覚醒ばかりではなく、東亜永遠のためには日本との提携親和の重要性を自覚していた。これは彼の著作や講演集などを読むと分かることである。

陵墓面積8万平方メートルもある広大な中山陵は、1926年から着工して1929年春に完成したもので、孫文の名は全国至る所に中山公園、中山路などの名称で残されている。古今を通じて彼ほど慕われている人物はないと感嘆しながら、全長700メートルの参道を下った。

孫文が幾度か革命運動に破れ、日本に亡命中に名乗った「中山」の名が強く私の記憶にあり、現在の共産党政権下でも尊敬されている所以は、一体何を利用しようとしているのかと考えていた。

明孝陵（7頁地図の中山陵の左）

中山陵の牌坊を出ると息つく暇もなく、待っていた予約のハイヤに乗車し、中山陵と同じく紫金山の南麓にある明孝陵に向かった。明孝陵は明帝国（1368～1644）の太祖・朱元璋（洪武帝）を祀る陵墓で、600年の歴史がある。

彼の姓は朱、名は元璋、字は国瑞、太祖というのは廟号で、洪武帝とはその治世が洪武の年号で呼ばれたからである。

彼は1328年、淮河ぞいの濠州（安徽省鳳陽県）の貧農の子に生まれ、農民反乱（元末の紅巾軍）の渦中から身をおこして明王朝を建て、31年の治世の後1398年、71才の波瀾にみちた生涯を終えた。

洪武帝は新王朝の創業者として、漢の高祖（劉邦）と並んで社会的に最も低い階層の出身で、その意味では一代の風雲児であったと言える。

彼は優れた戦術・戦略家としても超一流の軍人であると同時に、明・清両王朝を支える政治体制を確立した有能な政治家でもあった。

しかし有史以来、最も強大な権力をふるって専制と独裁の政治を行い、強い猜疑心と狂暴な性格によって、最も人間性に乏しい皇帝だったと評される一面も持っていた。だから、反逆罪の名のもとに5万人以上の人を殺している。

このように太祖は複雑で矛盾にみちた人物だったわけである。その人物像は18世紀の学者の趙翼が「蓋（け）し明祖（朱元璋）は、一人で聖賢、豪傑、盜賊の性質を合わせ持っていた」と言った評語に、端的に示されているようだ。

1368年正月、群衆の推戴を受けた形で彼は皇帝の位につき、大明帝国が成立して元帝国は滅亡した。応天府（南京）を国都と定め、16年間の苦闘の戦乱を経て皇帝となった朱元璋は以後、太祖洪武帝と呼ばれた。

「洪武」とは「洪（ほ）いなる武威」という意味で、明朝は漢・唐両朝をうわまわる土地を国土とする漢民族王朝となり、かつてない大帝国であった。そして国内からモンゴル色を一掃し、支配体制の確立をめざす内政に専念した。

私が洪武帝について感銘しているのは、元朝に反抗した農民を、従順に明朝の支配に従う農民に作りかえるため、「聖諭六言」を發布し、彼らを訓諭することを忘れたことである。

「聖諭六言」を略して呼ばれた「六諭」は、明朝一代は言うまでもなく清朝にも受け継がれ、次いで琉球をへて日本にも伝えられて、人民教化に威力を発揮したのである。明治の「教育勅語」もこの影響を受けたと言われている。

太祖は皇帝独裁体制の確立をめざし、これに批判的なものは悉く退け、累々とした屍の上に太祖が望んだ政治体制は完成した。

しかし1382年8月、太祖は苦楽を共にしてきた「馬皇后」を失ったばかりか、92年（洪武25年）には皇太子の「標」にも先立たれたのである。

太祖は自分の子らに軍事権力を与えておけば王朝は安泰だと考えたが、その期待は太祖の存命中はともかく、死の翌年には裏切られることになった。即ち「靖難の変」で有名である。建国の労を共にした功臣を殺して血縁に頼ろうとした、血縁そのものから反発を受けたのであった。

幼い皇太孫の成長と明王朝の安泰を念じて太祖は生きてきたが、太祖の死の翌年、即位した皇太孫（建文帝）と太祖の第四子の燕王棣（テイ）との間に、帝位争奪の内戦「靖難の変」『君側の難を靖（シヅ）める意』が始まった、

明帝国はこの内戦に勝利した燕王、即ち成祖（永楽帝）の時代に事実上再建され、国都を自分の封地であった北京に移した。以後、明帝国は亡国の日まで北京を都としたが、その結果、南京城外につくられた太祖の陵（孝陵）は子孫に囲まれることなく、ただ一つ取り残されたままとなった。

それは晩年の太祖の姿を象徴しているように見えるのである。

ハイヤは人影も少ない鬱蒼として松と檜の茂った参道に入り、古色蒼然とした石人石獸が並んでいる古道で停車し、そこからカメラのシャッターを切った。

石獸は獅子、獬豸（カイサイ）、駱駝、大象、麒麟、馬の6種12対で、石人は4対の格好な被写体であった。

石獸の獅子は獣中の王として漢代以降、中国では最高の神獸として尊ばれた。獬豸は伝説中の鹿に似た一角の神獸で、曲直を知る獣である。駱駝と大象は参道の中に据えられているが、国家の繁栄強盛と国泰民安の吉祥を意味している。（右の写真は武官の石人像）

麒麟は想像上の靈獸で赤目5蹄・一角を持ち、生物を食わず生草を踏まず、聖人が天子の位に即けば見ることがで



きるという動物である（麒麟は牡、麟は牝）。馬は皇帝が地上を走ること天上の如しということの意味し、それぞれ獣には功德があり、妖霊を駆除して陵墓を護るのであった。

（右の写真は参道に並んだ石獸）

文臣武将の石人は一般に翁仲石人と呼ばれている。伝説によると秦始皇帝の時代、南海人の身長一丈三尺もある阮公人という人が始皇帝の命により、臨洮（崑崙）を守ったところ、その名声が匈奴（北方騎馬民族）をふるい上がらせたという故事があるからだ。

阮の死後は始皇帝は阮の鑄像をつくって咸陽宮（始皇帝の宮殿）の門外に据え、始皇帝の死後は秦皇陵に移置した。これから以後はこの鑄像は石像となり、翁仲と号したと言われている。

石人石獸とともに参道には一対の石柱が立っていた。これは望柱と呼ばれている。伝説によると奴隸社会（共産党の中国は過去の社会を指す言葉）では、毎年、墓前で殺生の祭祀が行われ、その時に動物と奴隸を墓前の柱にくくった。それがこの石柱だと旅遊手冊に書かれている。

広大な陵域の中を北に進んで橋を渡ると、大3、小2の5門の壊れた跡があった。現在まで残っている正門には青い石の門額が嵌め込まれ、「明孝陵」の三字が刻まれている。（右の写真は明孝陵の正門と門額）

「陵」とは「墓」のことで、「孝」は古代から言われてきた「美行徳行」の一つである。朱元璋の「以孝治天下」の意思から「孝陵」の名称となった。即ち明代では「孝陵」と称し、明が滅んだ後は「明孝陵」となった。

昼なお暗い大樹に覆い尽くされた陵域は、静かに帝王が眠る神秘的な空気が漂い、幻の遺跡のような感じの中に朽ち果てているように見えていた。

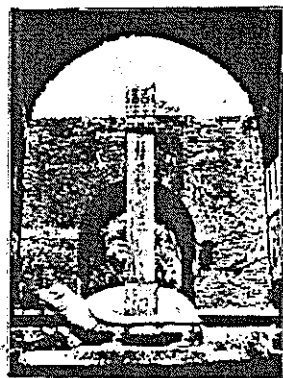
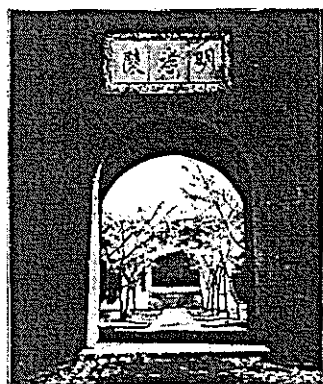
600年以上の歴史をもつ孝陵は1376年に着工して1381年に竣工し、その翌年には「馬皇后」がここに葬られ、1398年に朱元璋が病死してこの孝陵に葬られた。永楽11年（1413）に「大明孝陵神功聖徳碑」が立てられたが、長い年月のために木造建築の楼台（高い建物）は腐り果て、現在は土台石だけのものが多いようである。

（右は神功聖徳碑の側面から見た写真）

楼台の石垣を通つて上に登ると「治隆唐宋」碑殿であった。碑殿の中の石龜の上に立つ石碑に刻まれた「治盛唐宋」の四文字は、清の乾隆帝が南巡した時に立ち寄り、親しく筆を下ろして明の太祖の遺徳を顕彰したものである。唐や宋の隆盛を祈願して建立したのであろう。

ここを過ぎ竜の彫刻が施された石の階段を登ると、「明楼」の門額を掲げた祭堂があり、その後方の石垣で囲まれて高く積まれた小山が、太祖を祀る墓地であった。

密生した雑木や松に覆われた小山は、石垣に刻まれた「此山明太祖之墓」の文字が



なければ、何であるかも分からないような陵墓で、隣の中山陵や北京郊外の明の一三陵と比べると、天と地の隔たりがある。

奥行2、6㍓、周囲の長さ22、5㍓、植松10万本、鹿1000頭という陵墓も、本来は多くの楼台が建っていたが戦火で焼失し、全体は寥々として寂しい感じに包まれていた。

生前の馬皇后が朝夕に太祖の寵愛に報いるために化粧をこらしたことから、ここを「馬娘娘梳粧処」と呼んでいたらしいが、それだけが朱元璋の洪武帝を慰めているように感じていると、次の蘇洵の詩が思い浮かんできた。

「一国以一人興、以一人亡」。一国は一人を以て興り、一人を以て亡ぶのである。

玄武湖（7頁地図中央の大湖水）

南京のガイドが私の依頼したハイヤの出発時間を12時半と決めたのは、今日は土曜日のために道路の渋滞を心配したことと、南京大虐殺記念館の閉門の時間を考慮したからであった。

しかしながら明孝陵の参観が終わり、紫金山の麓を下った時はまだ1時半で、時間は十分余裕があると判断した私は躊躇することなく、眼前に横たわる玄武湖を廻るようにと運転手に告げた。



湖周15㍓の広大な玄武湖は、紫金山から流れる水をたたえて縹渺とした景観を展開し、湖の水は緩やかに秦淮河を経て長江に流入していた。



湖上には5つの小島が水面に浮かび、背後の湖岸には輪奐の美（リカ、麗麗黠黠）が連なり、行楽の客は喜々として休日を満喫していた。

車は楊柳の枝先が湖面に垂れ下がった島々を進んでは停止し、シャッターを切ってはまた走り出し、楼で休憩してドリンクを飲み、湖上に架かった橋や島を結ぶ堤防の景観を眺めて、玄武湖の美景を堪能していた。



（右の上は島が連なる景観、中は楼亭、したは湖水）

玄武湖の本名は「桑泊」又は「后湖」、城北に位置するから「北湖」とも称されている。伝説によると南朝の劉宋年間（425～453）、湖中から黒い竜が現れたからその名がついたと言われている。

玄武湖の辺りは六朝時代の宮殿跡で皇帝の狩り場であつたらしく、明朝までは宮廷の禁苑であつた。しかし現在は動物園、遊園地、劇場、音楽台、観魚池、少年の家、ローラースケート場もあり、湖上でボートを漕ぐ市民の姿など凡てが申申如とした団欒の光景であつた。

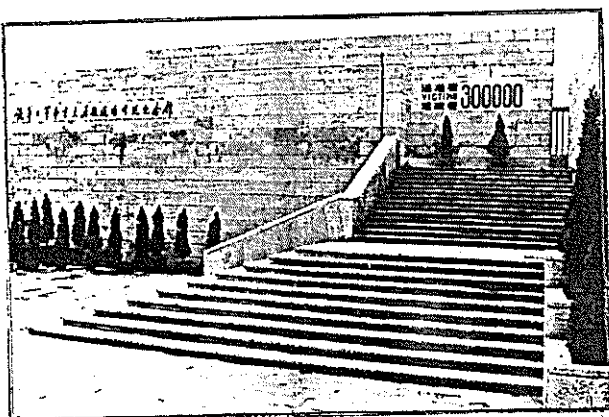
太湖石の庭園に立ち寄り、彼方に聳えるラマ塔を網膜に焼付けながら湖を離れた。

南京大虐殺30万人記念（碑）館（7頁地図左下）

玄武湖を去って至る所に遺跡がある市内を走り、車窓から思い出の深い鼓楼を眺め、中心大酒店の前を通過して秦淮河を渡り莫愁湖の湖畔に出た。

私にとって南京の唯一の目的である南京大虐殺30万人記念館が接近したと思うと、自然に胸の鼓動は心なしか速くなってきた。

前記したような、戦後50年を記念した中国の報道が走馬灯のように脳裏に浮かんた。一旦、あのような恨みを国民全体に伝えられると、小手先の手段で恨みを和らげることが出来たとしても、必ず残りの恨みがあとを引くものだ、と述べた老子の言葉が思い出されるのであった。



（上は南京大虐殺30万人記念館の正面玄関）

たしかに大軍を動かし凡ゆる兵器を使用して戦う戦争は、徳の末であり人命は至重である。そして、ものには表と裏があると同様に、戦争にも千歳拭うことが出来ないものが存在することは、戦闘体験者の一人として否定することは出来ず、誰よりも知っている積もりである。

しかし中国側の奇々怪々な策を弄し過ぎた報道も亦、否定することは出来ない。甲（カト）を巻き旗を船（ツツ）んで戦いが終わり既に50年、平和条約を締結した以上、和を以て貴しとなすべきではないだろうか、と万感の思いが錯綜してきた。

いさぎよく軍門に降った我が国を、何時までも擲擻（ヤ、なぶ）するように誹謗することは大人気なく、今の日本は「呉（略）下の阿蒙（アモ、人名）非ず」（十八史略）と申したいのである。

呉の国の下で住んでいた昔の阿蒙ではないと言うのと同様に、我が国は世界に冠たる日本国憲法を持ち、戦争を放棄して絶対平和の国に生まれ変わっているのだ。

世界の中心と自らを中国、中華、中夏と称す彼らが、中国の核実験は自分の都合の良いように弁解するばかりでなく、死の商人に成り下がり、挙句の果ては、未だ日本の一部に軍国主義が存在するなどと暴言を吐いている。中国首脳は軍国主義の意義を知っているのだろうか。

このように幾分興奮して感情的になりながら、車は不自然なほど静かな、南京大虐殺30万人記念館（以降は記念館と記す）の駐車場に滑り込んでいった。

記念館の正式名は「侵華日軍南京大屠殺遭難同胞記念館」と称し、南京西郊の江東門（7頁地図参照）の所に建っている。ここは1937年、日本軍が大虐殺した現場の一つ江東門の「万人坑」（人を埋めたところ）の遺址だと、旅遊手冊に書いてある。

1985年3月15日、抗日戦争勝利40周年を記念して建立し、総面積は25000㎡、主体建築面積2100㎡である。設計は南京工学院建築科教授「齊康」で、

建築は花崗岩、大理石で造られ、敷地の外周を取り巻く塀は青条石である、と。

正面の館名（前頁写真の左上の字）は鄧小平が書いたもので、入り口のところに中、英、日の三種類の文字で「300000」と彫刻した記念碑があり、広々とした墓苑のような感じがしていた。（右は中、英、日の3種類の文字と30万）



以上は南京旅遊手冊の記事を参考にして書いたが、中国人を対象にした中国語だけでなく、この箇所だけなぜ英語、日本語でも書いたのか？。

館内の記事を書く前に、南京大虐殺史料編集委員会発行の小冊子（写真集）に書いてある、「はしがき」と「あとがき」を原文のまま書く事にした。

『はしがき』

1937年12月13日、日本侵略軍は当時の首都南京を占領して、6週間にわたる血なまぐさい大虐殺を演じた。無辜のわが同胞は日本軍に集団射殺された上にその死体が焼かれた者が一九余万人、あっちこっちで手当たり次第に殺され、その死体が慈善組織によつて埋められた者が一五万人、虐殺された者の総数は三〇万人にものぼる。

幾万人もの婦人は暴行され、多数の婦人は暴行された上にまた銃殺、突き殺し、死体さばきという残酷な目に遭った。日本軍は至る所で放火し、焼き払われた家屋は町全体の三分の一以上に達する。数え切れない住宅、店舗、倉庫は略奪され、南京在住の外国人とその財産も逃れることはできなかった。

このかつてなかった災いに遭わされた「六朝の古都」南京は砲撃されてぼろぼろになった城壁と塀がいたるところに見え、十戸に九戸が人氣がいなく、街のいたるところに死体が横たわり、その悪臭にたえられない悲惨なありさまだった。

日本軍が南京で演じた虐殺、放火、婦人への暴行、略奪とその野蛮さに憤りを覚えずにいられない。これは二〇世紀の三〇年代に起きた、世界を驚かした人類の歴史上に比類の無い大惨事である。また、日本軍国主義者が南京人民に、中華民族に対して犯したはなはだ大きい罪であり、人類の文明史上の侮辱的な一ページである。

この写真集は中国侵略日本軍の南京大虐殺の中での罪惡を示し、歴史の真実を記録したものであり、日本軍の暴行と侵略者の恥ずべき結末を訴えている。

当冊に収集した写真は主に歴史の資料により、ほかにその当時の書物、新聞また当事者の提供によるものである。具体的な出所は①日本軍自身が撮影したものは相当な量を占めている。その多くは日本軍捕虜からろ獲したもの、後は日本軍従軍記者の提供により、当時の日本東京の各新聞と雑誌に掲載していたものと、日本軍がその当時「武功」を誇示するためにつくった映画「屠城」によるもの、また、軍事裁判で日本戦犯の相棒が法廷に出したもの；②一部はその当時南京在住の外国人がこの目で見撮ったもの；③日本の友好人士が提供したもの；④少数ながら、被害者が収集し、抗日戦争後日本軍罪行の証拠として軍事法廷に提供したもの；⑤当冊の編集者が被害者、生存者から取材したときに撮影したものである。

当冊に収集した写真はその当時中国侵略日本軍南京大虐殺の暴行を再現した鉄なる証拠であり、貴重な第一次材料である。当冊の出版はわれわれが歴史の真相を知り、その歴史を研究することに役立ち、世人がその中から教訓を汲み取り、みんなで人類の文明史を築き上げることに役立つのであろう。

『あとがき』

当冊に収録した写真は中国侵略日本軍の南京大虐殺暴行の証拠であり、中国がこの百年来日本帝国主義に侵略されてきた歴史の証拠の一部でもある。これらの写真は日本軍の血なまぐさい凶刃のもとで、わが同胞は無残に殺戮され、無数の婦人が暴行され、われわれの家屋と財産が破壊と略奪された見るに忍びない悲惨極まるありさまを示している。

今日、われわれがこの写真集を編纂する目的は歴史を忘れずに中華を振興させ、侵略戦争に反対し、過去の痛ましい歴史を繰り返さないように日本軍南京大虐殺暴行の真相で広汎な人民と次の世代を教育することにある。いま中日友好は両国関係と両国人民共通した願となって降り、歴史的流れとなっている。「前のことを忘れることなく、後の戒めとする」というように中日両国人民は歴史を認め、歴史をまともに目を向けてこそ、はじめて今日の友情を大切に、それをさらに深め、両国人民の子子孫孫にいたるまでの友好を確保することができるのである。

当写真集の編纂は張允然、浦始平両先生を責任者とし、写真の選用と校閲は鄒明德、段月萍、胡菊蓉先生と楊正元、王濤先生がそれぞれ担当した。写真収集と編纂過程においては、丁思沢、高紅光、陳娟、周紅、李思本、任長宝、繆鋒、鄭国賦、陳法、陳立志諸氏、また南京図書館をはじめ、諸方面からのご協力をいただいたことにあらためて感謝を申し上げる。写真の拠り所を明記していない場合は編集先が所持するものである。

編集者

一九八五年八月

以上は原文の誤字脱字そのままに記載した。

私がこの「はしがき」と「あとがき」を読んで先ず感じたことは、共産党の現政権は当事者能力が無いと言うことである。当時の中国は蒋介石の国民党政権の圧倒的な支配下にあり、共産軍は取るに足らない微々たる存在で、陝西省の辺境の地・延安に追い詰められていた。即ち南京戦は日本軍と蒋介石軍との戦闘であつて、共産党は詳しい戦況は知る由もない。

当時、写真機は日本軍に於いても将校の極く一部が所有していた程度で、蒋介石の中国軍や一般の中国民が写真機を持っていたのを私も見たことがない。したがって戦後40年に建設された記念館に展示された写真は、恐らく当時のものは極めて少なく、後日作られた写真が多いと思われる。又このような写真は幾らでも作成可能である。

放火は中国軍の常套手段で、退却する際には敵に家屋を使用させないように放火した。占領後に家屋を使用しなければならない立場の日本軍の放火は、全く考えられないことである。

幾万人もの婦人が暴行されたと記されているが、私の中国戦線3年間の戦陣生活では婦女暴行などは皆無であった。南京戦でも軍規厳正な日本軍にそのような行動があったとは信じられず、若し事実としても極く僅かであろう。幾万などという表現は白髪三千丈と言わなければならない。

この端書き後書きは日中にとって誠に不幸な文章だと批判する。この冊子が歴史の真実を記録したものと断じ、写真集を編纂した目的は、日本軍南京大虐殺暴行の真相で広汎な人民と次の世代を教育することにある、と述べ、両国人民は歴史を認めよ、と一方的に迫っている。何が真実であるのか、どれだけ謝罪すればよいのか……。

入館料1元を払って中国人の団体客にまじり、敵意に満ちた雰囲気館内に足を運んだ。服装から見て日本人は私ただ一人である。

順路にしたがって進んでいくと、手入れの悪い雑草の生えた石だらけの広場が開けてきた。順路の両側に南京13地区の遭難同胞葬地記念碑が立ち並び、石碑には日本軍による殺害の状況が克明に彫られている。(杉山)

敷地の外周を石積みの塀で囲んだ広場は、鴛鴦の卵のような石が敷かれ、広場の中心に真っ白い母親像と数本の枯れ木が立っていた。これは哀れみを誘う墓場の雰囲気を醸し出したもので、演出は堂に入っていた。

一方、塀の外側を青々と囲んでいる常緑樹と、鴛鴦の卵のような白い石を敷き詰めた母親像の立つ庭は、強い生命力と闘争精神を表現している。そして最終目標は中国人民が勝利することを意味するのだと、旅遊手冊には書かれていた。

庭を取り巻く石の塀には、日本軍に縄でしばられ連行されていく住民を描いたレリーフ、母親が裸の子供を危害から守っているレリーフなどの数々が、所狭しと彫られていた。見て回る私の周囲に何か魂の存在が、揺らいでいるような感じさえするのであった。

このような悪意に満ちたレリーフを見れば、超鈍感な戦後の中国人でさえも五臓六腑の奥底から、日本人を怨むだろうと不快感を覚えながら、表情を強張らせて見て回った。(右は連行のレリーフ)

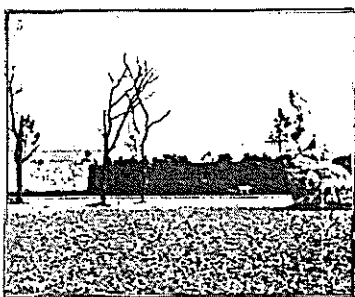
戦後長い間それほど過激でなかった中国が、今から10年前の戦後40年目になって何故、このような辛辣な記念館を建てて日本攻撃に転じたのか、と考えさせられながら眺めていた。

当時は敗戦国日本経済の高度成長は最高度に達し、戦勝国中国の経済はまだ低迷を続けていた時代であった。中国の首脳は行き詰まった自国の経済を立て直すために、窮余の一策として考え出したもので、人民の目を外に向けさせる目的だったと思われる。これは独裁国家だから可能であった。

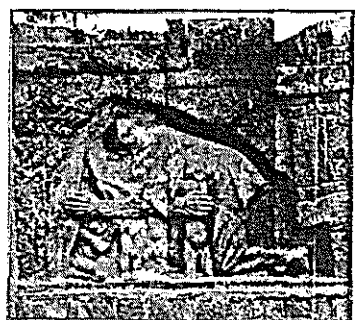
中国では古来から戦略として「遠交近攻策」が取られてきた。これは自分の立場を確保するため近くに敵を作らなければならない、自然に過去に怨みのある日本を攻撃し、怨みはあるが遠い欧米とは親しく交わり、内政を掌握するためだったと考えられる。

顧みると世界の歴史は侵略の歴史であった。有史以来、侵略のなかった時代はなく、世界史は正に侵略史である。特にイギリスのアヘン戦争に始まる中国大陆への侵蝕は実に巧妙であった。

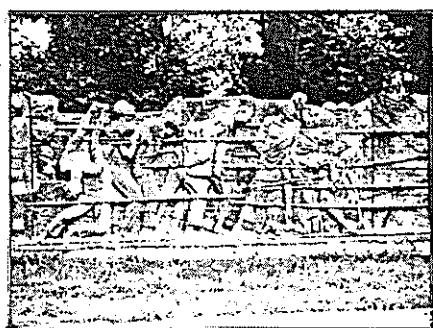
福建省福州出身でアヘン厳禁論を主張した林則徐(1785~1850)は、アヘン戦争を招来した責任を問われて左遷させられた。しかし、福州には敵国イギリスに対するこのような記念館はなく、南京の記念館は間違いなく遠交近攻策の一翼である。



(上は母親像と枯木の広場)



(上は子供を守る母親のレリーフ)



「衆の口は金を鑠（く）す」と言うように、この記念館を見学した中国人たちの噂が噂を呼んで全土に拡がり、金を溶かすほどの力となって人心を動かし、日中の親善友好が阻害されることを私は最も恐れるのである。

「戦争は死地なり」という言葉のとおり、戦争は個人にとっても国家にとっても、死生存亡の命運のかかる大事である。絶対に戦争の原因を作ってはならず、戦争に訴えてはならないと考えながら、複雑な感想を抱いて広場を去った。

順序に従って広場から大きな母親像を彫った門を通り、鉄筋の大建築物の中に入った。ここが記念館の本館で幾つかの部屋に分かれ、さまざまな虐殺の写真が展示されていた。

南京を占領した日本軍は、教会や寺院から指定した難民区まで手当たり次第に人を殺し、兵士や百姓を問わず、老若男女も妊婦も赤ん坊も、坊さんも尼さんも殺害から逃れることは出来なかった、と言う意味の言葉が至る所に書かれていた。(①は中国人捕虜の斬り殺し)

その手段は残酷を極め、銃殺から斬り殺し、刺し殺し、生き埋め、焼き殺し、更に殺人競争まで行った日本軍の残酷さを、写真で訴えていた。(②は南京郊外の集団虐殺)

数え切れないほどの慄然とする写真を全部撮ることはできず、購入した写真集の写真と照らし合わせ、鮮血淋漓、阿鼻叫喚の巷と化した戦場を想起しながら、目を充血させながら次々と足を運んだ。

(③は中国人捕虜が縛られて集団虐殺場へ連行されていく光景)

どこで撮影し、どこで入手したのか甚だ疑問だが、日本兵に輪姦されたのち裸にされて局部を曝け出した少女、腹が切り開かれて内蔵が出た婦人の写真まで展示されていた。

又、日本の新聞社から入手したと思われる、南京城の光華門、中華門を猛攻して占領したときの日本軍の光景、派遣軍司令官松井石根大将以下の南京入場式の光景、敗戦後の総軍司令官岡村寧次大将の降伏文書の署名、極東国際軍事裁判(東京裁判)の写真も掲載されていた。

(④は中国兵に着剣して突撃演習する日本軍)

又、南京攻撃の日本軍第16師団長中島今朝吾中将の日記と写真を陳列し、南京占領後に虐殺をしたことが記録されている、と訴えている。



戦闘体験者の一人として私は、平時では理解できない戦場心理のために虐殺があったことは否定しない。しかし30万人という数字の根拠はなく納得できない。私は誇大妄想的な吹聴であると信じている。

前頁の①の写真の軍刀を片手で斬り下ろすことは、日本軍では考えられない。軍では剣道のことを両手（モテ）軍刀術と称し、片手打ちを戒めていた。即ち片手では人は斬れないからであった。②③④の写真も疑問が多く、これらの写真は幾らでも出来ると言わなければならない。



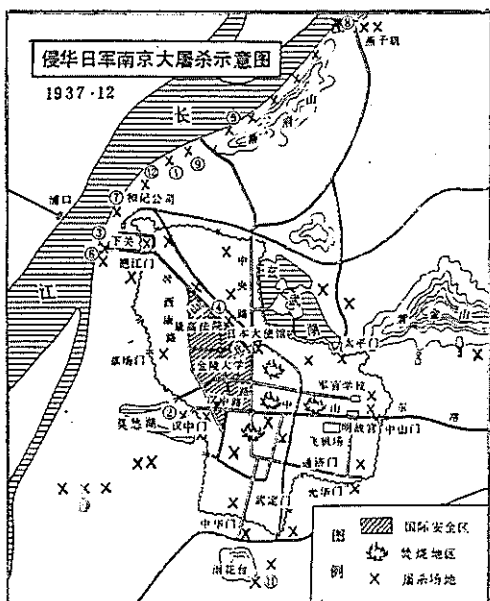
（右の残虐の跡の写真も、何処にもあるのと同じで信用できない）

真実の歴史は一つしかないのである。古代中国の後漢書に有名な辞として「天知る、地知る、我知る、人知る」と述べている。混沌とした戦場では我も知らず人も知らず、天と地の神のみが知ることではないだろうか。詩人の蘇東坡が「天は偽り（イツリ）を容（ゆる）みず」と申している通りだ。

韓非子にも「三人言いて虎を成す」と書いてある。即ち三人が証言すれば現実に無い虎も居ることになるのだ。実際になかったことでも多くの人の噂となれば、信用させてしまうことを指摘したいのだ。人はみな自分の都合のよいようにするものである。

さらに付け加えると、司馬遷「伯夷伝」には「伯夷叔齊は旧悪を念（おも）わず、怨みは（こ）れ以て希（まれ）なり」と書かれている。伯夷叔齊は相手の人の過去の罪悪過失は忘れて念頭におかない。だから彼らは人の怨みを買うこともなかったと。蒋介石の言った「報怨以德」（老子）と同じである。

（右の地図は日本軍の殺害現場の地図だが、戦闘場所が主体であり、出鱈目な地図である）



中国の首脳諸君も彼らの先輩の教訓を学習してほしいと、更に館内を進んでいった。目に付いたのは悪名高い朝日新聞記者「本多勝一」の著書「南京への道」と、藤原彰著「南京大虐殺」の陳列された二冊の書籍である。

戦後の日本では、反日的な精神構造の日本人が進歩的日本人だという思想が蔓延し、戦場から帰還した我々は血が逆流するような激しい憤りを覚えた。そして、この記念館にまでも寄贈し、耐え難い不快感を覚えるのであった。

（右は陳列した本多勝一と藤原彰の二冊の本）



人間の精神を強く支えているのは凜然とした気概である。気概を失った人間は魂のない抜け殻である。自分の愛す親の悪口を言いふらすように、自分の愛す祖国の悪口を言いふらす者は愚か者で、自己本位の出鱈目論は「何をかいわんや」である。

大きな記念館を冷静を装いながら、時間をかけじっくり眺めて一巡したが、内心は血が音を立てて全身を駆け巡るような思いであった。

最後に論語の「子曰、與其進也、不與其退也」を記述して、南京大虐殺記念館の記事を終わりたい。即ち、『私は、その人の過去は問わない。現在が問題なのである。正しい道を進もうとしていするならば、これを許し、退いて不正に向かおうとしていするならば、決してそれを許さない』、と孔子は述べている。

憲法で不戦を誓った現実の日本を、中国はもっと知るべきである。一知半解な根拠のないことを取り上げ、驕り高ぶる傲岸不遜な言動は大国の取るべき態度ではない。

敗戦国日本の過去を顧みると、中国に対してどれだけ謝罪したか数え切れない。結局のところ日本は、中国の注文と友好の使い分けに振り回されているのである。

「悪称人之悪者」{人の悪を称する者を悪(ニク)む}、他人の悪いところだけを、あれこれとあげつらう者は私は憎む、と孔子は戒めているではないか。それも戦後は既に50年も経過している今日に於いて、である。

無為無策の土下座外交一辺倒の日本政府や政治家たちも亦、誠に腑甲斐ない。嫉妬深い恫喝としか思えない中国の言い成りになるのは、真の平和外交ではない。

この記念館を見た感想は、日本が二度と世界の強大国になる活力を取り戻すことが出来ないように、中国は末永く徹底的に性魂を抜き取りたいと言う悪意が隠されている、と言うように思えるのであった。

次に、私も会員になっている偕行社(陸軍士官学校OB会)は、南京大虐殺問題について解明に努め、「南京戦史本文・資料編Ⅰ・Ⅱ」を公刊した。これを抜粋して、南京大虐殺30万人は誇張した数字であることを明らかにするため、戦闘経過は省略して重要な数字についてのみ簡単に記述する。勿論、戦闘の性質から虐殺が全く無かったというのではない。

『中国軍(蒋介石軍)に関すること』

「南京防衛中国軍の兵力判断」

偕行社の南京戦史に於ては、南京防衛中国軍の兵力を約7万と判断している。

①当時の日本軍の攻撃軍は南京防衛中国軍を約10万と判断。

②エスピー報告(南京米国副領事から在漢口米国大使館宛報告)や、「ニューヨーク・タイムズ」のダーティン特派員は、ともに約5万と判断。

③最近になって南京防衛作戦担当の「譚道平」氏は8、1万と称している。

(うち戦闘兵は4、9万。雑兵3、2万)

偕行社の判断した約7万の中国軍が南京攻防戦の結果、どのようになったかを推定してみる。その根拠は我が日本軍の戦闘詳報、陣中日誌、指揮官の日記等の資料を主とし、これに中国軍の戦闘詳報の資料を照合したものである。

(戦闘詳報、陣中日誌は公文書として記録し各部隊は提出)

「南京防衛中国軍約7万の行方」

①戦死者は約3万。

②揚子江(長江)を渡河して逃げたもの、日本軍を突破して脱出したもの、日本軍の捕虜となった後に逃亡したもの、又は釈放されて生存を全うしたもの約3万。

③日本軍が敗残部隊を撃破し、便衣隊(民間人の服装に着替えた兵士)を摘出して、

処断し、捕虜を処断したものなどなど、合計約1、6万。（これが南京事件の核心となる部分である）

単に1、6万という数字を見るだけでは真相を把握することは難しい。

（参考）ダーディン特派員の推定によれば、兵力5万のうち戦死者1、3万、生存者1、7万、捕虜処断2万となっている。

『一般中国住民に関すること』

日本軍が南京攻撃を開始した時、南京市内にはどの程度の住民が居住していたかに就いては、当時の在南京米国領事館エスピー副領事が、在漢口米国大使館に送った報告によると、住民の約5分の4は既に南京から逃れていた旨が記されている。

当時、南京及び近郊に居住していた人口は約100万と言われているから、市内に留まっていた住民は約20万程度であった。その大部分は城内に設定された「安全区」（難民区）に避難していた。

12月1日、南京市長は退去に際し、安全国際委員会に対し市政府の職権と食糧を委託している（南京陥落は12月15日）。そして安全区に対して日本軍は一切の砲撃爆撃を行わなかった。従って安全区に避難した住民は戦闘行為による被害は絶無であった。

安全国際委員会が管理する安全区のラーベ委員長が日本軍に送った書簡を紹介する。

「私どもは貴下の軍隊が安全区を攻撃しなかった美挙に対し、又、同地区における中国民間人の援護に対する将来の計画に付き、貴下と連絡をとりえたことに対し感謝の意を表す」

公式記録ではないが、南京市外の日本軍の作戦地域や市内の安全区以外でも、殆ど住民を見かけなかったと言うのが参戦将兵の証言である。

日本軍の資料として中国一般住民に就いての被害記録はない。ここに比較的に信を置くことができると言われている公式、準公式の記録を紹介する。

「スマイス調査」

この調査は、南京の金陵大学社会学教授ルイス・S・C・スマイス博士と、中国人助手が、1937年（昭和12年）12月から翌年1938年3月にかけて、南京市とその付近住民の戦争被害を調査した記録で、当時の全般にわたる被害を実査したものとして唯一の記録である。

これによると、南京市部において暴行による死者2、400人、拉致4、200人の計6、600人。南京周辺農村地帯での被殺者は9、160人で、両者の合計は15、760人となっている。

（但しこの調査では、被害者数は明らかにされているが、加害者は日中いずれか不明となっている。退却する兵の略奪などに抵抗して殺される住民を私も見ている）

加害者が日中いずれか不明である以上、市部の暴行による死者2、400人の中には、12月12日前夜、中国軍残存部隊の多数が安全区に遁入の際、便衣を得るために一般市民を殺害したり、又、拉致4、200人の中には、雑兵として中国軍に徴集され、或いは志願して軍に入った者も含むと考えられる。

農村地帯の被害者は9、160人となっているが、当時の中国軍が常用した「堅壁清野作戦」（城壁以外は焼け野原にして視界をよくし、射撃を容易にする）によって多数の民家が破壊、放火され、その際に抵抗して殺された者も多数あつた模様だ。

従って被害者15、760人のうち日本軍による者は少ないと推定されるが、この調査では詳細は明らかでない。

「安全国際委員会から日本大使館宛に送付された暴行報告」(被害届)

この報告書によれば、12月12日から翌年2月7日に至る間、殺人49人、連行390人、強姦361人、略奪その他179人(いずれもこれ以上)となっている。

この報告書は安全区に限ったものであるが、住民の大部分が居住していた安全区に関するもので、安全区を管理する少数の国際委員会として、仮に全貌を把握できなかったとしても、市内住民の被害の概要は知り得よう。

「1938年2が8日、ザ・ノースチャイナ・ディリーニュースの記事」

「2月7日夜、日本大使館スポークスマンの発表として、約10万の南京市民は2月4日までに、自治委員会により設立された第1、第2行政地域内の彼らの家に帰った。安全区はまだ約5万人が残留している」

この新聞社は当時、抗日色の強い新聞社として知られていたが、それでもこのような報道をしている。該報道は住民の被害には触れていないが、南京に残留した大部分の住民が健在であった証左と言えるだろう。

昭和13年2月7日、支那派遣軍総司令官松井大將は、南京占領後の軍の諸不始末に対して、血涙共に下ると訓示している。これらを考察すると、非違行為のあったことは窺えるが、30万人という大虐殺は考えられない天文学的な数字である。

当時の英米仏などの外国報道機関が、全く虐殺事件を報道していない点を見逃してはならない。大東亜戦争勃発の昭和16年12月8日までは、英米仏などとの外交関係は平常で、昭和12年12月の南京事件が30万人もの大虐殺であれば、一斉に強硬な抗議をしたはずである。

私見では最大限に見てもスマイス調査の通り、1万5000人以内で、最小限では2~3000人ではないだろうか。戦闘中と戦闘中止後の心理状態には大差があり、激戦を体験した私でさえも戦闘中止後の中国戦線で、部下の虐殺を聞いたことはない。

「南京大虐殺30万人」というのは、被害者中国の一方的な証言であり、作為された偽作の惨劇、屍体だと確信して館を離れていった。

莫愁湖 (7頁地図の左下)

記念館を去り、指定されていた夕食の時間までにはたっぷり時間があり、記念館の直ぐ近くにある莫愁湖公園を見学したいと運転手に依頼した。彼はハンドルを左にきって茂った森の中に入り、鏡のように平らに水をたたえた莫愁湖畔を走った。

湖の名称は六朝の南齊(479~502)のころ、湖畔に住んでいた薄幸な美女の「莫愁」が、この湖に身を投じたことに由来している。

南京に都した朱元璋は湖畔に楼台や亭閣を建て、花や柳を植えて遊覧していたが、その後ここを「徐家」に贈与した。その収入は徐氏に入ったと記録されている。

清の初めのころには湖は荒廃し、乾隆58年(1793)に郁金堂、湖心亭、賞荷亭等を経て、金陵第一名勝、南京第一湖と称されるようになり、金陵48景の一つに名を連ねていた。

車は先ず「勝棋楼」のところで停車した。ここは明の太祖・朱元璋が将棋をさした処であったが明末に火災に遭い、現在の建物は清の同治10年(1871)に再建されたものであった。

建物の中には朱元璋の手による「万歳」の二字が掲げられ、清朝の遺物の家具や大理石の芸術品を陳列し、江南文化の富と秀麗な景観を楽しむのには、好適な場所となっていた。

次いで莫愁女の居住していた場所に建立された「郁金堂」を訪れた。名称は明代からのものだが清の乾隆帝のときに改築され、莫愁女の真っ白い石刻像が庭園の中に立っていた。

(右上は庭園内の湖中に立つ莫愁女像)

堂の壁に書かれた梁の武帝の詩や郭沫若の詩は、莫愁女の愁心を表した詩であった。しかし昼食抜き空腹が刺激し出し、運転手と二人で中庭に面したレストランに飛び入り、莫愁女の石像や庭園を鑑賞しながら舌鼓を打っていた。

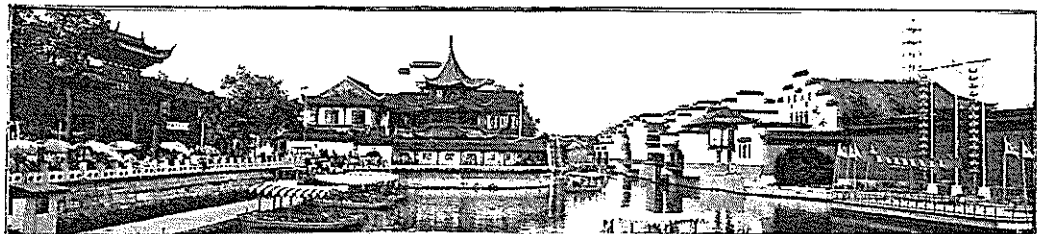
湖畔にはその外に賞荷亭、回廊、湖心亭、待渡亭、露天舞台などがあり、襟もとに吹く涼風を浴びながら蓮の名所として知られている湖面を眺め、しばらくの間、葉影の木漏れ陽の中を散策していた。(上は勝棋楼と湖水)

市街地を挟んで玄武湖と対応している莫愁湖公園は、周囲5㎞、水陸面積47㎢、湖面33㎢と小さいが、北側には呉の孫権が築いた石頭城の城壁も残り、三国志時代のゆかりの地として私を大いに魅了させてくれた。

今日は大安であろうか。莫愁湖の中でも結婚式を終えた新郎新婦が、記念写真を撮る微笑ましい光景に出会い、早速、私もカメラを向けていた。車は申申如とした莫愁湖に別れを告げ、輪奐の美の壮麗な街並みを通過して夕食場所に指定されていた酒家に着いた。(中国ではホテルは酒店、レストランは酒家)

しかしながら一行の姿は未だ見えていない。やむなく拙劣な中国語で私の立場を自己紹介し、寂々とした2階の広間で一人ぼっちで待機して、南京の単独行動は終わった。

夕食を済ませてホテルに戻り、虐殺記念館の空虚な思いに駆られながら我が年齢など歯牙にもかけず、再び南京を訪問したいという欲望が湧いていた。



9月17日

(日) 晴

馬鞍山・采石磯 (下図参照)

今日は先ず南京西南方約80kmの揚子江岸に位置し、詩人・李白の終焉の地として知られている馬鞍山市と、采石磯の観光から始まることになった。

習慣は恐ろしいもので旅の疲れに拘らず早朝の5時には目を覚まし、ゆっくり朝風呂につかって肩と膝に膏薬をはり、亀井氏から贈られた昭和正史を読み耽っていた。

大都市の静寂な朝の空気は建築の槌音の響きで破られたが、雲一つない快晴の秋空はどこまでも高く、波に乗った高度成長に押された労働者たちは、怠け者であった昔の姿を完全に一掃して働いていた。

朝食を済ませてバスに向かうと、昨日のハイヤの運転手が穏やかな笑みをたたえて近づいてきた。思い出は最高の宝だとお礼を述べ握手を交わした。

南京郊外からバスは高速道路に入ったが束の間で、約10分ほどで再び一般道路となり、一直線の街道を馬鞍山市に向かって驀進した。小一時間もすると安徽省に入り、煙を吹き上げた煙突が林立する工場群が見え出した。これが馬鞍山市であった。

この街は恵まれた豊富な鉄鉱石が埋蔵するため、江南における新興の鉄鋼の町として躍進を続け、中国の10大鉄鋼都市の一つであった。

長江沿岸は南船北馬のとおりの湖沼が多く、馬鞍山市も例外でなく湖が点々と拡がり、湖の向こう側に馬の鞍の形をした山が見えていた。(右は馬鞍山の光景)



伝説によると楚と漢の戦争(項羽と劉邦)のとき、楚の霸王・項羽は垓下(ガカ)の戦いに破れ、敗退して長江対岸の烏江(上図参照)に落ち延びると、年老いた漁夫と遭遇した。

項羽はその楚人の老漁夫に愛馬の騅(スイ)を与えて自ら首を刎ねると、主人を愛す騅は水の流れのように長くいななき、馬の鞍が地に落ちて山となったと言う。馬鞍山市の名称はこれに由来すると伝えられている。

上記の伝説は馬鞍山市地方誌室編に記載されているが、同時に日本軍侵略者もこの街を占領し、住民を埠頭の使役に使ったと書いていた。しかし南京のように殺害したとは全く書いておらず、南京大虐殺30万人は益々疑問である。

中国の三大ストーブ地帯と言われる暑気炎熱の馬鞍山市は、日陰を作って暑さを和らげるためにプラタナスの街路樹を延々と植林していた。又、「鋼鐵我心中」の大幅看板を高く掲げ、3匹の馬の銅像を立てて馬鞍山のイメージアップに懸命であった。

しかしながら、驚いたことには街路の各所に「淋病梅毒」の張り紙が貼られていた。戦中戦後を通じて私は中国でこのような広告を目にした経験はなく、それほど性病が蔓延しているとは予想外のことであった。

高度成長によって賃金が上昇して生活が豊かになったが、見る通り娯楽施設が少ない中国では、昔の皇帝の淫楽を真似したように性の開放が先走り、残念ながら性病天国に墮落したのかも知れない。

采石磯 (下図参照)

采石磯は原名を牛渚磯と称し、翠螺山の麓に位置している磯である。

高さ約50呎の山が長江に突き出し、その景観を古の文人墨客は「千古一秀」と美称していた。

そのため岳陽の「城陵磯」と南京の「燕子磯」と共に「長江三磯」と絶賛している。

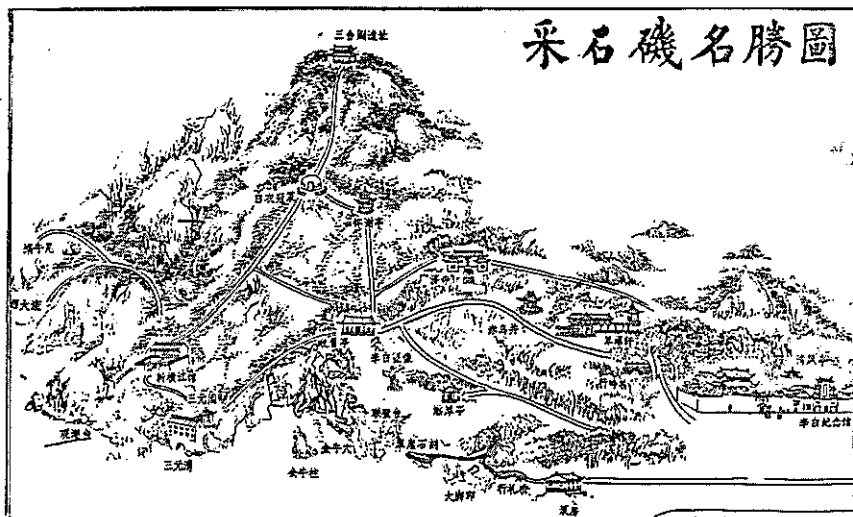
1400年前、南朝・梁の詩人・王僧孺は、山々が相對峙するように聳えて楓林は画の如し、と誉めちぎり、唐代の大詩人・李白もまた絶壁が巨川に臨んで連峰は相い向かい、流れに乱石があって波浪をたてている、と称賛している。

采石磯には悠久の歴史があり、秦漢の時代には「牛渚岩」、五代以降は「采石磯」「牛渚磯」などと称されていた。

昔は崖の下、の洞窟の中に金の牛が出没する渚があり、洞窟の傍らの石柱を金牛柱と呼んでいた、と伝えられ、その魅力に引かれて遊客が訪れたのである。長江の天險の要衝である采石磯はまた、古代から歴代兵法家の争奪の地となり、たび重なる戦場となっている。

三国時代の呉の名将・周瑜はこの地に軍を駐屯させ、金に破れた北宋が采石磯でも大敗を喫した古戦場でもあった。

(右の写真は長江に山の断崖が突出している采石磯)



「太白楼」

長江に臨んで翠螺山を背にした「太白楼」は壮観な古い建築で、湖南の岳陽楼(岳陽)、湖北の黄鹤楼(武昌)、江西の藤王閣(南昌)と並び称されている「長江三楼の一閣」で、太白楼は風月江天の美を備えていると言われている。幸い私は上記した楼はすべて見聞したが、岳陽、黄鹤、藤王には到底及ばない。



太白楼の原名は「謫仙楼」と言い、唐の元和年間の創建である。明の正統5年（1440）に再建して李白の像を祀り、清の康熙元年（1662）に太平知府（この地の当時の知事）が大修理をして「太白楼」と改名した。しかし咸豊年間に戦火に遭い、現在の建物は光緒3年（1877）に再建されたものであった。（前頁下の写真）

「唐李公青蓮祠」と書いた門額をあげた太白楼は、門の横に一對の石の獅子が据えられていて、緑の山々に囲まれた風雅な世界の空気を吸うと、誰でも俗塵の心が拭われるような感じがしてくる。

「太白楼」「謫仙楼」の扁額（横に長い額）のあがった主楼は三層で、屋根は黄色の琉璃瓦で葺かれ、楼内の正面には波浪の上に立つ李白の石刻の像が壁面を飾っていた。（太白楼は前頁采石磯名勝図の右下にある李白記念館の中にある）

主楼の後方は「李白祠」となっており、金文字の「李白祠」と「気蓋天下」の二枚の扁額があがっていた。祠の正面には黄楊（ツゲ）の木で彫った李白の立像が立ち、像の両側の柱に「蓬萊文章建安骨」と「青蓮居士謫仙人」の聯詩が見えていた。この李白像は「一夫関に当たれば万夫も開くなし」といった気概が溢れていた。（右の写真は黄楊で作った李白の立像）



李白の像を眺めて思い出されるのは、「百年三万六千日、一日須傾三百杯」という詩であった。人生百年を生きたとしても、その百年は三万六千日しかない。だから一日せめて三百杯の酒を飲むがよろしいと言う意味だが、酒の全く飲めない私でも、その心には共感するものがある。

李白祠に続く東側は「李白記念館」となっていた。最初に目に入ったのは1964年、郭沫若がここを訪れ、主楼の三層に登って詠んだ長い詩であった。その他にも歴代の名人の詩や碑刻、絵画、それに李白の研究家たちの著書が沢山みえていた。

（李白の墓は李白祠・記念館ではなく、青山の李白墓園にあるために訪れていない）

「燃犀亭」（前頁名勝図の中央下）

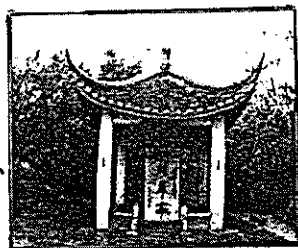
太白楼を出た一行は、茂った森の中の松籟を心静かに聞きながら、これこそ天然自然の美しい音楽だと感じつつ、翠螺山の急な小径を歩いた。その下には長江が浩々として東に向かって流れ、その景観を眺める絶好の場所に小さな燃犀亭が立っていた。

燃犀亭は清初めの創建であったが毀れ、現在のものは清の光緒13年（1887）に水師提督の李成謀が再建したものであった。

四本の石柱の方形の亭は古典的な造りで、中に「燃犀亭」の三文字を彫った石碑が立っている。

燃犀亭の由来は、東晋の咸和4年（329）に驃騎將軍の温嶠が叛乱を鎮圧して武昌から采石磯にきたとき、川の水深が分からないばかりか、怪物が出没することを聞いた。

將軍は部下に命じて犀の角を燃やして水底を照らすと俄然、深い水中に魚龍（伝説上の動物で長形、有鱗、有角）が泳いでいた。（右の写真は燃犀亭）



この燃やした犀の角を水の中に投げ込んだところ、この奇怪な動物はどこかに消えてしまい、流れが静かになったという伝説から、この名が付いたのであった。そのために崖下に李成謀が書いた「天下太平」の四文字の石刻が立っている。

高さ数十 仞の長江の断崖上に立つ燃犀亭から、滔々として流れる大河を見下ろしていると、心の中に満足を感じていれば、どんな境遇でも楽しく感じるものだ気がついてきた。これが天下泰平であろうか。

「聯壁台」 (29頁名勝図の中央下)

燃犀亭から少し険しい小径を登っていくと絶壁の上に大きな岩石が横たわり、その岩石の表面に「聯壁台」の三字が浅く刻まれ、薄く朱が塗り込まれていた。ここが李白の終焉の地だと思ふと感慨無量で声なしであった。



(右は聯壁台と刻んだ岩石と長江)
原名は「捨身崖」又は「捉月台」と称していた。伝説によると李白はここで酒に酔い、月を捉えようとして長江に飛び込み、鯨に乗って昇仙

(死) したという処である。真実の程は知らないが自然の偉観と歴史上の幾多の故事が、文人墨客の好題目となったのではないだろうか。しかし旅人の胸に感興が油然而として湧いてくるものがあつた。

明の正徳14年(1519)、太平知府(知事)などの4人の知事と一人の部長が采石磯を遊覧し、崖の上に登った際に見た「捨身台」という名称を嫌い、5名が聯つて(聯と連は同意語、読みも同じ)壁を登った意味で、聯壁台と名付けたのである。

唐代の詩人・白居易は采石磯を通ったとき、李白の墓を参拝して次のような詩を詠んでいる。

『生前は淪落(チノ)していたが死後、その輝きを残した。李白の天を動かし、地を動かす詩文は中国の宝であるばかりか、世界の精神的な富として永遠にその光を放つであろう』と。

私も聯壁台から雄大な長江を眺め、昔の人も今の人も凡て人間の流れは、水の流れのように過ぎ去っていくのだ、と静かに佇んで見詰めていた。

「蛾眉亭」 (29頁名勝図の中央下)

聯壁台から崖の上を縫うように伸びる小径を上ると、山を背にして長江に面した崖の上に長方形の蛾眉亭が立っていた。この亭内には蛾眉亭の石碑や文人が遊覧した時に詠んだ詩が見えていた。(右の写真は蛾眉亭)

蛾眉亭は北宋の熙寧3年(1069)、太平州知事が創建したもので歴代朝廷は修復を続け、現在のものは民国の



23年（1934）に再建したものである。

蛾眉亭の名の由来は、昔の人が山川雄麗なこの絶壁の上に立って見ると、眼前に東西の二つの梁山が長江をはさんで相對峙し、その姿態の美が蛾の眉のようであったから、その名を付けたと言われている。

西の梁山は対岸の和県にあり、東の梁山は当塗県（馬鞍山の西）にあって、巍然として對峙する景觀は天門のようで、東西の梁山を合称して天門山と称している。

李白は天門山を望むと題して次の詩を詠んでいる。

『天門中斷して楚江（長江）開く 碧水東に流れ 此に至りて廻（メ）る 兩岸の青山相對して出づ 孤帆一片 日辺（ツバ）より来る』

「知者は水を楽しむ」と言われるが、詩人は羽が生えて仙界に登るような心境になって、このような詩が湧いてくるのであろう。羨望するばかりの私などは、水が滔々として流れる間に日本は戦いに破れ、勝った蒋介石も台湾に逃亡し、中国本土は共産党の天下になった位の感想しか湧いてこない。

残念ながら葦の葉のような小舟が流れにまかせている光景も今は見られない。ただ李白の「天地は万物の逆旅（覬）にして、光陰は百代（秋）の過客（歎）なり」と詠んだ詩を思い浮かべながら、山を降りていった。

采石磯の観光を終わった一行は市の北方にある馬鞍山に登り、山頂にあった眺望豊かな馬鞍山賓館で昼食を摂ることになった。

浩然（広大）の気（気象）とは、仁義が充実して博大な実行力だと孟子は説いたが、年老いた現在では全くその気概はなくなってしまった。江南の佳麗な地もまた蒼空に黒煙が立ち昇って鉄鋼の街と化し、浩々として流れる長江だけが悠久であった。

馬鞍山・采石磯を去るに当たって、54才になった李白が詠んだ有名な詩を記して彼を偲ぶたい。

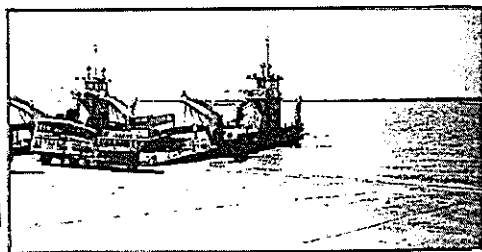
『白髪三千丈 緑愁似箇長 不知明鏡裏 何處得秋霜』

「我が白髪は三千丈、愁いのためにこんなに長くなったのだ。一体この鏡の中の秋の霜は、どこからやってきたのか」

我が身と照らし合わせて宜（が）なるなかである。

昼食を済ませた一行は馬鞍山を降りた。これから長江を渡り、日本人観光客が訪れたことがない安徽省北部の、霸王たちが活躍した歴史街道に向かうため、馬鞍山市東方にある埠頭へと移動した。

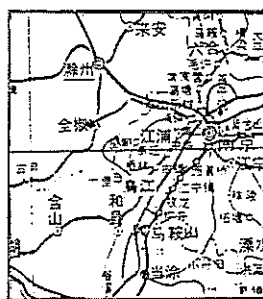
この長江の渡し場が彼の有名な「烏江の渡」で、今は鉄鋼搬出港の要所として知られている。（右の写真はフェリーにバスが乗船する光景で、我々はここから長江を渡った）



烏江の渡し (下図参照)

埠頭には「汽渡」の看板が川岸に立っていた。これは自動車を積んで対岸に渡るフェリーの乗降船場の意味で、現在でも渡し場の利用価値は大きいようであった。

項羽の終焉の地として名高い「烏江の渡し」は武士の涙を誘うものがあり、辺り一帯は雲が垂れ下がって煙霞が立ちこめている景色を予想してきたが、豈図（アハ）らんや、天気晴朗にして波は静か、長江に吹く清風を心地よく浴びながら江南の地に別れを告げた。



旅行社のパンフレットの地図には「烏江」を「垓下」と印刷し、注釈の文章にもまた項羽と劉邦の決戦の地として有名な「垓下」に立ち寄ると説明されていた。

私は今朝南京のホテルを出発した直後、今日訪れる図上の地点は垓下ではなく烏江だと、添乗員に注意をうながして訂正を勧告した。

会社の印刷は絶対に間違いないと信じている添乗員は、怪訝そうな顔をして私の言を信用せず、早速、中国人のガイドに聞きに走っていった結果、小さな声で私が言った通りだと耳打ちしてきた。しかし感謝の意を表す一言も返ってこない。

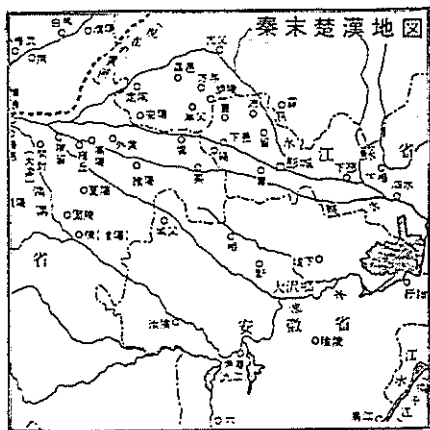
旅行社も添乗員も勉強不足である。地図を開いて歴史と地理を照らし合わせて学ばなければ、地歴の学習にはならない。特に名称も変わり地形も変わる中国では（大河の流れが変わる）尚更である。50数年前の支那時代から足跡を残した我々の言を素直に受け止めるべきであり、何と嘆かわしいことではないだろうか。

対岸に着き下船してバスに乗車すると添乗員は早速、今日は予定を変更して「垓下」ではなく「烏江」を見学すると告げたのである。会社の威信に関わることも知れないが、間違っていたことを予定を変更すると誤魔化すことは許されない問題だ。

「過ちを改むること憚（はか）ること勿（な）れ」である。更に憤慨に堪えないことは未だに、会社も添乗員も私の忠告に対して一言の挨拶もないことである。この程度の会社かと呆れるばかりだ。（右は項羽・劉邦時代の地図）

（烏江と垓下は直距離で300キロも離れており、予定の変更ではなく、完全な誤りである）

項羽が決戦で破れた垓下は洪沢湖（右の地図の中央右側の黒い部分）の西方で、項羽が垓下から南に落ち延びて揚子江の淵の部落にたどり着き、自刃したところが烏江である。後世の人はこの渡しのことを「烏江の渡し」と称したのであった。



烏江の所在地は安徽省和県で、秦の時代には歴陽県と称し、和県となったのは民国の初期であった。

項羽を祀る「西楚霸王霊祠」の参観の前に、極く簡単に項羽と劉邦の出で立ちと、「垓下」「烏江」の戦闘の概要を記述しておく。

「項羽と劉邦」

屈原（戦国時代の楚の王族・詩人で汨羅（ベリ）で投身自殺）亡きあと、楚と秦は相変わらず戦ったり、和を結んだりしていたが、前223年、楚は秦に滅ぼされてしまった。そして秦の始皇帝が天下を統一することになる。

楚の項梁（コリヤ）は兄の子・項羽とともに兵をあげ、楚の懷王の孫を捜し出して楚王とした。秦が滅んで群雄割拠する中で諸将が約束したことは、先に関中（現在の西安を中心とする一帯）を占めた者が天下の王となる、ことであった。

項羽は沛（ハイ、駐喲州防）の人・劉邦と争い、劉邦が先に函谷関（西安東方）に入って秦の二世皇帝を捕らえた。その時、勢力の強かった項羽は劉邦を呼び出して「鴻門」（西安と函谷関の間）に会し、劉邦を殺そうとした。しかし劉邦は危うく難を逃れた。一方の項羽は楚王を殺して自ら西楚の霸王となった。

両者は長いあいだ戦ったが、最後に項羽は劉邦に垓下の戦いで負けを喫した。その時に有名になった言葉が「四面楚歌」である。項羽は四面楚歌の帳（バリ）の中で舞い、「虞（グ）や虞や若（ナジ）を奈何（イナ）せん」（虞は妻の名）と楚調の歌を唄い、その後、烏江まで逃れて死んだのである。

「垓下～烏江の戦い」

項羽と劉邦は約5年間にわたる一進一退の戦闘ののすえ、彭城（ホリョウ 駐喲徐州・顔の地）で敗れた項羽は最後の決戦場を垓下に選んだ。

その理由は、垓下の中心部には険しい岩山が聳え、幾筋かの流れがあって要害とすることができる、と考えたからである。

漢軍（劉邦軍）が戦場に到着したのは約1ヶ月後で、垓下の防御陣地はほぼ完了したところであった。しかしながら兵力は漢軍は30万以上で、項羽軍は10万たらずであった。

垓下の城内は日に日に息苦しい緊張が高まり始めた。その膠着状態を破ったのは韓信の軍（劉邦の隷下）で、鐘太鼓を打ち鳴らして城壁に向かって押し寄せた。

その時、項羽軍は城門を開いて逆襲を敢行し、韓信軍を分断して劉邦の本陣に迫った。しかし韓信軍の左翼軍が項羽軍の側面を攻撃したため後退を余儀なくされ、漢軍は猛烈な反撃と追撃をくり返した。

疲労困憊した項羽軍は大きな犠牲を出しながら城内に引き返した。項羽が城壁の上に登って激戦の跡を見渡すと、味方の死体が累々と折り重なっていた。

翌日もほとんど同じような戦闘が繰り返され、朝方、城内から出撃した項羽軍は昼頃には半数に減り、日が落ちるころには一人も見当たらなかった。

その日も項羽は城壁に登り、城壁から降りてくる部下に「今日はゆっくり休め」と声をかけ、自分は寝所の方に歩いて行った。静まりかえった深夜になると漢軍の陣営から、項羽の祖国・楚の歌が聞こえだし、その声は包囲する敵陣の全部に拡がった。

すると「自分の故郷はすでに劉邦に奪われたのか。そうでなければ敵の包囲陣にそれほど多くの楚の人が居るわけがない」、と項羽は頭を垂れて四面の楚歌に耳を傾けた。これが「四面楚歌」の由来である。

項羽は部下に別宴の支度を命じた。対陣すること既に1ヶ月余りで兵士の数も少なくなり、酒も肴も尽きかけていたから、準備には長時間はかからなかった。

項羽は常に陣中にともなっていた愛妻の虞（グ）美人と共に、席に臨んで口を開いた。「もはやこれまで。命を粗末にするな。最後まであきらめることなく、運を天にまかせて何方（いかな）へなりとも落ちのびよ。よいか」と叫んだ。

黙って盃を重ねたすえに項羽は眼を宙に据えるようにして、颯々（ソウソウ）として歌い出した。

『力拔山兮氣蓋世 時不利兮騅不逝 騅不逝兮可奈何 虞兮虞兮奈若何』と。

「兮」（ケイ、ガイ。韻を附する）「騅」（スイ。騅の名）

「力山を抜き氣は世を蓋（おほ）う 時に利あらず騅ゆかず 騅ゆかざるを奈何（いかな）すべき 虞や虞やなんじを奈何せん」

項羽の歌にこたえて虞姫も泣きながら歌った。一座の殆どの者が泣き出し、顔をあげることが出来なかったが、虞姫が歌い終わると、項羽は「さらば！」と騅に飛び乗って、まっしぐらに駆け出した。部下もまた馬に乗って後に続いた。

この知らせを受けた劉邦は即刻、「項羽の首をとった者には何人によらず、黄金一千枚に加えて一万戸の封地を与える」と全軍に布告すると共に、追撃を命じた。

垓下を出るときには800騎余であった項羽の軍勢が、淮河（ワイガ）を渡る時には100余騎に減り、東城（現在の定遠）にたどり着いた時には28騎に激減した。

項羽はこの28騎を4隊に分けると、「私が兵をあげて以来、戦ったのは70数回に及ぶが、まだ一度も負けたことがない。しかし今こんな破目に追い込まれているのは、天が我を滅ぼそうとしているからで、決して弱いからではない」

そう言って4隊に突撃を命じ、自分もその1隊を率いて敵軍へ突っ込んでいった。その勢いに敵が後ろへさがると、馬首を返して前もって決めていた場所へ戻った。同じことを3度も繰り返したが、突撃戦の犠牲者は僅か2騎であった。

限界にきた項羽は残りの26騎を率いて、揚子江の淵の烏江の集落に辿り着いた。すると思いがけなくも年老いた楚人の船頭が、「この舟にお乗り下さい」と渡し船を用意して待っていた。

騅から下りた項羽は「私は昔8000人の若者を率いてこの河を渡った。しかし今はこれだけだ。どうして彼等の年老いた父母に顔を合わせることが出来ようか」、と言って船頭のそばに歩み寄った。

「それよりもこの馬を飼ってもらえないだろうか。殺すのは哀れだ」と告げた。項羽の部下たちもこの様子を見て馬から下りると、そこへ追撃してきた敵は喊声をあげて殺到してきた。

項羽は悠然と敵の方に向き直ると、「行くぞ」と叫んで歩き出した。部下たちも項羽を包むようにして歩き出すと、敵は襲いかかつてきた。項羽たちは円陣を作って対抗し、追い散らしては円陣に駆け戻り、幾度となく繰り返した。

項羽は身に10数箇所も負傷し、たった一人になっても部下の死体の間に立ちほだかっていた。しかし敵兵は遠回しにして矢を射るだけで接近しようとしなかった。

項羽はその時、敵兵の中に同郷の男の騎司馬（軍馬の管理職）呂馬童を見つけた。「呂ではないか」と叫んだが、呂は項羽の凄惨な姿に吞まれて返事もできない。

項羽は「わしの首に大金がかかっているそうではないか。同郷のよしみで、この首をお前にくれてやる」と言った瞬間、自分の首に剣を押し当てて自刎した。

見守っていた敵兵は項羽の死体を奪い合い、結局、呂を含む5人の者が5つに引き

裂き、劉邦のもとに届けた。劉邦はその5人を諸侯に封じ、1万戸を5等分して彼等に与えたのであった。

時は紀元前202年、項羽はまだ31才、彼の凄惨な最後が7年にわたる戦乱に終わりを告げたのである。

劉邦は「漢」の帝位に就いて都を長安と定め、項羽の遺骸を穀城に葬って蓋世の英雄の冥福を祈った。

垓下で自害した虞美人の塚の上に、血のような真っ赤な罌粟（ケシ）の花が咲いたのも、その年の夏であり、人々はこの花を「虞美人草」と呼ぶようになったと言う。

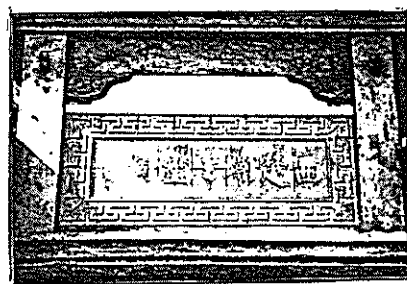
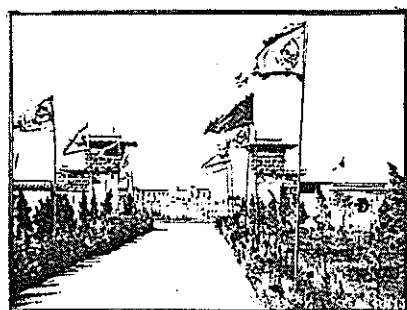
西楚霸王霊祠

大河の雄姿を横たえた烏江の渡しから和県の土を踏むことになった。兎に角、人生には別れが多いと感じていると、右手前方に広大な土地を囲んだ石の塀が見えてきた。

この敷地が土地の人たちが「烏江霸王廟」と称す項羽を祀る廟祠で、小さな廟祠だと思っていた私の予想は完全にはずれてしまった。

「人生自古誰無死」（人生古より誰か死なからん）と文天祥の詠んだ言葉をいやと言うほど体験し、死闘戦場を駆け巡った私は一瞬、陶然として己の存在を忘れ、人生ははかない夢だと感じながらバスから下り立った。

1984年に創建したこの祠は、將軍廟らしい堂々とした重厚な正門を構え、時が移り世が換（カ）わっても、將に將たる英雄は永久に竹帛にその名を垂れていた。（右上は正門と参道の景観）



南に向かった参道の両側には色とりどりの鶏頭の花が延々と続き、千軍万馬の將を称えるように軍馬を描いた三角旗が、川風になびいていた。

参道を左に折れて反転するように北に向かうと大理石の牌坊が立ち、鮮やかな金文字で「西楚霸王霊祠」と刻まれていた。昔から英雄にも盛衰があったように寂々として人影はなく、門前に一對の石獅子が護っていた。（上の下の写真は牌坊の額）

伝説によると明代の末に夜になると盜賊が現れ、霸王の王冠の宝石を盗もうとした。ところが石の獅子が大吼三声して噛みつき、廟内の和尚たちが盜賊を捕らえたと言われている。

烏江の人たちはこれを「韓信の無情」と、石獅子にも「忠義」があるのだと解釈している。（韓信は初め項羽の部下であったが、後に劉邦の部下になって項羽と戦った名將である）

牌坊の後方に建っている大雄宝殿には、「享殿」の扁額があがっていた。享殿とは「神を祀る殿」の意で、他では余り見掛けない扁額であった。

享殿（キョウデン）の中央には「叱咤風雲」の扁額が上がり、その真下に鎧姿の項羽像が仁王様のように立っていた。

そして殿内で私の眼を引き付けたのは、殿の周囲の壁を埋めつくした項羽の生涯を物語る彫刻で、まるで博物館か歴史館のようであった。（右上の写真は享殿の全景）

中国人のガイドも彫刻された項羽の歴史をよく知らないようで、私に各彫刻の画の説明を求めた。（右の写真は項羽の立像と扁額）

誰でも明瞭に理解できるのは、項羽と劉邦が会した「鴻門の会」の彫刻であった。劉邦を殺害しようとする項羽の部下の剣士が、剣の舞いをおどし、これに対抗して劉邦の生命を護ろうとした部下の樊噲（ハンカイ）が、立ちはだかっている場面である。

次いで明瞭な彫刻は、劉邦軍に垓下で敗れた項羽が揚子江の淵にある烏江に辿り着き、渡し舟を用意してくれた楚人の船頭に、愛馬の騅を依頼して自刃する場面であった。

その他、垓下で敗戦を喫して敵陣から楚歌を聞いた「四面楚歌」の状況や、虞美人の別れの舞い、28騎となっても勇戦敢闘する場面、烏江の涙ぐましい最後の決闘など、何れも累卵の危きに似た乾坤一擲の様相ばかりで、涙を誘うものばかりであった。

（右は剣の舞から劉邦を護った鴻門の会）

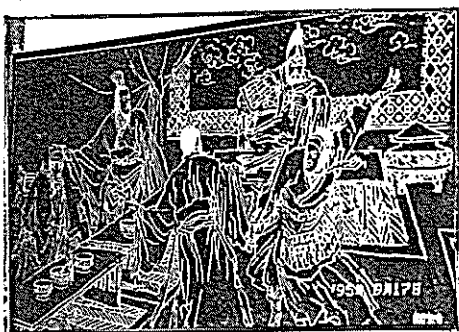
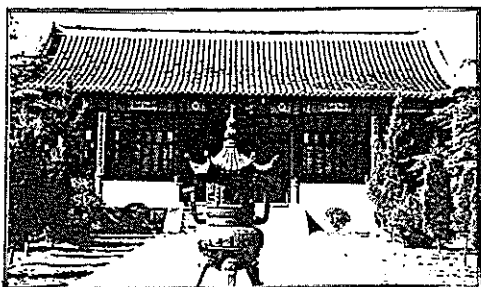
殿内にはまた「項羽と虞美人」の雛人形や、虞姫に別れを告げる場面を表した人形など、彼の一生を物語った人形が一面に飾られていた。

（右は烏江で船頭と会って自刃する項羽）

享殿の中で最も私を感動させたのは烏江の渡しで、中でも「たとえ故郷の父兄たちが敗戦した私を哀れみ、もう一度王にしてくれると言っても、私は何の面目があって彼等に顔を合わすことができようか」と、自らの首をかき切った時の言葉であった。

そして又、『天亡我 非戦之罪』（天は我を亡ぼすなり。戦いの罪に非ず）と言ったと伝えられているが、正に千軍は得易く一将は求め難しである。

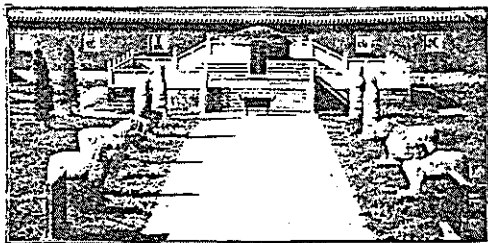
享殿を出て北側を眺めると項羽を祀る広い墓地が拡がっていた。（右は項羽と虞姫の人形）



項羽の墓地は中国の各皇帝の陵墓と同じく石人石獸が並び、その後方が陵丘となっていた。項羽は西楚の霸王と自称した將軍だったことを考えると、破格の待遇であった。

（右は石人石獸が並ぶ項羽の陵墓の）

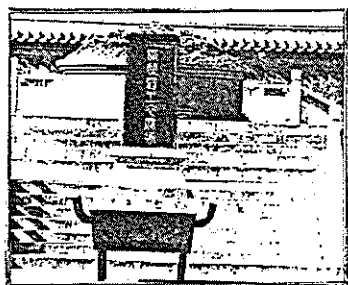
参道の下には地下道が設けられて陵丘の前にまで通じ、柩には彼の「服と帽子」が祀られていると言うことであった。



陵墓を取り巻く塀には「力拔山兮氣蓋世」

と、垓下の戦いに敗れた時に項羽が詠んだ有名な詩の一句が、悲しみを思い出さすように書かれていた。（上の写真の後方に「力拔山兮氣蓋世」の字が見える）

古代の中国の王者たちは壮大な詩を作ったが、項羽の詩はとりわけ感情の表現が激しいように感じられる。一方のライバルだった劉邦もまた「大風起こり雲飛んで揚がる」などと詠んでいるが、彼等兩人の人生はもちろん戦場であった。



陵墓の拝観が終わって牌坊のところまで引き返した。すると、ひっそりとして物音一つしない静寂の中から鶏の鳴く声が聞こえ、長江の淵の静けさは無限の「雅趣」

（上品で風流）を喚び起こしていた。（上は西楚霸王墓塚と書いた墓碑と陵丘）

牌坊の石段を降りたすぐ下にある小池の淵に、一本の柳の大樹と石碑が立っていた。ここが項羽が愛馬の騅を繋いだ所だとされており、歴史物語を墓苑一杯に現わし、演出は満点である。それだけ烏江の人たちは彼を偲んでいるのであろう。



（右の写真は愛馬の騅を繋いだ柳の木と石碑）

ガイドが最後に案内したのは境内の西側に建っている鐘楼であった。吊してある鐘は蘇州の寒山寺の鐘よりも少々大きいのが、見学するほどの価値はないように見えていた。

この古鐘楼は明代・万暦年間に霸王祠を建設した時に大修理した鐘楼で、暴風雨の荒れ狂う時でも鳴らし続けてきたと言われている。

伝説によると、何処か知らない所から一架の神鐘が飛来した。廟の和尚はこの鐘を楼の上に据え、夜半に床から起きて読経したのち、31回の鐘を打ったと伝えられている。この31回というのは項羽が31才で自刃したからであった。

過去のことが、老百姓たちが霸王の項羽を偲び、毎年3月3日を霸王会と定めて多くの人が此処に集まり、項羽の木造を龍の舟に乗せ、太鼓を打ち鳴らして村の周りを回った。

ある一つの村では千万の群衆が木像の後に従い、香をたき、頭を地面につけて祈禱すると、霸王の木像の額から汗が流れ出た。これは火災の兆候だと幾10里西方の老若男女が集まり、扇をあおいで汗を乾かすと災害はおこらなかった、と言われている。

又、清の道光29年と民国20年には、霸王の木像の頭から雨のように汗が流れ出た。この両年は大水害に見舞われたと伝えられている。（伝説は和県故事集を参考）

烏江霸王祠～滁州(チョシュウ、33頁の地図参照)

項羽の部下たちは項羽に対し畏敬という以上の愛情を持っていたのと同様に、烏江一帯の人々がこれほどまでに、項羽を神の如く慕っているとは予想外のことであった。

同声相い応じて同気相い求める旅名人の一行は、平和な烏江の水郷を離れて担々として砥のような路面を走り、住民の希求する安居楽業の農村風景を眺めながら、進路を北にとった。

沃野千里の天与の穀倉地帯は稲刈りを間近にひかえていた。しかし今は「撃壤の歌」のような、「日出でて作(サ)し、日入りて息(イ)う。井を鑿(ウカ)ちて飲み、田を耕して食す」のような光景は見られない。

烏江から滁州までの約100㌾の間は、さっきまで厳しかった日差しも漸くおさまり、何時の間にか黒い影陰が地面に長く伸び、5時半には分離帯のある滁州市内に入っていた。

プラタナスの街路樹が繁った4車線の街道には美しい街灯が延々と続き、十字路のロータリーには花が咲き乱れ、裕福そうな新興の田舎都市の感じがしていた。

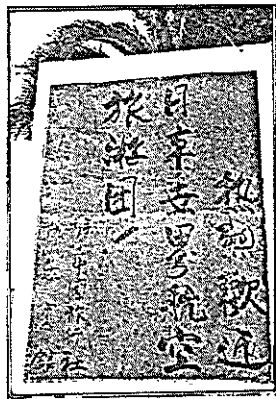
図らずも私が住む市と隣接する小松市と滁州市とが、昭和62年以来、経済交流の道を探りつつ将来は友好都市を結ぶという話があり、何となく近親感のようなものを抱いていた。

滁州市は小松市と同じく「い草」の産地である他、電子、合板、紡績、自動車などの工業が盛んで、現地ガイドはクーラーの町だと自慢しながら、街の紹介をしていた。

テレビ塔が見える交差点を右に折れ、田舎街らしい雰囲気が充満する市中を走り、工場の門のような門柱を通過して辿り着いたところが「揚子賓館」であった。

爆竹の大音響が辺りの静けさをやぶり、バスの中まで響いてきた。中国独特の歓迎ぶりは、戦時中に隊長を出迎えた大群衆の歓迎のようで、懐かしいと表現するか、驚天動地というか、名状し難い歓迎ぶりであった。

バスを降りて狭い通路を通りホテルの玄関に着くと、ミス滁州であろうか、赤いタスキを掛けた美人が笑みを浮かべて出迎え、その横に赤地に黒で「日本世界航空旅行団、熱烈歓迎」と書いた幕が立っていた。



(上の左は出迎えた美人、右は歓迎の赤幕)

「日本世界航空旅行団」というのは、我々が参加した旅行社名が「ワールド航空」であったからだが、日本人の団体旅行客を迎えるのは我々が最初のため、正に熱烈歓迎であった。それに加えて地元のテレビ局も亦、ハンドカメラを我々に向け、泡を食った驚きの余り私も嬉笑でもつて応えていた。

人口388万人のうち310万人が農業に携わっている滁州は、日中戦争の時には蒋介石軍の空軍拠点の一つに数えられ、そのため日本軍も爆撃もしている。しかし今

日では幸いにそれを知っている老人は少ないようである。

滁水の支流の小沙河の岸にあるこの街は、鉄道と水運に恵まれて交通の要衝をなしているが、付近の農産物の集散地に過ぎない田舎町である。そのためホテルの設備も粗悪であったが、熱烈歓迎の心だけで十分我々に満足感を与えてくれた。

規模が小さいホテルの夕食は別棟まで歩かなければならなかった。暗い中を歩いていくと先ほどの爆竹の匂いが未だ残っていた。その時、不思議なことに、世界最初の火薬の発明は唐時代だったことを思い出した。火薬ばかりではなく印刷術や製材技術（紀元前2世紀）も、中国が世界最初であったことまで脳裏に浮かんできた。

食事が終わって空を見上げて見ると、白く快く晴れた清らかな星空には天の川がくっきりと浮かび、明日もまた快晴疑いなしであった。早速個室に入って例の如く時間が勿体なくて歴史書を繙いていた。

街の近くに「清流関」という遺跡があったが、ここは後周の末、趙の匡胤（キョウイン）が南唐主李景の軍15万を破ったところであった。

また元の末期、この地出身の郭子興がここで挙兵して、明が元を滅亡させる第一声をあげた所だ。郭子興の挙兵こそ後の明の太祖・朱元璋の偉業に大きな影響を与え、そのため明朝は特に郭子興を大切に扱い、その生地滁州を優遇したと言われている。

9月18日（月）晴 滁州

午前3時、中国戦線を思い出させるような鶏鳴で眼を覚ました。昨日、烏江の項羽を祀る霸王祠で購入した670頁もある分厚い本（和県民間故事集）に目を通し、項羽や朱元璋などの旅路に関係した部分だけを抜き取り、目方を軽くするために時間を費やしながら、夜明けを待っていた。

終了した時分には小鳥のさえずる声が鼓膜を刺激しだし、「鳴鶏吠狗 烟火万里」の感じが漂う街は、自然に私を手招くように引きずり出していた。

悠々散策だとホテルを出ると鶏が10羽ほど遊んでいた。門柱の外の広場には20人ほどの人たちが集まり、太極拳ではなくラジオ体操に似た柔軟体操をやっていた。

地理不案内から市の中心部と思われる方向に歩き出すと、この街にも性の開放を謳歌するように、「淋病梅毒」の貼り紙が見えていた。又、急速な発展のため人手不足であろうか、家政婦募集の貼り紙まで貼ってあり、今まででは考えられないような発展を証明していた。

大通りに出たところにあったアパートの建ち並んだ十字路に、いろんな物を露天に扱った俄か朝市が開かれる時であった。初めて見る外国人の私は彼らの注目の的となり、自然に急いで角を曲がって立ち去った。

清々しい早朝の冷たい空気を胸の奥まで吸い込みながら街を歩き、ふじ豆の紫の花やヘチマの黄色い花が咲く農村都市を眺め、発展の現状を視察して帰館した。

朝食は珍しく小豆粥（アヅキゴ）のご馳走で、どこまでも田舎の特色を最大限にいかす意欲は、我々観光客の心を刺激し、感動一杯であった。

琅琊山 (ロウヤザン)

安徽省第2の工業都市・滁州の西南約5kmにある琅琊山は、滁州の唯一の観光名所である。唐の大暦6年(771)、滁州刺史(知事)の李幼卿が山を開拓して寺院を建てて以来、1200年の歴史をもっている。

琅琊の名の由来は、東晋の元帝のとき司馬睿が琅琊王に任ぜられ、この地に寓居したという伝説から琅琊山と称し、山中の溪水を琅琊溪と言う。

北宋の政治家で唐宋八大家の一人である欧陽修は、滁州を環(ワキ)のように取り囲む山々の中で、最も美しいのが琅琊山だと称賛している。

彼は山水の楽しみを求めてこの山に入り、やがて智僊禅師が建てた東屋(アサキ)に隠居した彼は、醉翁の号をこの亭に付けた。この有名な琅琊山の観光に出発した一行は新興都市の町並みを通過して北西に進路をとった。

約10分後には鬱蒼として繁る木漏れ陽のさす林道に入り、左の深い谷底を流れる玻璃川を見下ろしながら、屈曲した急坂をバスは登っていった。(上は森林の景観)

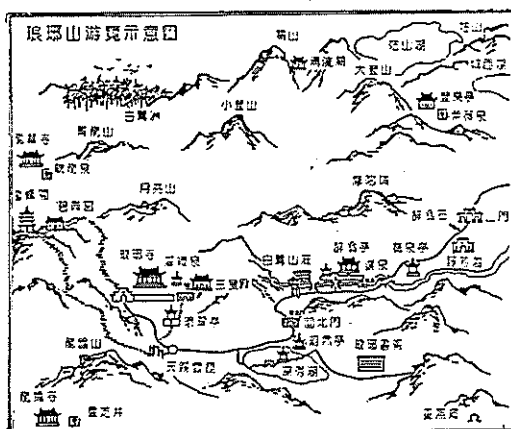
最高峰314mの琅琊山全体は国家指定の森林公園に指定されている。全山は森林が密生して緑のすぐれた景観を呈し、北宋の欧陽修がこの地に引かれて隠居したことが頷(ウツ)けるのであった。

森林公園道路の右手に見えた醉翁亭を眺めながら、バスは山が険しくなった石造りのトンネルを通り抜けた。

昔の信者はこの林道を喘ぎながら歩いたと言われているが、今でも三三五五と歩く中国人の影が見えていた。

バスは少々広くなった鬱々葱々とした地点で停車し、竹の葉がすれて音をたて松が枝を鳴らす山道を一步一步登った。行き着いた所に琅琊寺の古めかしい案内板が見えていた。(右は古色蒼然とした琅琊山の山門)

琅琊山の景勝古跡は5つの景勝区に分かれており、一行の観光は先ず琅琊寺景勝区から始まった。



(上は琅琊山の見取図)



「琅琊寺景勝区」

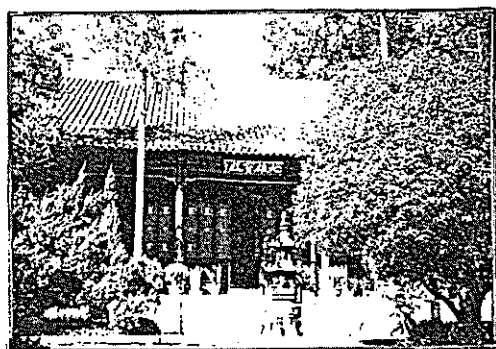
琅琊寺の創建当時（771）の名は「宝応寺」と称し、北宋乾徳年間（963～968）に増築され、宋の太宗から978年に「開化禅寺」の名を賜った。

元代末年に戦火によって焼失し、明の洪武6年に再建されたが再び毀れ、清の嘉応年間に再建拡充されて「開化律寺」と改名された。

太平天国の時期にも再び戦火に逢い、現在の建物の大部分は清の光緒30年（1904）のもので、1984年に滁州市は「琅琊山」と命名した。（琅琊山誌による）

琅琊は瑪瑙（メノウ）に似た半透明な輝石で、玉の鳴る声のさまを「琳琅」とか「琅琅」というから、この山には玉石が出るのかと思いながら大雄宝殿（本殿）の前に立った。

現在の雄宝殿は民国5年（1916）に再建された建物で、屋根の突出部は花や龍を彫った瓦が葺かれ、古朴で壮観な外観であった。（右は大雄宝殿）



宝殿の中央にある釈迦牟尼仏は文化大革命の時に破壊されてしまったが、1981年に安徽省政府によって再建され、蓮花の座上に安置された釈迦像の両脇にも、伽葉尊者と阿南尊者が祀られていた。

釈迦仏の背後には観音菩薩、その両脇に善財童子と龍女、殿の左右には18羅漢像が所狭しと安置され、琅琊の景勝地に相応しい構えを備えていた。

大雄宝殿の後方には何の寺とも同じように蔵経楼が建っていた。宋の仁宗の時（ぬわえあ）に創建されたが、これも元代に戦火に遭遇して毀れ、現在のものは民国8年（1919）に再建されたもので、小さな千仏像もある蔵経楼の正面に飾ってあった「三蔵玄樞」の門額は、燦然として輝いていた。（右は釈迦と伽葉・阿難尊者）



山門の入り口にあった遊覧図に描かれていたように、琅琊山には数え切れない殿宇や亭、堂があったが、我々は琅琊寺と琅琊山を重ね合わせながら印象に残し、更に私は一行より一足早く寺の境内を去って山を降りた。

（上記は滁州市発行の琅琊山誌を参考）

山を降りたところに居た老人の写真屋は、自分は67才だが大人は幾才かと尋ねながら、後生大事に保管していた年賀状を私に見せた。それは岐阜市の日本人からの年賀状であったが、これほど大切にしていることは驚きである。

口先ばかりの政治家などと違い、このような一般庶民の心の触れ合いこそ、将来に希望が持てる真の日中親善友好だと喜びを楽しみ合い、一行の下山まで会話を続けた。

「醉翁亭景勝区」

バスは琅琊寺から屈曲した急坂を下り、緑の茂みの中に垣間見える蒼々として神秘的な湖心湖を眺め、玻璃川のほとりに広がる古色蒼然とした醉翁亭の石門の前で停車した。

琅琊寺とともに有名な醉翁亭は北宋の応暦6年（1046）、琅琊山・開化禅寺の僧・智僊（ちけん）が、滁州知事の欧陽修のために建立したもので、欧陽修は同僚とともに此处に遊んで酒を痛飲し、彼が自ら「醉翁」と号したことから「醉翁亭」と命名された。（右は醉翁亭の正面玄関）



北宋の元祐6年（1091）、北宋の詩人、蘇軾が滁州知事の招きに応じてここを訪れ、詩を碑に書いてから世に伝わって有名になった。

醉翁亭の建った当初は一つの建物に過ぎなかったが、北宋の紹聖2年（1095）、滁州の人が当時の知事・王禹偁と欧陽修のために「二賢堂」を建てた。

その後、滁州知事たちは醉翁亭の周囲に聴泉亭、意在亭、影香亭、古梅亭、馮公祠等を建て、一大建築群となって醉翁亭の名声が全国に広がった。

これらの多くの建築物は900年の間に屢々破壊に遭ったが、宋代は勿論のこと明・清の時代に続き、人民政府になってからも修理され、現在まで保存されている。

「醉翁」の号の「醉」は、わずかの酒に酔うことで酔の心は酒にはなく、孔子の言葉に「知者は水を楽しみ、仁者は山を楽しむ」とあるように、呑んべいの意ではない。酔は酒にかこつけた言いぐさに過ぎないと言う。

醉翁亭景勝区は琅琊山麓の1ちにわたる深山幽谷の地にあり、淙々（水が音をたてて流れるさま）として水が流れて山は美しく、景観はすこぶる秀麗で、醉翁亭景勝区には35の名所と古跡が見られる。（醉翁亭記参考）



（右上は醉翁亭、奥に見える建物は二賢堂）

我々一行は高い石の塀に囲まれた醉翁院に入り、先ず右側にある醉翁亭に進んだ。この建物は前記したように北宋の1046年の創建だが、現在のものは清の光緒7年（1881）に再建されたものであった。

歇山式（か、榑）の亭には16本の柱が立ち、周囲には木の欄干が設けられ、花紋の装飾があり、八幅の「八仙過海」の木彫が施されていた。

亭の建物の横手にある山の崖に彫った、南宋時代の「醉翁亭」の大きな篆字が参観者の眼を引き付けた。その左にある「二賢堂」の崖刻とともに、亭前にある詩文と相俟って醉翁亭らしい雰囲気を出していた。（右は醉翁亭・二賢堂の崖刻）



一行の中には崖の下にある「醉翁亭」の篆字の前に寝転んで、写真を撮る者まで現れ、欧陽修も顔負けをするような光景であった。

醉翁亭の奥（前頁の真ん中の写真の奥に見える建物）に建っている建物が「二賢堂」で、前記した通り王禹偁と欧陽修を祀る建物である。

16本の柱が立つ3間の建物の中には欧陽修の塑像が立ち、欧陽修の全集も陳列され、堂の右側の崖には「雲根」の二字の篆字が彫られていた。（右は欧陽修の立像）



欧陽修は北宋の真宗1007年に生まれ、科挙の試験に24才で合格して仕官し、文章を以て天下に名声を博した人物である。前記のとおり39才の時に滁州知事に左遷され、その後、各州知事を歴任して最後は神宗のときに参知政事（副宰相）に栄進した。

醉翁と号し晩年には六一居士と号した唐宋八大家の一人で、66才で没している。彼は文章というものは「三多」、即ち多く読み、多く作り、多く考えること、また「三上」、即ち馬上、枕上、廁上で練られると説いている。

以上は醉翁亭記を参考として記述したが、「醉翁亭記」の一部を下記しておく。

『徐を環（ワ）りてみな山なり。その西南の諸峰、林壑（リンカク）尤も美しく、これを望むに蔚然（イゼン）として深秀なる者は、琅琊なり。山行六七里、漸く水声の潺潺（ゼンゼン）として両峰の間に瀉（ツ）ぎ出ずるを聞く者は、醴泉（ジョウセン）なり。峰回（ワ）り路転じて、亭有り翼然として、泉上に臨む者は、醉翁亭なり。』

亭を作れる者は誰ぞ。山の僧智僊（チゼン）なり。これに名づくる者は誰ぞ。太守自ら謂うなり。太守、客と来りて此に飲む。飲むこと少なくして輒（スナ）ち酔う。而して年また最も高し。故に自ら号して醉翁と曰う。

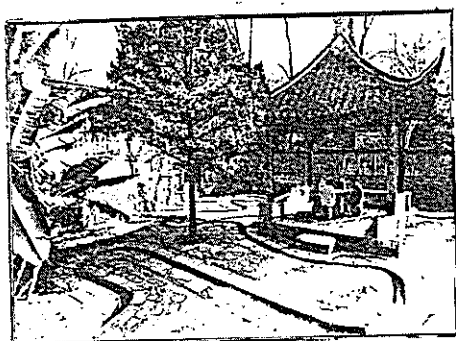
醉翁の意は酒に在らず、山水の間に在るなり。山水の楽しみは、これを心に得てこれを酒に寓するなり』

生きているものは必ず死ぬということを本当に悟れば、生きるためにことさらに心を勞す必要はない筈で、どのような境遇になっても天命だと思って楽しむべし、と醉翁亭や二賢堂は私に教えていた。

続いて滁州の人の馮父子を祀る馮公祠を通って石段を降りた所が「意在亭」で、そこには曲水の流れが見えていた。

明の嘉靖40年（1561）、ここに皆春亭が建てられ、1603年、滁州知事の盧洪夏が亭の周囲に水を引いて曲水流觴（ジョウサカサ）を作り、遊人の酒を飲んで戯れる場所として意在亭と改名したのである。

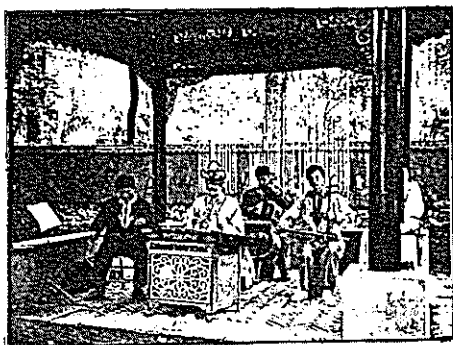
我々一行が意在亭に着くと、「客家人」、すなわち「客」（よそから来た珍客）を最高に持て成して歓迎しようと待ち構えていたように、琴の音が恵まれた静かな緑の中に響き渡ってきた。（上の写真は曲水流觴と意在亭）



琴の音は我々の心を恰かも天上の雲の中に遊ぶようにうっとりさせ、自然に我れ吾を忘れて陶然となってしまった。

奏でる音に合わせるように盃に酒が注がれ、それを曲水の流れに浮かばす優雅な持て成しは欧陽修も顔負けの至れり尽くせりの大歓待であった。

古式豊かな服装をした女性の奏でる琴は13弦の揚琴で、胡弓に似た音律を酒に酔ったように聞き惚れていた。(右は意在亭の演奏風景)



日本の歌「北国の春」が演奏されると、北海道からの参加者は踊り出した。黒山になって見物していた中国人まで手拍子を打ち、「ソーラン節」を交えた10曲ほどの演奏の最後は、「蛍の光」で締めくくった。

中国の田舎の素朴な伝統を心行くまで満喫していると、私もこのような静かな山の麓で静かな余生を楽しむことが出来ればと、一種の願望のようなものが湧いてきた。

中国通を任じる私も全く無知であった滁州には、「四美」があると称賛の言葉を送りたい。一つには美しい景色、二つにはこれを愛する賞心、三つにはこれを楽しむ楽(が)、四つには人を歓待する心、これは生涯を通じて忘却できないことであった。

滁州～鳳陽 (右下の地図参照)

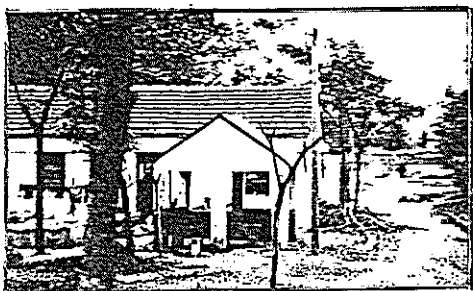
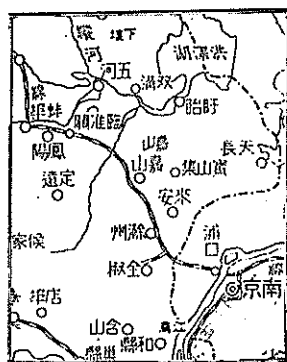
醉翁亭から揚子賓館に帰館して昼食を終えた一行は、約1000km西北方の鳳陽まで約3時間のバスの旅に出発した。

見上げる空に僅かに浮かんでいた雲は、琅琊山から自然に任せて飛んでいた。我々も流れていく雲のように富貴や貧賤にとらわれず、暮らしたいものだと思えながら滁州的の街を離れていった。

北上する広野は項羽や劉邦をはじめ朱元璋たちの治乱興亡の歴史街道であったが、今は不自然なほど平和で静かな安徽省の田園地帯で、実りの秋を迎えた黄金色の稲穂は豊年満作のようであった。

坦々とした砥のような街道は「江南の橋を植えれば江北では枳(かたじけなく)となる」と言われる通り、風俗習慣も非常に変わっているようであった。黄牛の飼育を奨励するこの地方では、住居と離れた位置に立派な牛舎が建ち、農村の衛生管理は隔世の感がある。

「一夫関に当たれば万夫も開くなし」と言った険しい山岳は全く見えず、悠然とした蒼天に気分転換を促すように、ちぎれ雲の浮き雲が見えるだけであった。(右は立派な牛舎)



安徽省の街道を走行する多くの自動車のナンバープレートを見ると、「皖」の字が付いていることに気がついた。河南省は昔の国名が「豫」であったことは戦時中より知っており、そのために車には「豫」のプレートが付いていた。それと同様に安徽省の別名は「皖」であるという新知識を得たのである。（皖=7ㄱㄱㄱㄱ）

バスはトイレ休憩のため「定遠」で停車した。思えば垓下で敗れた項羽は800余騎を率いて南に下がったが、途中で討たれたり落後したりして、従う者は100余騎となってしまっていた。

淮水を渡ったところの一带は湿潤で沼沢が多く、項羽は定遠で道に迷ってしまった。そこで農夫に道を尋ねると間違った道を教えられ、項羽は劉邦の手が此处まで回っていることを知り、切齒扼腕して悔しがった地でもある。（前頁の地図参照）

湖沼の中に迷い込み、前へ進むにも水、退くにも一径があるのみで、定遠に辿りついた時には従うものは僅か28騎となり、崖っぷちまで追い詰められていた。

頼みとする者を失って茫然とする指揮官の心情は、逆風の戦闘を身を以て体験した私には良く理解できるのであった。

時勢が移り変わった今は、風や波のように始終心が動揺する戦いもなく、申々如とした沿道の街路樹は澄み切った紺碧の空に輝き、樹の黒い陰影はと路面に伸びていた。

予定よりも速くバスは快走し、微かに鳳陽の街影が見え出すと、我々は鳳といえは直ぐ鳳凰を思い出すのであった。鳳凰は麒麟、亀、竜とともに古代中国では「四霊」と称して、動物の中でも優れた神々しいものとされていた。だから鳳陽に対する我々の期待は大きいものがあった。

竜の鱗につかまり、鳳凰の翼につき従って、自分の出世をはかり、巧名を立てることを「竜鱗に攀（ヨ）じ鳳凰に附す」と言うが、鳳凰は世に「道」が行われていると現れ、さもなければ隠れると信じられていた。

神話伝説は貴重な歴史的文献である。霊鳥といわれる鳳凰の町「鳳陽」は一体、どんな町だろうかと空想を描いていると、バスは間もなく市の中心部にある鳳陽賓館に到着した。（16：30着、位置は下図参照）

「鼓楼」 （右下地図参照）

ホテルの部屋に旅装を解いたものの明日の行程が長距離のため、息を入れる暇もなく予定を繰り上げて、古い町並みの老街と鼓楼の見学に徒歩で出発した。

街の中心部だけに人の出は股賑をきわめ、牌楼（市にある櫓門（ヤグモン）で、昔の都会には沢山立っていた）の立っている大通りは古都の支那を彷彿させ、否応なしに懐かしさが込み上げてきた。

明の朱元璋の出身地に相応しく鳳陽は、何となくロマンを感じさせる佇みがみなぎり、三階建の中国式の街並みは黄山の登山口である屯溪（安徽省）の老街に似ていた。



籠を天秤棒でかついで農産物を運ぶ田舎街らしい趣の中に、かつては明の太祖の朱元璋を生んだ街はどことなく鳳凰の匂いがにじみ出ており、道行く人たちは我々日本人を物珍しそうに眺めていた。

真っ直ぐに伸びる老街を通り抜けると広大な広場に突き当たり、その真ん中に立っている大城壁は、他を睥睨して威圧するように立ちはだかっていた。これが鼓楼の跡で現在は建物はなく、街の中心をなして道路は四通八達していた。（右は鼓楼の城壁）

南北72呎、東西34呎、高さ15、8呎の城跡は日本の古城を思わせていたが、在りし日に建っていた三層の鼓楼は、恰かも天守閣のようであったらうと見上げていた。

現在は閉鎖されているが鼓楼には三つの門があり、中央の門の上に「萬世根本」の四文字が白く書かれていた。

（右は反対側から見た鼓楼と萬世根本）

ガイドはその意味の説明をしなかったが、恐らく「萬世の為に太平を開く」、即ち永遠の将来のために太平の世を開き、現代だけを考えていてはならないと言う意味だと、私は解釈した。

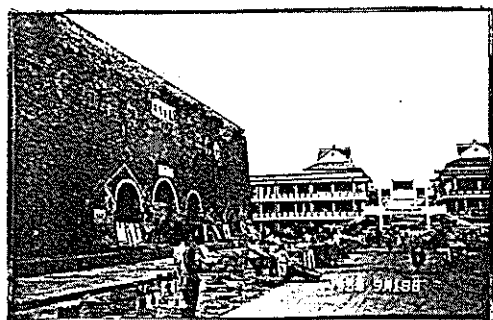
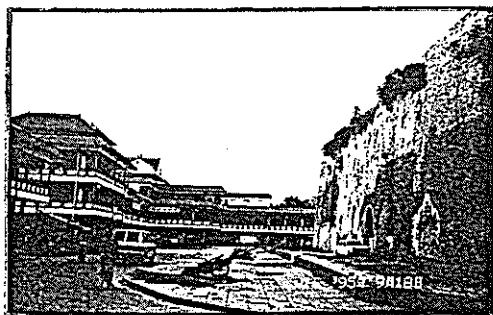
鼓楼を取り巻く四周の広場には、明代の古式に則った朱塗の鮮やかな建物が櫛比して建ち並び、昔の繁栄していた街を再現したいという意欲が溢れ、私は刮目して眺めていた。

（右は広場に再現された明代の建物群）

絢爛豪華な建物の1階は商店で2、3階は食堂や会議場、宿屋であろうか。眩いほど我々の目を奪う景観は権門勢家の構えであったが、これらは台湾の資本で建てられたもので、売却または賃貸しているとのことであった。

北京や上海ばかりでなく安徽省の田舎の街にまでも、台湾の資本が進出しているとは夢想だにしないことで、近年には鼓楼の建物も復興されるというから、地下の朱元璋も大躍進に微笑を浮かべて驚いていることだろう。

約1時間の散策を楽しんで18時に帰館した。ホテルの設備は滁州よりは良好だったが、風呂は19時～24時の間しか湯は出ず、蚊が出るのかベープまで付けられ、鼓楼広場とは反対に田舎臭い部屋で旅の疲れを癒すことになった。



鳳陽の概要

古代の鳳陽は中原の地から離れていたから、「淮河の夷（エス）の地」と言われていた。春秋時代には鐘離子国、秦漢時代には鐘離県が置かれ、隋時代には濠州が設けられて、その州に属していた。

明の洪武2年（1369）には中都が建てられ、洪武3年に中立県となり、洪武7年（1374）に中都は中立府となった。しかしこの地は鳳凰山の北側に位置していたから、鳳陽府と改称され、清の乾隆20年（1755）に鳳陽県となる。

（中国では北側を陽、南側を陰という）

上記のように鳳陽の名称は鳳凰山の名から命名され（明一統志による）、明の太祖・朱元璋の出身地で一時は皇城も置かれて繁栄した。

明の太祖の父母を祀る考陵は城南にあり、太祖がまだ世に出ないとき僧侶をしていたという皇覺寺も同地にあるが、ともに今は荒れ果てて昔の名残りをとどめているだけである。

鳳陽の東方の臨淮関（上図参照）に税関が設置されてから、臨淮関が淮河水運を左右するようになり、鳳陽城の繁栄は臨淮関に奪われたばかりでなく、津浦鉄道（天津から南京の対岸の浦口まで）の開通によって蚌埠（バフ）、即ち鳳陽の新城（新鳳陽城と言われる）に奪われてしまった。

鳳陽の歴史の中で悠久の歴史として残るものは、洪武帝・朱元璋の出身地と言うことである。気候が温暖なために稲麦の生産に適し水運にも恵まれているが、所詮、辺鄙な農村に過ぎない。

中華人民共和国になってから鳳陽の農民は、「大包干」と称す積極的な生産の責任制を採用して名声を博し、新鳳陽の躍進の原動力となったと中央政府から賞賛を受けている。（鳳陽県地方誌による）

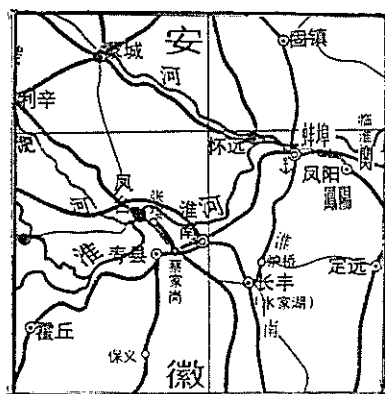
朱元璋・洪武帝の出身地である鳳陽の観光の前に、南京の項で記述した以外のことについて、彼のことを若干記しておく。

明の太祖・洪武帝・朱元璋

朱元璋は天暦元年（1328）9月18日、淮河ぞいの濠州（鳳陽県）で貧農の子として生まれ、姓は朱、名は元璋である。

そのころの中国はモンゴル人の政権である元王朝の支配下にあった。元王朝は世界史上最大の征服者でチンギス汗の後裔がたてた王朝であった。1279年、孫のフビライが南宋を滅ぼして以来、中国全土を支配していた。

異民族として中国全土を領有したのはモンゴル人が最初であったが、彼らは実に苛



酷な態度で中国の人々にのぞみ、漢民族を徹底的に蔑視した。

モンゴル政権の拠りどころは強大な軍隊、とくにモンゴル騎兵を主力とする精鋭軍団であった。しかし14世紀に入ると王朝内部の権力闘争が激化し、支配階級の分裂が始まった。それは帝位の継承問題であった。

これに対応するかのように、今まで抑圧されていた漢民族の民族的反抗も次第に活発となって来た。朱元璋が誕生したのはモンゴルが天下を二分する「天暦の内乱」が起こった時であった。

モンゴル王朝の最後の皇帝・順帝が即位した時には、中国の北部では旱害、中部では水害がおこり、連年にわたって災害が続いて飢饉は慢性化した。更に不運に泣く農民の生活を破壊したのはインフレであった。

中国の農民は自ら起って王朝を打倒した経験は豊富にもっており、農民蜂起の前には王朝支配も永続できるものではない。それが中国歴史の法則であった。

元朝打倒をめざす反乱は広東、河南、四川の各省が切っ掛けとなり、遼原の火の如く浙江、安徽、湖北の各省にも拡がり、江蘇省の濠州（今の鳳陽）もこれに呼応して反旗をひるがえした。

反乱は数年の間に黄河と長江の流域を含む広大な地域に拡がった。その主力は元朝の圧政に苦しめられた農民集団で、頭に紅い布をまいて同志の標識としたことから、「紅布軍」とか「紅布賊」と呼ばれた。

紅布賊の勢いは黄河や淮河の流域を中心に拡大し、「元末の反乱」の中心母体はつぐられ、決起する契機を待っていた。

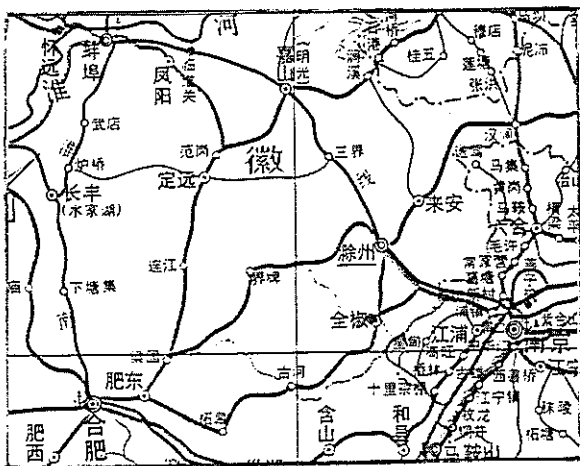
1344年、華北の大平原を流れる黄河が空前の大氾濫を起こし、山東、河南、江蘇、安徽各省まで流れ込んで農民の生活を破壊し、氾濫は毎年のごとく繰り返して田畑は失われた。

1352年2月、安徽省定遠（鳳陽に来るときトイレ休憩した地）の地主で紅布賊でもあった「郭子興」が決起して濠州（鳳陽）を陥れた。その時に訪れてきたのが将来、明の太祖となる朱元璋であった。（下図参照）

貧農であった朱元璋は17才の時に近くの皇覺寺に入って出家したが、24才の年の春、意を決して動乱の渦中に身を投じ、郭子興の配下に入った。一兵卒の彼は直ぐ頭角を現わして昇進をつづけその年のうちに軍団の参謀となった。

彼を信頼した郭子興は養女の馬氏を娶せた。彼女は才女で賢夫人の誉れたかく、よく夫を助けて建国の大業を陰で支える大役を果たした。

朱元璋は消耗した兵力をおぎなうため郷里に帰って青年を集め、700余名の部隊を編成した。この同郷集団は厳格な軍規のもとに厳しい訓練によって鍛えられ、やがて明朝建設の中核となる部隊であった。



自分の部隊をもった朱元璋は郭子興集団の内紛をさけて南に進軍した。これは賢明な戦略であった。即ち、経済的に先進地帯である揚子江流域をおさえれば、元朝の中国支配は崩壊せざるをえなかったからである。

朱元璋は定遠を攻略して郷兵2万を吸収し、休む間もなく滁州をおさえ、今や郭子興軍の主力は朱元璋の軍が占め、彼は実質的な軍司令官となった。

滁州から更に南下して和県に入り、揚子江を渡河して集慶（今の南京）を攻撃した。必死の攻防戦の結果、1356年3月、集慶を占領し、元軍10万がついに投降してきた。（前の頁の地図を参照）

彼は集慶を応天府と改名し、入城と同時に次のような布告を発した。これは朱元璋が反乱軍の将から天下をねらう大望の人となったことを示す、最初の宣言文とすることができる。

『元の政治は乱れ、各地に反乱が起こった。いま私が来たのは人民のために戦乱を収めることである。皆それぞれ安堵するように。賢人は礼をつくして任用し、旧政の弊害はつとめて取り除こう。官吏は利をむさぼって人民を苦しめてはならない』

応天府に本拠をおいた朱元璋は江蘇、安徽、浙江省一帯の要地を占領し、着々と勢力を伸ばしていった。彼が王朝建設の意思を持つことが知れ渡ると、元朝をみかぎった多くの知識人が集まってきた。

こうして朱元璋は地主や知識人と結びつき、儒教が政権のイデオロギーとして定着し、農民反乱軍の色彩を完全に払拭したのであった。

ついこの間まで頭に紅布をまき、手に武器をにぎっていた朱元璋は、今や長袍大袖に身を包み、四書五経を読み、王朝を口にする人になったのである。（しかし未だ未だ戦乱が続いたが、この記事は割愛する）

9月19日（火）晴 明皇陵（南京は明孝陵）（位置は下図参照）

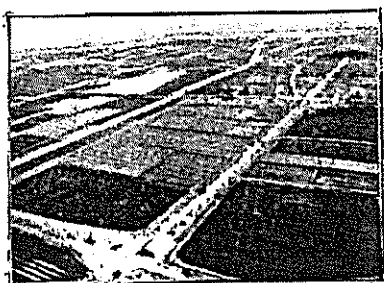
珍しく今朝は疲労が蓄積したのか目覚めが遅く、起床は6時であった。長い習慣の朝風呂も楽しめず、膝から首や肩に膏薬を張りつけて本日の観光に備えた。

鳳陽は歴史的に恵まれて豊富な観光資源をもっているが、外国人観光客を誘致するためにはホテルの完備が必須の要件だと感じながら、バスに乗車して鳳陽賓館を離れた。

鳳陽県地方志弁公室発行の「鳳陽攬勝」の冒頭に、日本のワールド航空（株）社長の菊間利通先生が鳳陽を訪れ、鳳陽は偉大！偉大！だと絶賛したと書かれていたが、県当局はホテルに就いては井戸の中の蛙であった。

人口64万（市内人口6万）の鳳陽の人たちは自ら「帝王の郷」と称していると言う。一行は先ず明朝最初で最大の皇陵を見学することになったが、古代中国の君臣の道が偲ばれて興味津々であった。

（右は明孝陵の俯瞰図で右上に陵丘が見える）



皇陵は朱元璋の父・朱世珍、母・陳氏を葬る墳墓である。父母の原籍は江蘇省句容県で流浪輾轉して1340年に鳳陽の太平郷の孤村庄に來た。(今の皇陵西北角付近)

地主の劉繼徳の田畑を小作していたが、1344年春、天災・飢饉・悪疫流行のため父母と兄が相次いで死亡した。しかし埋葬するにも土地はなく、漸く地主の劉氏の憐憫の情により、この皇陵の地に埋葬することができた。

中国では「孝」が人倫の根本である。これは革命ごとに主権者は変わるが、親子の關係は不変であるからだ。この思想は我々年代の者は小学校のころから徹底的に教え込まれた。しかし日本では孝と忠は一本だとする思想としたのであった。

朱元璋は1368年、皇帝の座に就くと、父親に「淳皇帝」の贈り名を追封して廟号を「仁祖」と称し、大規模な皇陵の建設に着手した。(下の表を参照)

第1次の陵墓の建設は洪武2年に広く樹木を植え、神道(参道)、華表(かひょう、墓所に立てる柱)、石人、石獸、皇陵碑をつくり、4年には「英陵」と号し、5年には「皇陵」と改称した。(下の表を参照)

第2次の陵墓園の建設は洪武8年から11年にかけて、4年の歳月を要した大規模な工事であった。

神道の方位を変更して新しく三重の城垣をつくり、皇陵正殿を新造して30余万本の植樹と華表も増設し、更に石人石獸も増やして自ら碑文を書いた碑も立てた。

享殿、華表、碑亭、官庁などの、皇陵の広大な建築群の総面積は25万㎡で、三道の城壁の内外には多くの対照した建築物が建っていた。

外壁(三道という)の土城は正方形で周囲は約16㍍、四つの門があり、煉瓦つくりの二道の城は長方形で南北1100㍍、東西750㍍で、官庁などの建物が建っていた。又、当時の民家の数は3324戸もあったと言われている。

皇城、即ち内城(一道という)も長方形で周囲は約300㍍、城壁の高さは約6㍍で紅土を塗り、皇陵正殿の間口は18㍍、常時5000人余の看守が警護していた。

明皇陵の参観に向かった一行は、市街地の府城(前頁地図参照)を通り抜けて南に進むと、広大な田園地帯の一角に家畜市場が開かれ、如何にも貧困な農村風景であった。延々と続く平坦な田園の中にぽつんと建っていた一軒屋の前で、バスは停車した。ここが明皇陵の参道の入り口で、朱元璋の親を思う孝養の手本の地であった。

夢の跡のような陵墓の参道の前に立つと、往時の賑わいが臉に浮かび、「骨を埋むるも名を埋めず」と詠んだ白居易の詩を思い出した。本当に身体は死んで骨を埋めても、その名は永久に伝わっているのである。

中国では孝を人倫の基本とするから祖先を崇拜し、祖先を崇拜するには祭りごとを

陵 名	皇帝姓名	年 号	廟 号	諡 号	世 系	陵 址
祖 陵	朱百六		懿祖	宣皇帝	太祖高祖	
祖 陵	朱四九		熙祖	恒皇帝	太祖曾祖	江 蘇 町 南 县
祖 陵	朱初一		熙祖	裕皇帝	太祖祖父	
皇 陵	朱世珍		仁祖	淳皇帝	太祖父亲	安徽凤阳县
孝 陵	朱元璋	洪武	太祖	高皇帝		南京钟山南面
长 陵	朱 棣	永乐	成祖	文皇帝	太祖四子	北京昌平县天寿山
献 陵	朱高拱	洪熙	仁宗	宣皇帝	成祖长子	“
景 陵	朱瞻基	宣德	宣宗	宣皇帝	仁宗长子	“
裕 陵	朱祁鈇	正統	英宗	宣皇帝	宣宗长子	“
英宗帝陵	朱祁鈇	天順	代宗	景皇帝	宣宗次子	北京西郊金山下
茂 陵	朱見深	成化	宪宗	純皇帝	英宗长子	北京昌平县天寿山
泰 陵	朱右堂	弘治	孝宗	敬皇帝	宪宗三子	“
显 陵	朱右校		睿宗	睿皇帝	世宗父亲	湖北省钟祥县
康 陵	朱厚照	正德	武宗	毅皇帝	孝宗长子	北京昌平县天寿山
水 陵	朱厚璉	嘉靖	世宗	肃皇帝	宪宗孙	“
昭 陵	朱厚熜	隆庆	穆宗	庄皇帝	世宗三子	“
定 陵	朱埈鈔	万曆	神宗	显皇帝	穆宗三子	“
庆 陵	朱常洛	泰昌	光宗	贞皇帝	神宗长子	“
德 陵	朱由校	天启	熹宗	哲皇帝	光宗长子	“
思 陵	朱由桂	崇禎	思宗	思皇帝	光宗五子	“

絶やしてはならない。祭りをを行うには祖先の血を継承した子孫を絶やしてはならず、子なき妻は去るという風習までも生じたのである。

多くの後継者を得ることが最大の孝行という思想から多妻制が生じたが、現在の中国の一人児の思想は人倫の道に反してはいないだろうか。

皇陵の神道（参道）の両側には、延々と神の使者のように石人、石獣が並び、その数は32対である。

それは獬豸（カイイ）2対、石獅子8対、望柱2対、馬と馭者（キョシヤ）6対、石虎4対、石羊4対、文官2対、武官2対、宦官2対の32対である。（右は32対の石像群）

中国各地にある古代封建時代の皇家の陵墓園の中で、石人、石獣の数はこの明皇陵が最も多い。（右は文官の石像）

祖父の熙祖を祀る祖陵（江蘇町胎県）の石像の数は20対、南京の孝陵は24対、北京の成祖（永楽帝）以下を祀る明十三陵は18対で、朱元璋が如何に「孝」を根本にしていたかが窺えるのであった。

又、石像の数が32対という理由は、石像群の向こう側に見える石碑の中に書かれている。即ち父親は64才で死亡したため、 $32 \times 2 = 64$ の数字となった。

本当に朱元璋は孝子であり、明王朝が276年間も永続した根本思想を表現しているようであった。（右は武官の石像）

獬豸は頭に1角のある伝説上の獣で麒麟に似ており、陵墓に向って右側は雄、左側は雌で、右側の雄の石獣をさわると男の子が生まれると言われている。

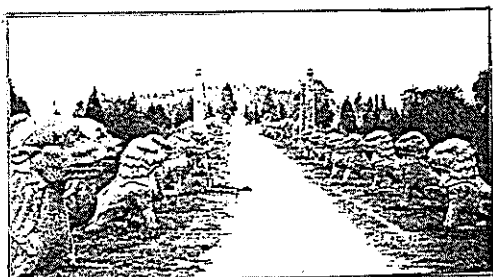
獅子は百獣の王で四方を威圧し、石馬は馬上から天下を取ったという意味にとられている。虎は獣中の王で威厳の意味を表し、羊は乳を出すことから孝順の意思を表現している。

文臣武将の武は乱をおさめ、文は太平をつくり、治国平天下を意味し、宦官は陵墓を守護する太監のことである。

望柱（華表）は伝説上からきたものである。古代中国で最も平和で栄えた時代とされている堯舜（キョウシュン）時代に、交通の要所要所に木柱を置き、人民が意見を申し述べる彫刻文を書いた柱で、民心を取り入れて政治を行うという意味である。一説では日本の鳥居も中国から伝わり、望柱と同じ意味の用途だとされている。

一国は一人の力によって栄えもするが、反対に亡びるものだと感じながら、寂々として寥々とした真っ直ぐ伸びる参道を進んだ。延々と続いていた石像群がなくなった所の小さな広場には、石亀の上に立つ大石碑（華表）が両側に立っていた。

伝説によると、中国では最高のとされている龍には9子が生まれ、その9子は一様ではなく各々長所をもっていた。亀はその中の一子で、名を「鼈眞」（ヒケン）と呼び、



最も重いものを載せる力を持っていた。

国家の大きな重責を担う皇帝は自らを「真龍天子」と称し、石碑は石亀の上に立てることになった。又、亀は寿命が長くて重い負担に耐えることから、石碑も長寿だという説もあるようだ。

右側に立っている高さ6、8mの「皇陵碑文」には1105文字が刻まれている。しかし今では風化が激しく微かに読み取れるだけであった。

朱元璋が自ら書いたという碑文には、彼の誕生から帝位に就くまでの生涯の歴史が刻まれ、当時の歴史の研究に重要な意味をもっている。

この皇陵碑文と反対側の反対側に、外観は全く同じの石碑が立っていたが、これは無刻の石碑であった。これは後世の人が朱元璋の功績を書くために無地にしたという説や、清の康熙年間に大地震があって倒壊したという説もあり、真実の理由は不明のようだ。

(上の写真の左側は皇陵碑文の側面、右側は正面からのもの)

皇陵碑文のところを過ぎると両側に街路樹が植林された参道があり、その正面の向こうに濃い緑が茂った陵丘が見えていた。

陵丘の麓の平らなところに人民政府が書いた「大明皇陵」の碑文が立っていた。

(右は参道と明皇陵の陵丘)

1982年に国の文化財に指定された陵丘の上は、誰でも登ることが許されている。丘は松柏が植林された盛土で、尊敬されている皇帝の父母の陵丘とは思えない状態だ。

微風が唳々(リョリョリ)として響く林の中に荒れ果て、朱元璋の孝心を無視する皇陵から、恨めしい声が聞こえてくるような感じを受けるのであった。

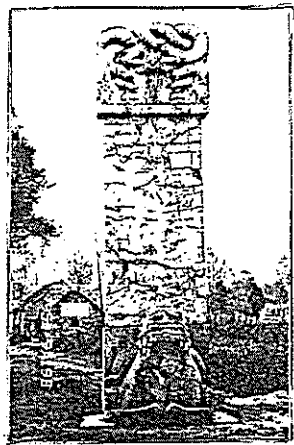
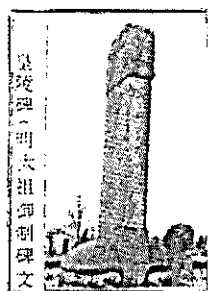
この明皇陵を超える規模の陵墓を造ることが許されなかったが、一体、この皇陵が何故、このように無残に破壊されたのであろうか。

明朝の末代皇帝の崇禎8年(1635)正月、農民一揆の指導者・李自成や張献忠が農民軍を率いて鳳陽に乱入し、皇陵正殿をはじめ数百の殿宇と20余株の樹木を焼きつくしてしまった。

これらの明朝打倒の反乱のために明王朝は滅んで清王朝となった。中国では天意にかなった革命は是認され、古代から24の王朝が革命を繰り返して今日に至っているが、我々人間には情けというものがある。そのためであらうか、皇陵を見学した私は胸一杯であった。(共産中国も永久ではなく、何時まで続くのであろうか)

一方、清の康熙年間には鳳陽一帯は飢饉が続き、農民たちは皇陵の中に入って煉瓦や木を盗んだため、皇陵内の建築物は悉く無くなってしまったと言う。

又、文化大革命のときにも参道の両側にある石像群は破壊され、1976年に重要文化財に指定されてから、石像の残欠部分を接着して復元したのである。



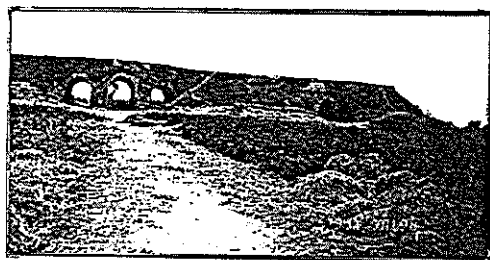
朱元璋の母親は妊娠中に、仙人から薬をもらって飲んだという夢を見た。そして赤子が生まれる時に赤い光を見て火事だと思ったが、火事ではなかった。このような状況の中で生まれたから「朱」という姓をつけたと言う伝説がある。私はその伝説を思い出しながら、陵丘を降りて帰路についたのであった。

(以上は鳳陽県発行・皇陵13問題集を参考)

明 中都城 (チュウトジョウ。50頁地図参照)

明皇陵からバスは府城の鳳陽市街に戻り、皇城路を通過して市の西方に広がる広大な田園地帯の農道を走り、一軒家のある畑の中で停車した。収穫期を迎えた綿花の実がなかった彼方に見えていたのが、明の中都故城の跡であった。

鳳陽の府城の西方にある有名な中都城は、1982年に国の重要文化財に指定された故城である。(右は明の中都城跡の一部)



朱元璋は洪武元年に帝位に就き、「南京」を『応天府』、「開封」を『北京』と称し、洪武2年(1369)、彼の故郷である今の鳳陽に『中都』をつくった。すなわち北の『開封』と南の『南京』の中間に位置するから『中都』と称したのである。

質量ともに高い淮的(淮河地方的)な都城を造営するため、全国各地から技術者、軍士、農民、移民、犯罪者など100万人を動員し、築城や池、宮殿、樓閣などの造営の責任者に丞相(首相)を指名した。

又、四川、貴州、湖北、湖南等の地に人を派遣し、そこから銘木、貴木等の木材を鳳陽まで運搬させ、建都の用にしたほどであった。

約6年の歳月を費やした中都城の完成が間際になった時、莫大な経費がかさんで工匠たちが反抗したため工事が停止し、やむなく造営は途中で中止となった。

中都城は内、中、外の三城からなり、外城は周囲が約30kmの長方形で西南に伸び、その一角が鳳凰の嘴(けびさ)のようになっていた。

中城は周囲が約7、7kmの不規則な長方形の皇城で、内城は里城、即ち「紫金城」(天帝の座のあるところの意)で、周囲は約3、6kmの南北に長く東西が少々狭い長方形である。

中都城の外城と内城の城壁は早くから風化によって崩壊し、ただ内城の一部だけが現存している状態である。南京城の城壁も同じ年代に造営されたもので、日本軍が破壊したとして煉瓦の運搬に行く日本人は、全く無知と言わなければならない。(この点については南京の項で記述した)

朱元璋が故郷に錦を飾るために特別に造った中都城は、配置が対照であることが基本的な特徴である。南北に通じる一条が中心軸で、その最南端に洪武門があり、北に向かって洪武門、大明門、承天門、午門、玄武門などが造られている。

中心軸の両側には都督府などの官庁や開国の功臣の廟、歴代の帝王廟などが造られ、これらを鳳凰山が囲むように設計されている。

宮殿建築は巍峨として高くそびえ、壮麗に彫刻された梁や画棟は目を奪い、黄瓦に朱塗りの建物は光り輝き、宮殿はすべて玉石の欄干が設けられ、龍、鳳、獅子、花卉等の図案で埋め尽くされていた。

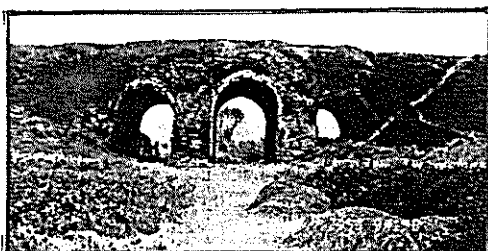
皇宮の階段や街道にも龍鳳が彫刻され、明の人が献上したものや詩碑も立っていた。しかし造営から600年余も経過して老朽化は甚だしく、人的な破壊も加わって今は蕩然とした虚しい姿になってしまった。

中都城の内城には北側を除いて深さ7畝、幅10畝の濠が掘られていた。大旱魃でも涸れなかった濠には五つの橋が架かり、四周には梧桐が植えられ、白玉の欄干を巡らしていた。

明代の南京城や北京城の母城とされている中都城の見学に、我々一行はバスを降りて「午門」の跡に向かって綿花畑の小径を歩いた。(右は午門の跡)

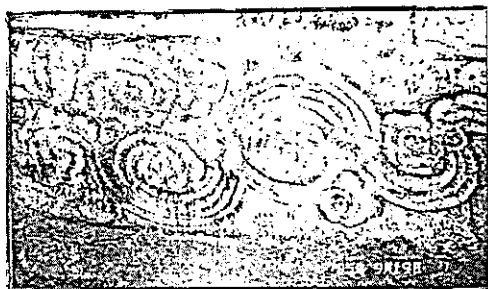
現在まだ残っているのは中都城の南側と西側の1ヵ所ほどであったが、当時の城壁の規模の偉大さは我々にも歴然と分かるのであった。

午門(正南の門)のある内城の高さは15、15畝、底幅は6、9畝、上部の幅は6、4畝で、門の幅は現在の中型自動車が通行できるほどである。



城壁の煉瓦は、石灰と桐油と糯米(モチ)を混合したもので接着し、積み上げたものだと言われているが、明代の200余年間は無損のまま保存されていた。しかし大部分は文化大革命時に、農民が家を建てるのに破壊したと文献に記載されている。

明時代にタイムスリップしたような錯覚を感じながら、全く人気のない黒ずんだ午門の中を歩いた。ガイドの説明を聞きながら注意深く城門の壁を見ると、両側の底部一面に、白玉石の豪華雄威な浮彫(レリーフ)が見えていた。(右は雲花のレリーフ)



長さ2、7畝、高さ1、1畝の石の彫刻は空を飛ぶ蟠竜(うづまいたつ)や竜鳳、雲花、麒麟、鹿、獅子、蓮など様々で、千姿百態の光景はまるで生きているようであった。

これらのレリーフは北京の故宮・大和殿のレリーフの3倍の大きさがあり、その数は全部で76個、総延長は485畝に達すると言われている。

全く天上天下唯我独尊的な存在で、我々は驚異の眼で眺めていた。(右上は獅子のレリーフ)



長い午門の中を歩いて城外に出ると、そこの広場には刈り取った稲が干してあった。そこから一行は一列になって高い城壁の小径を登攀したが、膝が痛む私は中国式に慢々的だときめつけ、殿(シガリ)をつとめて登った。

人と先を争うことになると、その道は非常に狭いものである。しかし、これに反し

て人より遅れていく気なら苦労はなく、道は広く感じてのんびりと登ることができた。

喘ぎながら登り終わって城壁の上に立ち、征服したような気分で中都城の全景を眺めた。しかし、目にすることのできるのは分厚い城門の部分を除いては、崩壊して僅かに残る城壁だけで、中世の面影を残す城郭都市は残念ながら全く見ることはできなかった。



昔の中国を知っている私などは、高く聳えた望楼のない城壁などは飽き足らず、ただ死人の肌のように黒ずんだ干乾煉瓦を、盛者必滅の天地自然の現象だと見詰めていた。（上の写真は崩壊した城壁と外濠）

前記したように一国は一人の力によって栄えもすれば、亡びるものであると感じながら、偉大な中都故城の見学は終りとなった。

帰路についたバスの中で、理想を追求した孟子が述べた「君子に三楽あり」の教えを、親孝行息子の朱元璋と重ね合わせて思い出していた。

「三楽」とは『父母ともに存して兄弟に故なきは一の楽しみなり。仰ぎて天に愧（ハ）じず俯して人に恥じざるは二の楽しみなり。天下の英才を得てこれを教育するは三の楽しみなり』である。

父母が揃って存命して兄弟が無事故とは、家庭を平和に治め、人倫の基盤を強固にしていることである。天にも人にも恥じないとは、公明正大で深く反省することであろう。天下の英才教育は永遠の聖業のためであった。

孟子は又「君子は業を創め、統（むすぶ）を垂れ、継ぐべきをなす」と述べているが、朱元璋は偉大な創業者であったと改めて敬意を表していると、バスは鳳陽賓館に到着していた。



個室に戻って眺める壁にかかった鳳凰の絵は、昨日から憧れの的となっていた。鳳陽の記念にこの瑞鳥の絵を購入したいと尋ねたが、ホテルには売店はなく、残念ながら諦めなければならなかった。（鳳＝雄、凰＝雌）（上の写真は私の部屋の鳳凰の絵）（以上は鳳陽県地方誌弁公室発行の鳳陽攬勝を参考）



鳳凰

鳳陽～蚌埠～亳州 (ハクシュウ) (下図参照)

昼食が終わって午後1時にホテルを発ったが、鳳陽は私に強烈な印象を残した。その結論は、人民があって国家があり、国家があって治める人がいる。だから軽重を言えば、根本である人民が最も貴いということであった。

出発して間もなくすると、悠然とした淮河(ワイガ)の流れが網膜に映り、そこには高層建築が林立して活気が溢れる蚌埠(パンプウ)の大都市が現れた。

市内人口75万の蚌埠は、元は鳳陽城西方の淮河に臨む一寒村に過ぎなかったが、天津～浦口(南京の対岸)間の津浦鉄道が開通して以来、河南省東部と安徽省北部の物資が輻輳し、殊に淮河上流の産物が集まり、僅かな年月の間に安徽省北部第一の都会にまで発展した。

蚌埠は鉄道と淮河の交差点で水陸交通の要衝であるとともに、政治、軍事の要害の地となり、新開地の蚌埠は新鳳陽と呼ばれて繁栄を続けてきた。我々の聯隊が黄河の渡河作戦準備のため、猛訓練を受けた当時の蚌埠を想起していると、バスは淮河に架かった大橋を通過した北岸で停車した。平坦な大陸の大河

の水は遠くまで連なって天と同じ色をなし、鳶がゆっくり輪を描いて舞い回り、水上では知らぬ顔をして船が進航していった。(上の写真は蚌埠の淮河の景観)

堤防の上に立ち、草むらの緑や水面に映る雲の影を心静かに眺めていると、まだ夏蟬が盛んに鳴いていた。夏だけの蟬の寿命は短く、人生も又このように短いものだと思うと、人間も自然と同化して一体となっていることに気が付いた。

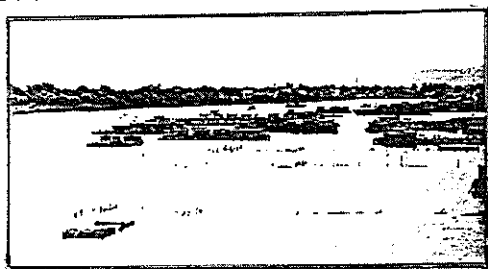
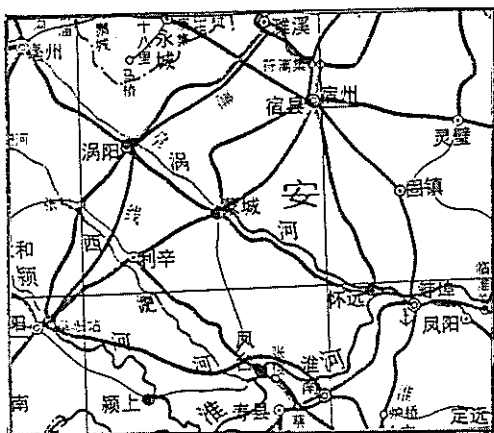
まるで美しい絵画を見ているような感じの淮河は、我々の気分を転換させ、再び出発したバスは坦々とした沃野千里の穀倉地帯の中を、110%の猛スピードで轟進した。

絶好の天気にも恵まれた移動日和は次第に我々を半睡状態にさせ、天道の運行が一つの誤りもないのと同様に、目を覚ますと安全運転のバスは亳州的の街に入っていた。

街道途中の天候は曇天が拡がっていたが、亳州的の西の空は夕焼けが赤く輝き、期待の大きい亳州的の観光も好天に恵まれると喜びながら、大時計がある古井大酒店の塔の立ったホテルに入り、旅装を解くことになった。

(蚌=蟬で、淡水の軟体動物。亳は地名で下は毛ではない)

(右上の写真は亳州的のホテル・古井大酒店で百貨店兼用)



亳州の概要 (下図参照)

亳州は3500年以上の古い歴史を有す文化古城で、中国中原文化の発祥の地の一つである。

その証拠には都になったほか、傑出した人物が数多く輩出している。

亳州は古代王朝の商(のちに殷)の「湯王」

の故郷である。史記によると湯王が夏王朝の桀

(ケ)王を倒して亳州に都して「商」と号した(紀元前1575年頃)。19世の孫が黄河の水患を避けて都を「殷」(河南省)に移したから、それから国号を商から殷としたのである。亳州には湯王の墓も遺っている。(右の表を参照)

歴史上有名な道家の祖父「老子」(生年月日不詳)は、孔子とほぼ同じく春秋戦国時代末期(紀元前約570年)の人で、史記・老子伝によると楚の苦県のひとされている。

楚は現在の湖北・湖南・河南省の南部・安徽省の大部分を領有し、上記した楚の苦県は河南省の鹿邑県のこと、現在の亳州市の谷陽鎮に当たると「老子伝略」に記載されているから、老子は亳州の人である。

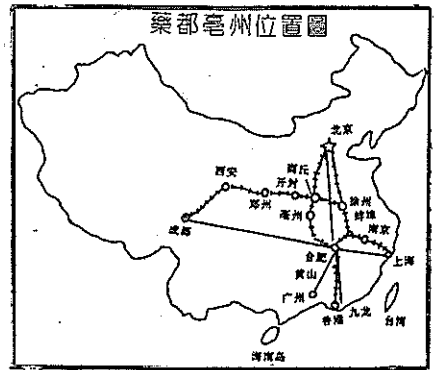
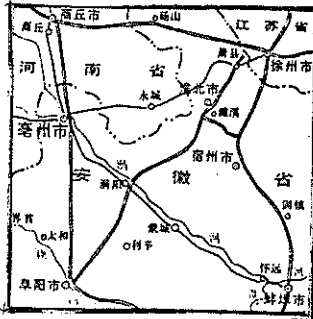
(亳州は上図のように三方が河南省に接し、鹿邑は境界線上にあるため亳州市の周辺には老子の遺跡が数多く残されている)

政治家であると共に軍事家であり、文学者でもあると賞賛される魏の始祖「曹操」(155~220、本姓は夏侯、諡は武帝)は、沛国の譙の人とされている。

当時は亳州を譙県と称していたから曹操は亳州市の出身で、亳州には曹操が造った運兵道(地下道)や、一族の墓群などが遺されている。(右表参照)

後漢末の世界的な大外科医の「華佗」(カ)も沛国譙(現在の亳州)の人で、麻沸散(一種の麻酔薬)を飲ませて世界で初めて外科手術を行ったことで有名である。この華佗を祀る廟も亳州にあり神医として祭られている。

清朝時代の建築芸術の粋を集めた「花戲楼」もまた重要文化財として有名である。一方、亳州は土地肥沃



朝代	公元	亳州市建置沿革表	备注
夏	前21世纪 前16世纪	徐州	
商	前11世纪 前770年	徐州	
西周	前770年	徐州	
春秋	前481年	徐州	
战国	前480年	楚国	
秦	前221年	楚国	
西汉	前206年 前205年	沛国	
东汉	25年 220年	沛国	
三国	220年 265年	沛国	
西晋	265年 316年	沛国	
东晋	317年 420年	沛国	
南北朝	420年	沛国	
隋	589年 618年	沛国	
唐	618年 907年	沛国	

で産物は豊富であり、特に中国四大漢方薬市場の一つでもある。更に亳州は酒郷としても知られていて、「淮西の都会」「小南京」の称号もあったと言われている。

上記したように亳州も例外ではなく、都となり、封国となり、郡邑となったりしてその名称は変化し、歴史を読むのに不明な点が多い。しかし歴史的な史実は一目瞭然として間違いはない。

昔の亳州城には72条街、36条巷があったが、群雄割拠した軍閥の混戦乱闘に遭遇し、現在は昔日の繁栄の面影は蕩然として無くなっている。

亳州市発行の「文化名城亳州」によると、徐州会戦のとき日本軍が蹂躪したと簡単に記載されているが、戦記を調査すると日本軍は亳州では戦闘していない。多分、中国軍の退却路となって荒らされたのではないだろうか。

「亳」の字は古い地名で(漢書・地理誌)、歴史は遠く過ぎ去って遂に専用地名となり、元の意味を失ってしまった。そのため中国東方書店の新華辞典や、日本の漢和辞典には地名として書かれているだけである。

9月20日 (水) 晴 亳州的朝 (下図参照)

昨夜は夜間建築現場の槌音がうるさくて中々眠れず、窓を開けて大通りを見ると数軒の露天商が一晩中商売を続けていた。

流石に徽州(安徽省)商人は中国の二大商人の一つと言われるだけに、亳州市の人も僅かな利益のために不眠不休で頑張っていた。

南京から随分と北方に進んできた性か朝の空気は肌寒く感じられ、早朝から出勤する労働者たちは揚子江沿岸と違って、上着を着用して自転車をこいでいた。

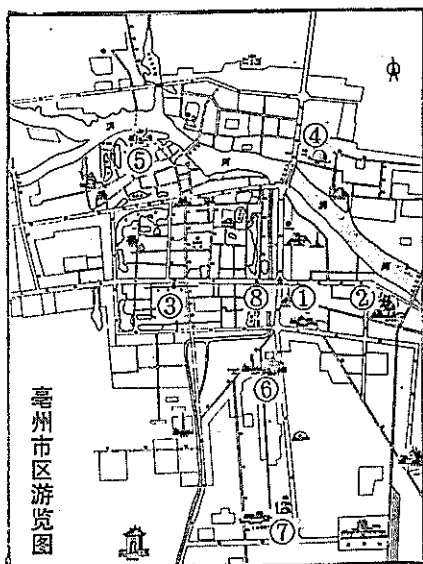
宿泊している古井大酒店(右図の①)は酒造会社が経営する二つ星のホテルで、滅多に外国人観光客が来ないために設備は粗悪で、我々は中国人と同じ待遇でも我慢しなければならなかった。

その中でも部屋の設備の最も良好な5階から市街を展望すると、ホテルは市の中心部の交差点(ロータリー)に位置し、眼下に朱塗

りの薬王閣(日本の薬師寺と同じ)が朝日に照らされ、漢方薬の街らしい光景を見せていた。

・(右上の写真は薬王閣(右端)とホテルの前通り)

ホテルの前の広場には早朝6時から、迷彩服を着用した30人ほどの女子従業員が整列していた。



上司らしい年配の男性が点呼をとり、続いて隊伍をくんで軍隊式の教練が始まった。戦前戦後を通じて妙齡の女性を集合させ、それも一般の会社が強制的に実施している光景は初めてのことで、それに引きずられるように階段を降りていった。

(前頁の右下の写真は、迷彩服を着用した若い女性が軍隊式に訓練されている光景) しかしながら早朝のためにエレベーターは動かず、5階から階段を降りて広場に立ってカメラを向けると、彼女たちは上官の目を盗んで笑顔で私を見詰めていた。

教練場から大通りの街角を散策し始めると、すぐに私の目を捉えたのは、毛布にくるまって道端に寝ている若い二人の失業者の姿であった。

彼らには誠に気の毒だと思いながら、素早くカメラに収めた。(右は道端で寝ている失業者)

外電は中国沿海部の大発展を伝え、その高度成長ぶりの光景には驚嘆の眼を向けていたが、大陸の度真ん中にある農村部の都会で、このような姿を見るのも亦、大きな驚きであった。

青雲の志をいだいて都会に憧れた若者が、着のみ着のまま農村を捨てて辿り着いたが職はなく、途方に暮れながら露に打たれている哀れな寝姿は、何を意味しているのだろうか。

陽の当たらない人達に光を与えるのが政治の根本である。そのことを忘れて大言壮語する中国中枢部は、現状を把握しているのだろうか。国民の目を外に向けさせるために日本の遠い過去ばかり攻撃しては、何ら国民生活の改善には繋がらない。

中国の長い歴史を繙いてみると、革命の殆どは疲弊した農村から火の手が挙がり、連鎖反応して次第に拡がり都会を包囲して政治の中心に迫っている。政治家よ！願わくばもっと国内に目を向けてほしいと、彼ら二人を眺めていた。

最近の中国は軍拡と原爆に力点を置いているのではないか。広い国土をもつ中国が何故に航空母艦を購入する必要があるのだろうか。完全に航空母艦は攻撃用である。原爆も全世界が反対する無用の長物で、これらは役に立たないばかりか、反って邪魔になると言わなければならない。

中国の裏側を見ながら早朝の散策を終わったが、長い習慣になっている朝風呂の楽しみも湯が出なくて楽しめず、不満を感じながら朝食を待っていた。



華祖庵・華佗記念館 (59頁地図の②)

華祖庵とは後漢の神医と称される「華佗」(か)を祀る廟のことである。華佗(180~207)は沛国の譙(亳州)の人で、内科・外科・婦人科・小児科・針灸などの凡ての医術に長じた名医(最も専門は外科)で、麻酔薬を飲ませて手術を行った最初の医者であった。

亳州地方は薬草が繁茂して名医を育てたが、華佗は医術のみならず徳が高かったから「神医」と尊敬され、古代中国の十大名医の一人であった。

彼は1800年近く前に、普通の病気なら針や灸、あるいは薬で簡単に治したが、重症の時には酒で麻沸散という麻酔薬を飲ませ、知覚がなくなったところで腹や背中

を切開して病根部分を除去した。腸や胃が悪い場合には切開して洗浄し、潰瘍部分を除去して縫合、膏薬を貼っておくと4、5日で傷がふさがり、1ヶ月で本復したと言われている。

華佗記念館は1962年、亳州医学界が発起人となって建てたもので、庵の山門を入ると中国科学院長の郭沫若氏の書いた「華佗記念館」の金色の扁額があがり、その奥に正殿が見えていた。

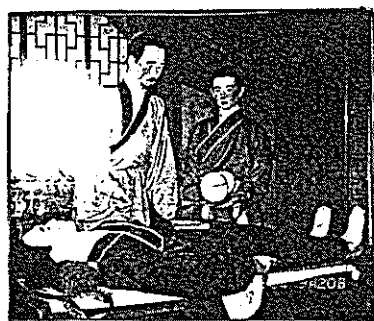


正殿の中央に立つ黄金色の塑像は、我々の精神を煥発するような熱誠が溢れ出て、腰に薬の入った瓢箪を下げ、救世の活人的な神医の風格を備えていた。「一針三国を定む」と言われた、その通りであった。

(上の写真の左側は華佗記念館の扁額、右側は華佗の立像)

記念館には華佗の医史文献(外科手術、麻醉術、麻沸散、五禽戲の創造、針灸術、寄生虫の駆除、回春養生術など)と実物の資料が展示されている。

中でも、麻沸散を使った数点の外科手術の蠟人形は、特に我々を注目させた。



(右の写真の左側は麻酔開腹手術、右側は針灸術の蠟人形)

記念館には7つの部屋があり「蒼生大医」

の扁額があがっていた。これは1984年9月、全国の華佗學術研究会の著名な専門医200人が亳州に集まり、故宅を拝見した記念に寄贈したものであった。



(右の写真は寄贈された蒼生大医の扁額)

前記した五禽の戯とは虎、鹿、熊、猿、鳥などの禽獣の動作から学んだ、長寿延命の保健体操のことである。すなわち、運動によって汗を出すと身体は軽くなって食欲が出る。これを根本原理として五禽に似た運動を華佗は考案し、普及させたのである。

我々一行が記念館の裏庭の広場に出ると、約20人ほどの少年少女たちは、華佗が考案した運動に現代の体操を加味した演技を披露してくれた。その数は20種類以上である。

我々のような年配者が子供のころ、田舎の祭礼のときに見せてくれた中国人の軽業とそっくりで、懐かしさを感じながら見学した。

(右の写真は太極拳に似た運動をする少年)



亳州では千余年間、柔剛をとり入れた五禽の戯が行われ、中国の近代体育の先達を走っていると言われている。それは実に鳥や猿を真似した魔術的なものばかりで、オリンピックでも最右翼の成績をおさめるのは一目瞭然である。

華祖庵の敷地の後方に故居が建っており、その回りには鏡のような薬池が広がり、柳の枝先が湖面に垂れ下がっている光景は古香古色を漂わせ、神域らしい感じがしていた。

（右の写真は華佗の故居の全景）

この神医「華佗」の名を有名にしたのは「三国志演義」であつた。

その中に「関雲、長骨を刮（ケズ）って毒を癒す」とあるのは、関羽が部下と碁を打ち談笑しながら、敵の流れ矢に塗られた毒に冒された腕の骨を削り取る場面で、三国志の関羽伝にある史実に基づいた話である。

関羽伝には大手術を行った医師の名が書かれていないが、内蔵手術までやってのけた華佗なら行ったであろう。

また「風疾を治（イ）さんとして神医身死（ミカ）る」とあるのは、後漢書の方術伝の中の華佗伝によるものである。

曹操の頭痛を治すために頭蓋骨を切開する脳外科手術を行なおうとし、曹操に「貴様は俺を殺そうというのか」と疑われたらしいが、曹操に殺されたことは事実である。

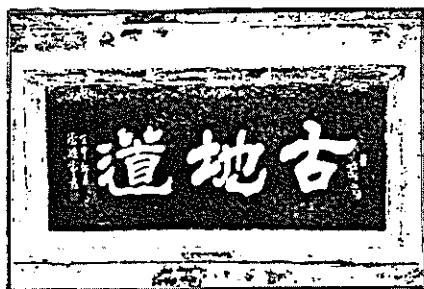
華佗の長寿の方法は幾つもあるようだが、華祖庵を去るに当たって私は「恭則寿」（恭（ウヤウヤ）しければ則（スナ）ち寿（イナガシ））という古い詩を思い出していた。恭しく小さなことにも注意深くすることが、最も長生きする方法であると言うのである。（以上は華佗記念館発行の神医華佗伝奇を参考）



古地道（59頁地図の③）

胃潰瘍に苦しめられている私は華祖庵を去ったバスの中で、医薬と日常の食事は同じであり、健康維持のためには医薬同源の原則に従い、食生活に注意しなければならないと自戒していた。

車は市の中心部を南下して大通りの中で停車した。通りに面して「曹操運兵道」の看板を掲げた入口が見え、その奥の煉瓦の壁には「古地道」と書かれていた。（右は古地道の看板と曹操運兵道の入口）

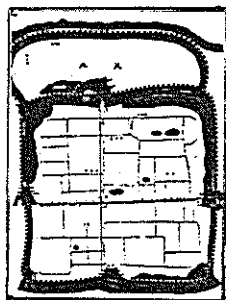


「古地道」は俗称を「曹操隠兵道」「曹操運兵道」或いは「神兵古道」と呼んでいる。建安初年（196）、曹操は亳州に屯兵、屯田して兵糧を備蓄し、兵器製造の基地をつくって軍事専門の地下道を築いた。

伝説によると古地道は縦横に交錯して城外に通じ、曹操は多くない兵士を暗い地下道から城外に送り出し、城外から城内に向かって反復攻撃を敢行して敵を麻痺させ、機先を制したという。

この伝説中の地下道は北伐戦争の時に偶然に発見された。続いて日中戦争の時の防空壕として使用中に、城内の東西南北の主要道路の両側に続々と発見され、城壁の四門に通じていた。

(右の図の周囲の黒い部分は城壁、城内の道路は地下道網)



立体的に分布して変化多様な地下道は、規模は大きく構造も複雑で、総延長は4000㍍に達している。今までに発見された軍事的な地下道としては最大で、古城の池のような価値があるから「地下長城」の呼び名もあるようだ。

地下道の構造には、土と木、煉瓦と土、煉瓦のみ、の3種類があり、形式には、直線、湾曲の単線と平行双道、上下両層道の4種類がある。

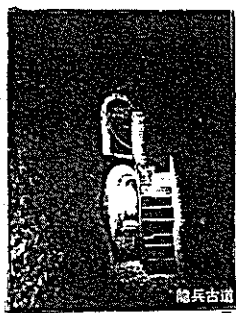
地表からの深さは一般に2～4㍍で最深は7㍍、道内の高さは約1、8㍍で幅は約0、7㍍、道内の交差点はT型で平行双道の距離は2～3、5㍍、道内には通気孔、伝話孔、燈籠(が、のり)等の付属設備も施されている。

道内から出土したものは弾丸、鉄刀、鉄燈、銅鏡、陶磁器、硯台等で、漢、唐、宋時代のものである。

漢魏時代は主として軍事作戦に使用されたが、唐宋時代は軍事ばかりでなく居住用等のためにも使用し、宋以降は不用となって廃棄されてしまった。

(右は上下両層道と単線運兵道)

(以上は亳州市発行の資料を参考)



我々一行は亳州のガイドに引率されて地下道に入った。約2000年の昔の世界が地下に遺されていると思うと、規模の大きさと云い堅牢な構造と云い、驚天動地の感がある。

「千軍は得易きも一将は求め難し」と言われているが、将(マ)に曹操は将に将たる人物であった。「井中に火を求む」というか、不可能なことを可能にする曹操こそ人の中の竜であり、その非凡なことは計り知れないものがあると感嘆しながら、暗中を模索するようにして手探りで前に進んだ。

現在、観光用に使用されている古地道は約300㍍程度だと思われるが、時間の関係上、一行は更に短縮されて極く一部だけの見学で終わった。

曹操は幾度となく敗戦を経験しているからこそ、このような発想ができたのであろうと考える私は、「敗戦は名将を生む」という名言を実地に学んだのであった。

世界最強のアメリカ軍が最新式の近代兵器を駆使しながら、劣悪な旧式装備のベトナム軍に敗れた原因の一つに、ベトコンの地下道が挙げられている。幸い私は両方の地下道を見学したが、この曹操運兵道の方が遥かに優れており、現代でも利用可能とおもうと兜を脱がなければならない。

湯 陵 (59頁の地図④)

古地道を出た一行は市中を再び北に進んで渦河に架かる人民大橋を渡り、北岸の譙陵北路の右側にある商(殷)の王・成湯を祀る湯王陵公園に入った。辺りは寂寞として私の心まで寂しくさすような気がしていた。

(右の写真は湯王陵公園の額)

以下、商(殷)の簡単な歴史を記述する。

商王の成湯とは子姓で、舜の世に司徒(官名)であった「契」(ケツ)の後裔である。契が商の地に封じられてから十余世を経て、「湯」は亳の地に居たのであった。

当時、夏王(商の前の王朝)の桀(ケツ)は暴慢で天下を乱したから、湯は遂に師を出して桀を征伐して幽閉してしまった。これを亳州では歴史上の第1次の成湯革命と称している。(桀は夏王朝17世、右の表)

ここで湯は諸侯に推されて天子となり、亳に都して国を「商」と号した。時は前1575年と伝えられている。

第19世の盤庚(バンコウ)は賢君の名が高く、黄河の水害を避けて都を殷(河南省)という地に移してから以降、国を「殷」と号するようになった。(右の表)

しかし殷の第30世の紂(チュ)は才能は人に優れていたが、奢侈淫楽に流れて税を高くし、天下を乱したから諸侯は背き、遂に紂は自ら焚死して殷は亡んだ。

このようにして商(殷)の世は30世600年で終わり、周の武王の時代となった。(右上の系図を参照)

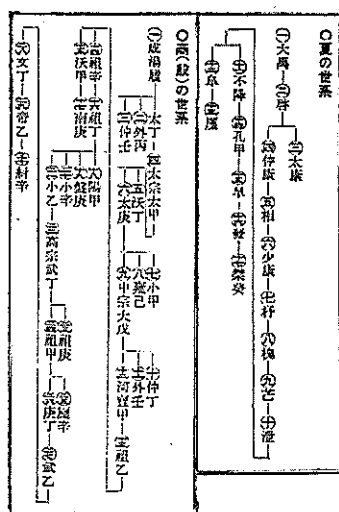
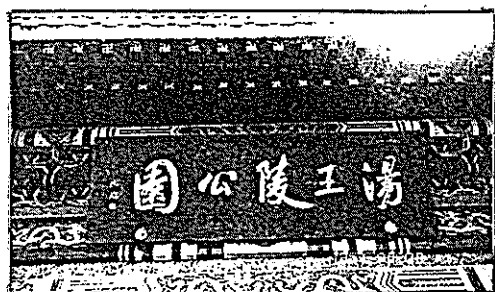
渦河の北岸にある湯陵の地は古名を「風頭村」と称し、この湯王陵は天下第2位の陵墓と尊敬されている。(第1位は第1代夏王の禹王である。上の表を参照)

上記したように「湯」が居た亳は当時は「谷熟」に属し、古称を南亳の地と言った。湯が都した谷熟の地は宋川西南35里(中国里)にあり、宋川は今の商邱(58頁地図参照)で、南亳故城はすなわち湯が都した地である、と亳州史に書かれている。

魏の初代皇帝の文帝の書いた皇帝陵記によると、渦北の風頭村の草むらの中にある陵は成湯の墓で、地理的に漢・魏時代の墓葬に適した地であったと記されている。

この陵は明嘉靖20年(1544)に大修理して同37年に廟堂を建て、松柏を植えて碑を建立した。陵の前の檜はその時に植えられたもので、樹齢は約450年の古樹である。(右の写真は碑と古樹)

商湯古跡には桑を植えて雨乞いをしたと伝えられてい



る。湯王の時代に7年間も旱魃がつづき、桑の木を植えて祈祷するとたちまち大雨が数千里にわたって降りだし、大豊作となったと言う神話が語り継がれている。

民国28年(1939)、県知事がこの地を湯陵公園として松柏を植え、土を掘って池をつくり花を植え、池の傍らに「后楽亭」をたてた。これは「天下の憂いを憂い、后、天下の楽しみを楽しむ」という意味である。

しかし文化大革命の時には、公園は資産階級の温床だとして数百万本の松柏、珍奇な華花や動物、湯陵古墓まで破壊した。現在再建中だが面積は旧来の3分の1で草創中である。(上記は亳州文化史を参考)

一行は朱塗り二層の山門から照壁を通過して奥へ進むと、鬱蒼として茂る松柏の森がつづき、さすがに商(殷)王・成湯の王陵という趣が感じられた。

湯王が名を竹帛に垂れたのは単なる運命だけではない、と治乱興亡の歴史を彷彿として頭に浮かべ、陵丘の方に向かって足を運んだ。

円形の御陵は土を盛った新しい丘で周りは石垣で囲まれ、「商成湯之墓」と刻んだ石碑が正面に立っていた。現地のガイドの説明によると、王の帽子と衣服が祀られているとのことだったが、真実のほどは甚だ疑問ではないだろうか。

陵丘の前に立つと、「殷鑑(イカン) 遠からず、夏后(カウ)の世に在り」という詩経の有名な句が、私の頭の中に浮かんできた。

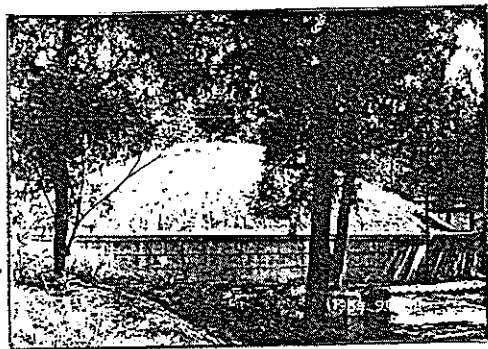
殷が鑑(カン)とすべき模範は遠い時代ではなく、すぐ前の夏の時代にある、と言う意味で、「前車の覆轍(フケツ)に鑑(カン) みよ」と同じである。即ち夏の桀王が暴虐のために滅亡したことを指している。心すべき言葉である。

苛斂誅求(カシツウキウ)を極めた桀が倒れ、夏は17世およそ400年で滅亡したが、歴史としては不明のようである。反対に殷は発掘等によって明瞭に存在が証明されているから、我々は中国最古の陵墓を参拝したのである。

調べてみると夏・殷・周の君はみな王と称している。王は帝と同じく至尊の称号で、王位世襲の制度は夏の禹王の時から決まったようである。

中国の古聖は政治を「王道」と「霸道」に分けているようだ。王道を以て理想的な政治とし、徳を以て仁を行う者を王者としている。これに反し土地を重んじるを霸道として、これを斥(シリ)けたのであった。

王道からみると土地は国家の要素ではない。国家は人であり、土地はこれを養う手段に過ぎないのであった。古代中国の政治、制度、文化は国家というものを超越していた。現在の世界の政治家たちも学ぶ点だと感じながら、陵墓を去った。



花戲樓（大関帝廟）（59頁の地図⑤）

乗車したバスは再び渦河を渡って西に向かい、百貨店や映画館、劇場、市場、旅行社などが並ぶ繁華街を通過して、北門の前で停車した。

周りに城壁が見えない城門は、昔のように復元したのであろうか。城門の上には古式豊かで絢爛豪華な朱塗りの二層の楼閣が聳え、これが本来の中国の姿だと懐かしく眺めていた。

（右上の写真は北門の高楼と華佗の像）

高楼の二階には「少年宮」と書いた金色の扁額が揚がり、地図を見ると文化館と記載されていたが、その名のとおり中国文化の粋を結集した建築のように見えていた。

北門広場の一角には薬都を象徴するように神医・華佗の石像が立ち、そこから北側の渦河に向かって狭い道が伸びていた。

バスが通れない古色蒼然とした昔のままの支那町を、一行はてくてくと歩かされ、たどり着いたところが渦河を背にした花戲樓であった。（上は風情豊かな古い支那町の景観）

市の北関にある「花戲樓」は中国の重要文化財に指定され、本名は「大関帝廟」又は「山陝（せん）会館」といわれるが、華麗な装飾の歌台（戯樓）があるから、一般大衆は花戲樓と呼んでいる。（右は花戲樓の正面）

関帝とは三国志で有名な「関羽」の尊称で、関羽は武神のみならず財神としても広く尊信され、中国全土を始め我が国にまで関帝廟が建っている。（廟は関帝廟、武廟、老爺廟として知られている）

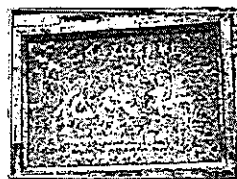
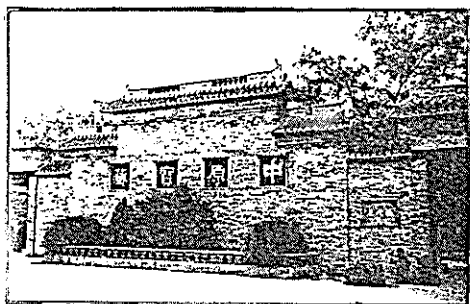
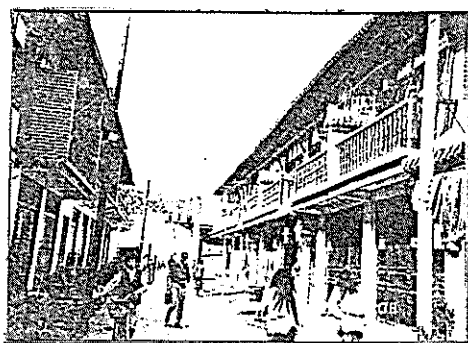
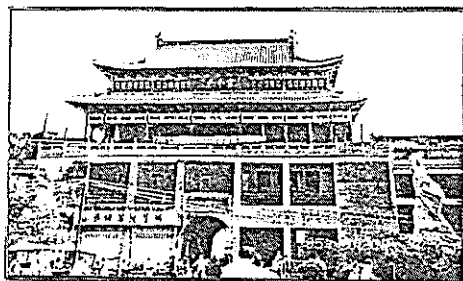
山陝会館の名は清の康熙年間に山西、陝西両省の薬商が建造したから、その名が付いたと云われている。

大関帝廟は清の順治13年（1656）に創建され、康熙15年（1676）に戯樓が、乾隆31年（1766）に大雄宝殿が新築された、と大関帝廟碑文に書かれていた

（上は花戲樓の石刻）

大関帝廟即ち花戲樓の正面に立つと、「中原宝蔵」の四文字の磚彫が煉瓦壁にはめ込まれ、入口の門の左側に「花戲樓」と青色の石刻が見えていた。（上の写真参照）

山門の内側にある花壇を設けた広場に我々は進んだ。その正面には石造り三層の壮観堅固な門構えの建物が建ち、正面の一階部分に「大関帝廟」の金色の扁額がはめ込



まれ、二階には「参天地」縦額が刻まれていた。

正門の前には鎮門の石獅子が両側に据えられ、さらにその両側に一對の鉄製の旗竿が天に向かって突き立っていた。(右は正門と旗竿)

高さ16桁余の旗竿の頂点には、今まさに飛び立たんとする鉄製の鳳が止まっていた。鳳の一方は太陽、一方は月を表しているとガイドは説明した。

片方の鳳が腐食して落下したのを夫婦の一羽が死んだと、中国人は上手く表現するのであった。

旗竿にはまた風鈴が吊されていて、「大義」「参天」の四文字も刻まれていた。この文字の意味は、関羽を誉めちぎった絶賛の辞だと思われる。

正門の東西両側は鐘楼と鼓楼となっている。それらの壁面には細かい数多くの石刻が嵌め込まれ、その人物、車馬、城池、楼台、亭などは実に見事なもので、暫く立ち止まって見上げていた。

石刻の図案は大梁城(開封)、郭子儀上書(安祿山の乱)、呉越の戦(戦国時代)、三顧の礼(三国志)などであったが、鼓楼の正面の彫刻は主として三国志の「関羽」のものが多く、我々は関帝廟に相応しい石刻に見惚れながら、生きた歴史に接したような感じを受けたのであった。

(右上の写真は、諸葛孔明が三顧の礼を以て迎えられる光景の石刻)

正門に連なって北に面して建っている、凸字形の舞台が「戯楼」であった。美しい格天井の舞台の正面には、珠をもてあそぶ二龍の木彫の屏風があり、「演古風今」と書いた扁額が掲げられているばかりでなく、「莫須有」(半信半疑の意)、「想当然」や「陽春」「白雪」の門額も見えていた。

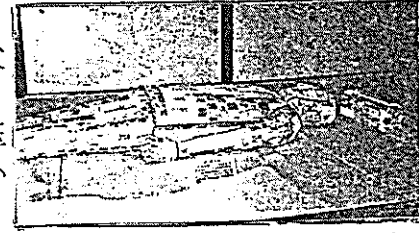
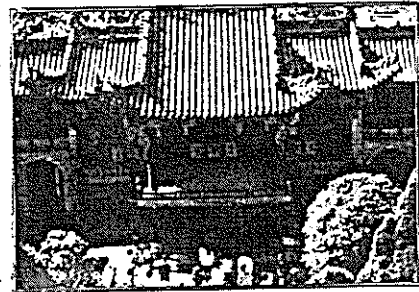
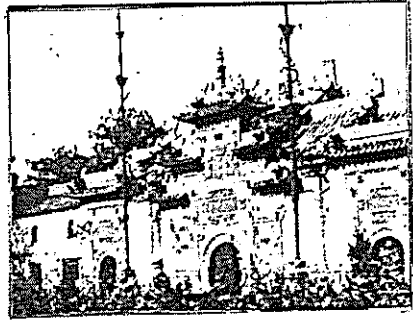
一曲陽春とは古今の夢を呼ぶことで、人物像には尽忠の面貌がよく表れ、四周に垂蓮のある精巧な木彫は、情を誘うものばかりであった。これらは三国志故事の十八の場面で、みな色彩が施されていた。

戯楼と対面して雄偉壮観な大雄宝殿が建ち、これが廟の主体である関羽を祀る殿宇で、その東西の門には「通神道」「便禅門」と書かれていた。(上の写真の上段は戯楼の全景、下段は戯楼の木彫)

多くの建物の中で最も奥にあるのが博物館となっており、特に我々の注目の的となったのは曹操の父親「曹嵩」(ワスウ、193年歿)のミイラであった。

このミイラは2400個の銀をちりばめた銀鍍玉衣で包まれ、1973年夏、城南の1号東漢の墓から出土したものであった。(右は曹嵩のミイラ)

建安5年(200)に関羽は曹操に捕らえられ、その麾下に入ることがあるから

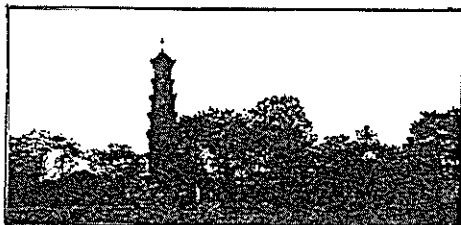


曹家と関羽とは全く無縁ではなく、曹嵩の屍をここに祀ったのかも知れない。

花戲楼（大関帝廟）は彫刻、彩絵、建築の宝庫として清代全盛期の代表作を集め、特に戦戯と美術の豊富さは花戲楼の名の通りで、亳州の名声は花戲楼から高まったと思われる。

漢石墓と曹四孤堆（59頁の地図⑥⑦）

花戲楼を離れた一行は再び古い町並みを文化館まで歩き、乗車したバスは宿泊している古井大酒店の前を通過して直線道路を南へ進み、停車したところは寂しい農村の一角であった。そこには「薛閣塔」（せつ、人名）が天高く聳え立ち、いかにも霊が宿っているような気配がしていた。（右は薛閣塔一帯の光景）



この塔の由来は、明代の役人が「薛慧」という人の林の中に「文峰塔」を立て、文学を奨励したのが始まりで、現在のものは清の乾隆37年（1772）に建立した5層の塔である。

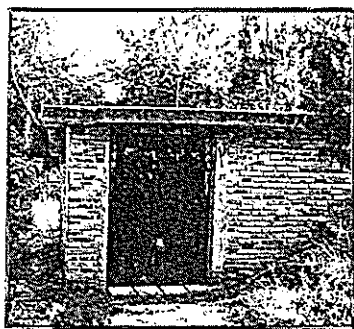
清の嘉慶2年（1797）、亳州の郡司（州の城防武官）の李が塔の後方に土塚を発見すると、それは三国魏の許楮の墓と伝えられていることを知った。

李は土を盛って山をつくり、その上に寺院を建てて白衣大士（観音様）を奉祀して「観音閣」と名付けた。

明の神宗万暦年間（1573～1620）、亳州人・薛慧は明の皇嗣問題から官を退いて林の中に隠居し、「文峰塔」を「薛閣塔」と改名した。

現在は盛り土した山はなくなり寺も毀れ、塔だけが悄然と立っていた。旧暦の2月19日の観音の日には、ここに善男善女が集まると言われているが、このような小さな村にも大きな歴史があったのである。

塔の立つ村の畑の中に細い農道が灌木の林に向かって通じていた。我々は一列になってガイドの後ろに続き、防空壕の入口のような煉瓦造りの小屋へと歩いた。



そこが「董園2号石墓」（とうえん、柳瀬）という漢石墓の入口で、管理人が石墓入口の鍵をはずして一行を内部に案内した。

（上の写真は董園2号漢石墓の入口）

亳州の人は々は曹操家族墓群のことを「漢石墓」と称し、地図にもその名称で位置を示していた。

我々は入口から地下に通じる石の階段を下り、そこから伸びる平坦な地下道を進むと、奥は幾つもの石造りの部屋となっている石墓が広がっていた。

これが彼の有名な沛国譙（亳州）の人・曹操の墓であった。傑出した政治家、軍事家、文学者の英雄・曹操が眠っていた石墓だったと思うと、黄巾の乱に参加して農民から身を起こした彼の歴史が、彷彿として我が脳裏に浮かんできた。

若いころ曹操の人相をみた易者が、「この人は帝位につき天下を安んずる相がある」

と言ひ、また別な易者は、「あなたは治世の能臣であり、また乱世の奸雄である」と言つた話は有名である。

戦乱の中でも名を成す武將は必ず身についた強運をもっているが、彼もその例に洩れない。しかし毛沢東は乱世の英雄になり得たが、治世の名帝にはなり得なかつた。そのことを考えると、曹操は有能な人材を見抜くすぐれた眼を持っていたのである。

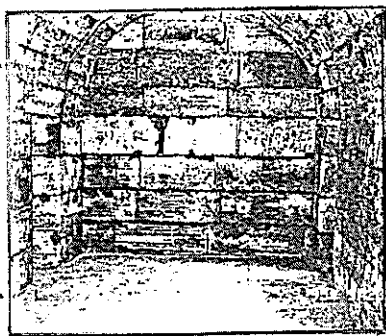


(上の写真は漢石墓の内部)

828個の石で造られた曹操の墓の他に、祖父(曹操の父・嵩は曹騰の養子となり曹家を継いだから、実の祖父ではない)の墓も発見されたが、清の時代に副葬品などは盗掘されたしまった。(曹騰は東漢后期の役人で、四帝につかえた有名な家柄)

墓室の長さは15、3呎、幅10、2呎、高さ3呎で、前室、中室、後室、東西南北の偏室等が設けられ、壁面には文武の画像石刻があつたが脱落していた。

この石墓の中から1000余点の銀縷玉衣や玉枕片などが発見され、それを修理したものが花戯樓の博物館に展示されていた。(右は曹操の石墓室)



一行は完全に修復された地下宮殿のような広い漢石墓を参観し、精巧な石の建築と厳肅さに驚嘆しながら、石段を上って地上に出た。

漢石墓から再び薛閣塔の立ってる部落を通ると、綿花畑は白い実をいっぱい着けて美しく拡がり、古い農家の周りには紫色の可憐な萩の花が咲き誇り、秋は次第に瑟瑟という光景を展開していた。

魏武大道を南下して快走したバスは、耕作地と反対側に見える灌木林の続くところで停車した。そこから100呎ばかり奥に向かつて歩くと、「曹四孤堆」と書いた石刻の看板が立っていた。これが董園村の1号墓で、地図上にも曹四孤堆と記されていた。



「孤」は「墳墓」のことで、「堆」は「群」を意味している。林の中にある一つの円形をした墳墓の丘の上に登ると、同じ形をした荒れ果てた丘が三つ見えていた。その中の一つの丘の袂には大きな「鼎」が据えられていた。

(右上は曹四孤堆の石刻の看板、右下は墳墓の丘と鼎)

ここは曹操の父・曹嵩、曹嵩の父・曹騰、長子の曹熾、次子の曹胤ら四人の墓所で、漢石墓とともに曹操家族墓群となっていた。



時移り世換(カ)わって過去の栄華は墳墓の丘には見えず、悲しいかな、人間は誰でも死ねば一個の墓が遺るだけであつた。丘に吹く秋のそよ風を浴びながら空を見上げると白い雲が浮かび、周りの林は一葉落ちて天下の秋を知ると言つた感じがしていた。

「蛟竜(コリョウ)雲雨を得ば、終に池中の物に非ず」、と呉の將軍・周瑜(ユ)は言つたが、英雄はいずれ時をえれば天下に活躍すると思ひながら墳丘の上から降りた。

閑古鳥が鳴くようにひっそりとして、訪れる人もない墓群の見学は終わり、これで本日の観光は幕を閉じることになった。バスは未だ陽の落ちない秋空の下を市の中心部に向かって快走し、ホテルに到着して解散となった。

商湯、秦漢、魏唐と栄えて金・元時代に衰微した亳州は、明・清時代に再び復活して72条街、36条巷があつたと言われているから、一行の中には骨董屋に掘り出し物を捜しに出掛けた人もいたが、私はホテルが経営する百貨店を窺見することにした。

亳州史を繙いてみると、漢方薬材を筆頭に古井貢酒（古い井戸の水で醸造したもので、万暦帝に献上して賛賞されたことから命名）、桐木（3000年の歴史を有し日本にも輸出）などが名産であった。しかし私には無縁の物ばかりである。

昨日亳州に来る途中、黄牛飼育を奨励している広告を見たから店員に尋ねてみると、亳州は牛皮製品の大名産地であった。店員との会話の勉強を楽しみながら数点の牛皮製品を購入し、部屋に戻ってメモの整理に取り掛かると、これまで観光してきた都市の中でも、古跡が飛び抜けて多いことに感動していた。

夕食は中国四大薬材集散地らしく「サソリ」料理で、昼食の「コオロギ」料理の比ではなく、食は広州に在りと言われているが、それ以上の驚きであった。又、左党の連中は35度の古井貢酒に盃を重ねていたが、私に印象を与えたのは梨の中に肉を入れた揚げ物であった。

9月21日 (木) 晴

漢方薬市場 (59頁の地図⑧)

明日は青雲の志を抱き、軍刀を腰にして青春を謳歌した開封行だと思うと、懐かしさが胸一杯に込み上げ、昨夜は輾轉反側して寝返りばかり打っていた。

今朝はホテルの直ぐ前方（西側）にある「漢方薬市場」の見学となり、橋を渡って市場まで歩いた。人の出入りが激しい大きな門の上には「亳州人民歡迎八方賓客」と書かれ、「有朋自遠方来 不亦楽乎」の垂れ幕がひらめいていた。

（地図上には中薬材大世界と表示。右の写真は市場正面入口の混雑風景）

1日の出入りする客の数は5万人以上というから、カラフルな人の波は途切れなくつづき、その人たちを飲み込む鉄筋、鉄骨の本格的な建築物のほか、大アーケード街も先が見えないほど伸びていて、我々の予想を遥かに超える市場であった。

亳州は漢末期の有名な政治家・曹操と、神医・華佗の故郷で、中国第一の漢方薬材集散地として名高く、1986年、この大規模な薬材の特別市場を造ったのであった。

市場の中は殷賑を極めて混雑のあまり、我々は団体行動を取ることはできず解散し、自由行動となった。広さ13、000㎡の市場には固定した店舗が5000軒、臨時の露天の店が5000軒もあり、何処から見学して良いのか途方に暮れる程である。

どのような漢方薬材があるのかと「メモ」を取りながら歩いた。亀、トカゲ、生姜、



昆布、枸杞（ク）、タツノオトシゴ、象牙、鹿の角、蛇、朝鮮人参、茸、鳩内金、元胡碎、蟬、蜜柑の皮、柿、ゴキブリ、各種木の根、花粉、杏、鶏頭の花、竹の根、瓜、茜芋、桂の木、犀角、熊胆、各種草の根、木の皮と書き続けたが、書き切れるものではない。

概ね種類は3000種以上もあると言うから、植物、動物、鉱物で生薬として薬用に供せられないものはないようであった。

（右上の写真は市場の極く一部の光景）

何処を写真に撮ったらよいかと捜していると、愛想のよさそうな若い商人が、人に好意を示す青眼で私に話掛けてきた。中国首脳は戦後50年の今もなお過去の日本を攻めているが、彼らは商売に徹して国境も人種も偏見もないのであった。

早速、カメラのシャッターを切ってアドレスを聞いた。一人は竹、蛙、羊、専門の方園村の「甘会」氏、他の一人は健胃・条虫駆除薬の檳榔（ピンヤウ）樹を売る花園村の「王万清」氏であった。（上の写真は王万清氏の一族）

帰国して直ぐこの二人に写真を送ったが、紀行文完成時までに返信はない。私は小さな交流が日中友好の気運の種子となればと思っただけで、彼ら若者の大躍進を祈り、礼状を期待している訳ではない。

亳薬、亳菊などの名声の高いものを始め、種苗、煎じ薬、調剤した薬までも店頭に並び、日本はもちろん世界36ヶ国から買い付けに来ている大市場の見学は終わった。

極く僅かな一部を廻って出口の所に来ると、そこにはアラビア半島のオマーンで見た「乳香」まで店先に並び、その横に龍齒や百足（ムデ）まで売られていた。

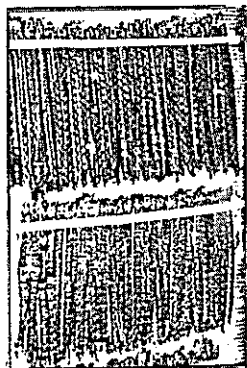
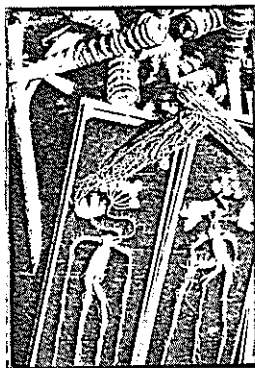
（右の左側は朝鮮人参と鹿角、右は百足）

常時、漢方薬を愛用している私は、亳州の記念として少々の枸杞と人参を買い求め、薬都・亳州の偉大さを噛み締めながら市場を離れた。

遠い古代から中国では漢方薬が発達し、明の洪自誠著の菜根譚には「病可以保身」と書いてある。病気というものがあるから人は保健衛生に注意して、身体を健康を保つのだと述べている。これは華佗の「五禽之戲」の精神に通じており、ものは考えようだと市場を去っていった。

（右の写真は、とぐろを巻いた蛇）

また白居易が詠んだ「応病与薬」は、病の種類に応じて



適薬を与えるということで、人に応じて法を説くのと同様、華佗は心の養生が先ず第1だと述べていた。本当に中国の含蓄のある言葉は、物心両面の妙薬である。

漢方薬も医術も要は長生きのためである。老子も教えの中で「長生久視の道」即ち、長生きの方法を説いている。「久視」とは瞬きもせずじっと見つめることで、道家（老子を祖とする道教を信奉する人、道士）で久視を養生法だと説くのは、その道に一心不乱になれと言うことである。

そうすれば、私の旅への執念も長生きの道に通じるのだと、勝手に解釈して市場を離れたのであった。

亳州～商邱～開封（下図参照）

戦時中、開封を中心とした黄河流域の戦闘に従軍していた私は、河南省の地形には精通している積もりでいたが、河南省との省境に近い安徽省・亳州は、その名称さえも今回の旅で初めて知ったような状態で、実に中国大陸は広大だ。

悠久の偉大な歴史を誇る亳州に連泊して得た博い知識は甚大で、名残りを惜しんで12時に出発した。前方から迫ってくるのは「麦と兵隊」の歌詞のような麦畑ではなく、歳月は移り変わって今は黄金の稲田が延々と広がっていた。



長江から北上してきた農村の風景は日一日と趣が換わり、鹿を追った中原の地に生えている草木には感情はないが、懐かしさの余りであろうか、木の葉が舞い落ちて、歓迎しているような錯覚を覚えるのであった。

古代中国の英雄たちが興亡の歴史を繰り広げた中原を疾走し、沃野千里の天与の穀倉地帯である河南省に入った。それは自動車のナンバープレートが断然、「豫」の字が多くなってきたことで明瞭であった。（河南省の旧名は豫州）

街道の青々とした草木に風が吹いて光を発するから、「風光」という言葉ができたのであろうが、河南の風光の一本一草も見逃さないと目を皿にして凝視していた。

やがてバスは「商邱」（上図の中央右側の商丘）の市街に入った。戦国時代の思想家であった「莊子」の生誕地である商邱も亦、悠久の歴史をもつ都であった。

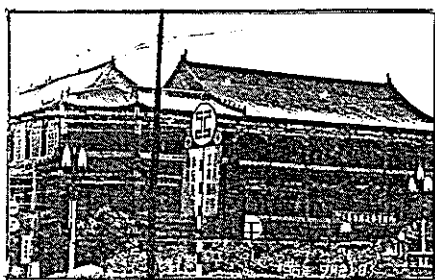
「商」（殷）の時代に南亳と称して都を置いたこともあり、「周」の時代に微子をここに封じて商後と呼んだことから、ここを商邱と呼称したと伝えられている。

宋時代になると開封（汴、汴）を東京、商邱を応天府とし、金時代になると商邱は「歸徳」と呼んだ。明時代は商邱とまた改称して今日に及んでいるが、中原の重要な地であったことは疑問はない。

商邱は私にとっても思い出の深い土地である。私が聯隊旗手時代に佐久間騎兵旅団がここに駐屯していた関係から、何回か連略、打合せのために訪れたことがある。

商邱城は当時、龍海線（ロウカイセン）の商邱駅から4キロ以上も離れ、古くさい寂れた大城壁のある街まで洋車（人力車）を走らせ、木賃宿に泊まったものである。

時勢は移り変わり、昔と今眼にする光景とは天と地の開きがあり、爽やかな秋空の下に宋時代の町並を思わ



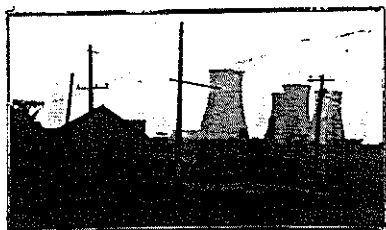
す建築美が続き、中には「帰徳」の看板まで眼に映った。（上は現在の商邱市街）

春が過ぎれば夏が来、夏が過ぎれば秋が来る。夜が過ぎれば昼になり、昼が過ぎれば夜となり、天道の運行は一つの誤りもない。しかし人間の世界の変動は不規則で、50年前の自分と照らし合わせて短い寿命をひしひしと感じていた。

瀋海線と平行して走る街道から見える鉄路には、数々の思い出がある。済南へ、青島へ、天津へ、或いは陸大受験など、10回以上も世話になっているだろう。敵に爆破されて転覆した列車の凄惨な光景まで眼に浮かんできた。

バスはいつの間にか蘭封（前頁の中央左上の蘭考付近）を通過した。徐州会戦の時、退却する蒋介石軍の退路を遮断する目的で、私の出身原隊である札幌聯隊が蘭封から陳留（前頁地図の左上）の線に進出し、先輩たちが殊勲を樹てた激戦地であった。

バスはまっしぐらに綿花畑の街道を驀進した。道路は新設されたのか、想像していた記憶に残るものは何一つ見えない。ただ街路樹の黒い陰影が長く路面に伸び出し、まだ陽の落ちない秋空に寝ぐらに急ぐ鳥の姿が多くなってきた。



開封に近くなれば、有名な鉄塔は遠方からでも必ず見える筈であった。しかし今では街路樹が視界を遮って見えなくなったと嘆いていると、左側（南側）に火力発電所の数本の煙突が網膜に映り、空に吹き上げる煙は開封到着を知らせているようであった。（上は開封南方の火力発電所）

開封の躍進を展示するように、各所に工場の煙突やテレビ塔が高く聳え、道路標識の数字も極端に少なくなったと思うと、バスは瀋海線の踏切を渡った。そこから露天商が延々と続いて駅前通りとなったが、南関街は昔の面影を全く残しておらない。

14年前に訪れた時には破壊されていた南門付近は、僅かながら城壁が再建されていた。しかし高樓のない城壁は中国の伝統を放棄して、心の豊かさを忘れていているように見えるのであった。（関とは城門の外の町の意）

南関街を昔の城壁に沿って東西に伸びる新設道路を濱河路と称しているが、昔は汚い治安の悪い一角で、我々は足を踏み入れたこともない貧民街であった。その街が今では高層建築が櫛比して、輪奐の美に驚愕反応を起こしてしまった。

往時の外濠は奇麗に改修されて汴河が流れ、南門から駅にかけた南関街には学校、病院、百貨店、中国人用ホテル、旅行社、各種工場、長距離バス発着所などが建ち、文化的な匂いのする副都心のような存在となっていた。

底知れずの感がする発展した濱河路を右折し、迎賓路に入って直ぐバスは停車した。そこが旅の疲れを癒すことになった「東京賓館」で、西南門の傍らに建つ開封第一の

最新式近代ホテルであった。前に広がる庭園には仙人のようなイメージを与える太湖石が座り、風格のある鉢植えの菊や盆栽も並び、如何にも風流な古都の文化をもって歓迎していた。

亳州を12時に発ったバスが開封に到着したのは18時30分であった。しかし長途の旅が終わりを告げたものの一息き入れる暇もなく、レストランでの夕食となった。時を移さず、明日、私の「中牟行」の通訳を勤めてくれる「邵珍」女史が、ご丁寧にも挨拶に来てくれ、出発は午後1時と告げられた。

果たして中牟行が実現できるのかと不安感を抱いていた私には、観音様が現われたような喜びであった。

彼女は東京賓館も経営する開封中国国際旅行社の副総経理（副社長）で、日本を出発する前から通訳を依頼してあったが、まさか副社長自らが通訳を引き受けてくれるとは思わず、弥が上にも心底から感謝したのであった。（上の写真は東京賓館の庭園にて邵珍女史と記念撮影）



夕暮れに寝ぐらに帰ってきた「帰禽」のような思いでホテルの人となり、心温まる持て成しに「帰思」（帰心）は募るばかりで、古巣の開封に帰ってきて寝る「帰臥」の楽しみを味わいながら、特別な上にも特別な感懐をもったのである。

先ず古都開封の観光記事の前に歴史の概要を記す。

開封の概要

開封は河南省（現在の省都は鄭州）の直轄市で市街区の面積は360㎢、人口は約80万、管轄下の5県を加えた総面積は6、444㎢、人口は380万である。

開封の歴史は古く中国六大古都の一つであり、中国最初の王朝である「夏」の都・「老丘」は、開封のすぐ南にある陳留（私も駐屯したことがある）である。

続いて3000年ほど前の周の文王の子・畢公（ヒツ）が、ここに都を開いたのが始まりで、春秋時代に鄭の荘公がここに倉城を築き、「開拓封疆」（疆は境界）の意味をとって「開封」と名付けた。

戦国時代の魏が都した「大梁」（ダイリョウ）で、秦の時代には三川郡に属し、漢となって陳留郡を置き、曹操の魏はこれに習い、北周のときに名を「汴州」に改め、隋・唐のときもこれを踏襲した。

五代（907年唐が滅亡してから約60年間）となって後梁がここに都して「東京」（トウキョウ）とし後晋、後漢、後周、北宋は皆ここに都したが、「金」になってここを「汴京」（ペンキョウ）と称し、のちに「南京」と改め、明の初め「北京」としたが、次いで開封府と称して河南省の首府と定めたのであった。

（上の表は、歴代王朝の開封建都の年表）

王朝名	建都期間	名称	年数
魏(戦国)	BC 364~BC 225年	大梁	140年
後梁	AD 907~923年	東都	13年
後晋	AD 937~946年	東京	9年
後漢	AD 948~950年	東京	3年
後周	AD 951~960年	東京	9年
北宋	AD 960~1127年	東京	167年
金	AD 1214~1232年	汴京	18年

特に北宋の時代は都として167年間もつづき、北京の故宮博物院に残る清明祭（春分）の「清明上河図」（セイメイジョウガズ）は、在りし日の開封（東京）の繁栄を今に伝えており、庶民の生活が生き生きと描写されている。

この図はNHKの報道特集も数回放映していたが、北宋時代は今までにない大発展を遂げた時代で、我々が駐屯していた時にはその文化は明瞭に遺されていた。

（右は北京の紫京城内に遺る開封の清明上河図の賑わい）

北宋は建国以来、決して大国ではなく強大国ではなかった。北辺の守りは常に危うく、加えて内政は混乱していた。

そして国政の乱れは理財に敏、徳義に鈍、心情は軽佻浮薄、風俗は趨媚矯飾（スビキョウシヨク）といった世相を生んだ。

開封の市民は日々華やかな刹那の享楽で街を満ちし、真の貴族たらしとする憧れは五代時代の戦乱の中に見捨ててしまっていた。それよりむしろ禁中の人たちが、街の活気に誘われて出て行く時代であった。

（右は北宋時代の開封の地図で、周囲はそれぞれ約27、11、3もの外、内、皇城の三重の城壁に囲まれていた）

私が駐屯していたときに歌った開封小唄にもあったが、浮き名流した宋の徽宗は開封の街で育った。4才で父・神宗を失い、母の地位も高くなかった彼は、15才で王に封じられたが単なる名目に過ぎなかった。何一つ不自由なく何一つ刺激もない彼には、それが予定されていた人生であり、後日、金に滅ぼされる皇帝となったのである。

彼（徽宗）は誘われるように朝の街に出る。城門が開くと同時に近郊の農民が流れ込んできて朝市を開いた。そこには卵を売る女がいる。野菜をロバに引かせて男が通る。肉屋もある。麵の店もある。店先で包子（パツ）を揚げる臭いがする。100万都市（当時）の朝食が彼の眼前で商われていくのであった。

遠来の商人が満載の船で運河を乗り込んできた。滑車を使って荷揚げする男たち、大通りには舶来品を扱う店舗が並ぶ。絵画、骨董、絹・毛織物、漆器、薬品など、目抜き通りを歩くと手に入らないものがない賑わいである。

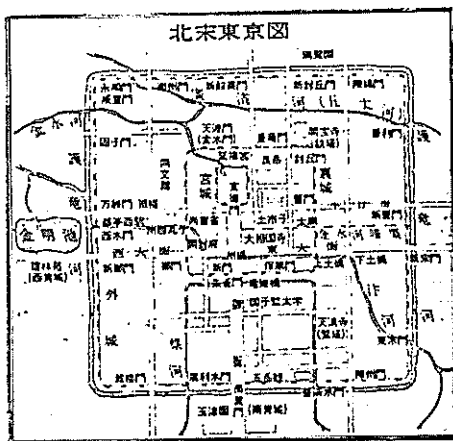
物ばかりではなかった。サービス業も盛んで下男下女の周旋屋、吉凶の宴席をすべて請け負う茶屋、酒屋、葬儀屋、そういう店を彼はいちいち覗いて歩いた。

夜の街は明るかった。勾欄（コウラン）、瓦子（ガシ）などと呼ばれる歓楽街には、50に余る芝居小屋が並び、八卦見、手品、軽業などの小屋も無数にあった。（右の写真は京劇）

京劇や雑技のような現代のその源流は、疑いもなく開封の瓦子勾欄にあると、東京夢華録に記載されている。開封はまたユダヤ



宋代の開封の賑わい（『元祐元年清明上河図』より）



豫劇（京劇）「平定城夜話」より

人が中国に定住した最初の町であった。北宋時代、ユダヤの商人が中東から天竺（今のインド）を経て開封にやって来た。そして真宗皇帝の許可を得、漢民族の姓を賜り、開封に定住したのであった。

ひととき明るい高樓は政府直営の酒屋で、酒は専売であったから、鳴り物入りで新酒を売り出す税収は、なくてはならない国家の財源であった。

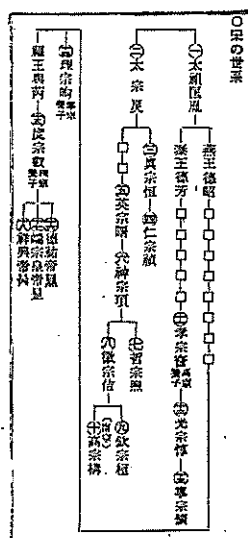
高級料理店の大厦（タカ）からは、楽曲の調べにまじって女達の笑う声が聞こえ、路傍には担ぎ酒屋の一杯売りもあり、庶民は宵を楽しんでいた。

彼（徽宗）が浮き名を流したのも当然で、そうするだけの富とそうする以外にない時間だけが、彼の財産であったと伝えられている。

中国の歴代王朝の中で官僚の俸禄が最も低かったのは明朝で、最も高かったのは宋時代であった。そして庶民の営みが清明上河図のように絵になるのは、暮らしが人間らしい物になったからであろう。

宋の太祖の趙匡胤（チウキョウイン）は武将であったが、武家政治を否定した。貴族でも武家政治でもない政治形態が宋時代に生まれたのである。文官政治とでも言うのであろうか。

市民の消費生活は日本の元禄時代の江戸以上であった開封は、紆余曲折はあったものの、その後、清の滅亡までの約1000年近くも続いたのであった。（右は宋の系図）



文明も発達した宋時代には世界的な大発明が生まれた。当時発明された活版印刷は、紙の発明と並んで中国が世界に誇る偉業であった。その外にも宋時代が世界に貢献した発明は、羅針盤と火薬であった。これらはマルコポーロによつて西洋に伝わったのである。

私が経験した昔の開封は、上記したような宋時代の絢爛豪華な奥ゆかしい多くのものを残し、それを味わうことが出来た古都であった。宋代は人間尊重と言えるような、自由の花が開いた偉大な開封であったと、駐屯していた当時から感じていた。

開封はまた国際都市でもあった。現在でも開封にはユダヤ人の後裔が住み着き、ユダヤ会堂の遺跡や石碑も残されている。その石碑には開封に於けるユダヤ人の歴史と会堂の変遷が記載されている。

勿論、イスラム教徒やカトリック教徒も多く定住している。私が駐屯していた時も現在も「清心」と言う文字が街の各所に見えていた。例えば清心料理と言えはイスラム料理で一切豚は使用せず、清心00学校からはコーランが聞こえてくるのであった。現在の中国では西安に次いで開封は、国際都市の名残りを遺しているのではないだろうか。

9月22日

(金) 晴

朝の散策 (下の開封の地図参照)

無事に開封に到着した満足感を覚えた昨夜は、幸いに興奮することもなく、嗜焉(トリエン、肥を詰めること)として深い眠りに就くことができた。

しかし老人の眠りは早く目が覚めて、夜明けまで眠ることはなかった。

朝食前の一時、ホテルの庭を散歩して太湖石の築山がある池を眺めていると、奇麗に開いた牡丹の鮮やかな美しさに魅了されてしまった。

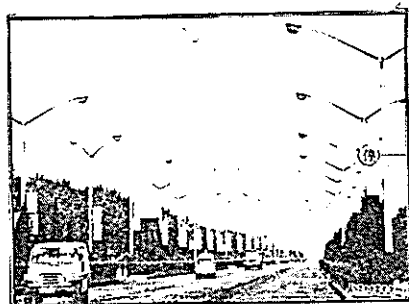
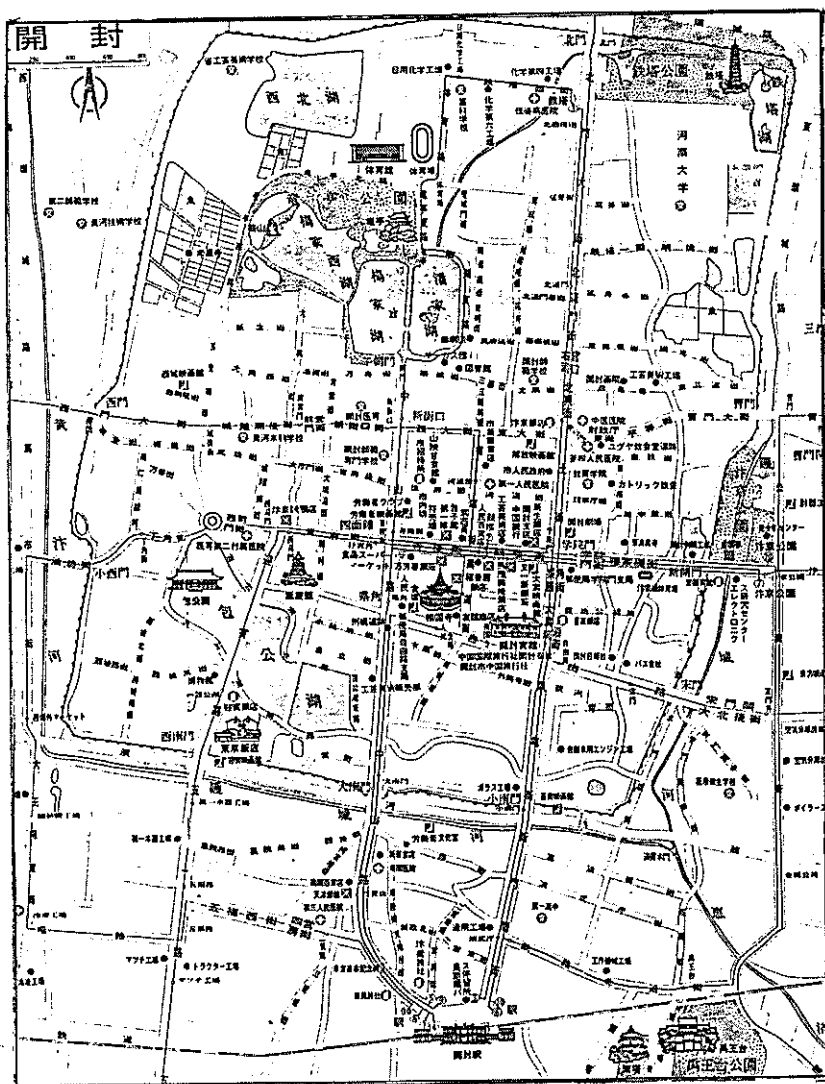
引力の強い開封の街は、自然に私の脚をホテルの外に向けさせ、門を出て西南門の方向に歩いていた。

中央分離帯のある片道2車線の濱河路は、今日の快

晴を約束するように照り出され、広い舗道には数十人の人たちが集まり、剣をもった太極拳の真最中であった。(右下は濱河路の景観)

開封については生き字引だと自認していた私も、あの当時、危険な百姓町であった西南の城外は未踏の地であり、とりあえず、見えてきた新しく造った城門(門はなく城壁の一部のみ)へと急いだ。

汴京時代から100万市民を養うために、山東から五丈河、河南から蔡河・金水河、江南と河北・陝西をつなぐ汴河の四大運河が、すべて城内に導入さ

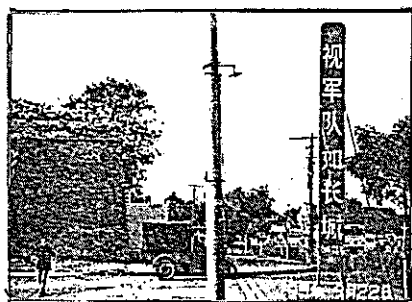


れていたように、城南の外濠を流れる現在の汴河は満々と水をたたえていた。

濱河路にはまた「視軍隊如長城」と書いた朱塗りの大看板が立っていた。いつの間に開封は軍都になったのであろうか。

後刻、通訳の焦占有氏に、旧日本陸軍軍用飛行場は現在どうなっているかと尋ねると、今は中国空軍の重要な基地となっていた。思えば私が敵情視察のため初めて搭乗した飛行場であった。（上は視軍隊如長城の看板が立つ西南門付近）

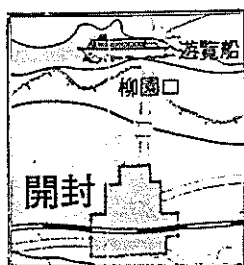
「往時渺々すべて夢に似たり」、と白居易が詠んだ詩を思い出しながら朝の散策は終わり、画龍点睛を欠いて龍頭蛇尾にならないようにと、観光の出発を待機していた。



黄河・柳園口

本日の開封の観光予定は、午前中は黄河の柳園口と鉄塔公園、午後は竜亭、相国寺などの市内観光と告げられた。午後、別行動をとる私は、沢山の名所旧跡がある古都を訪ねてまで、なぜ黄河の観光をしなければならないのかと、不満を抱く連中も居たのではないかと心配していた。

ガイドが先ず最初に黄河を選んだのは、黄河は漢民族とその文化のシンボルだからだと私なりに解釈した。中国で「河」と言えば「黄河」を指し、「江」と言えば「長江」を指している。（上は柳園口と開封）



青海省の山奥の湖に源を発し、中国大陆の北部を西から東へと悠々4000kmを流れる黄河は、中国第2位の大河で世界第8位である。

この河の流域の地層は黄土層で、これは太古の昔に中央アジア方面から吹き込んできた細かい砂が、積もり積もって出来た地層である。この黄土を溶かしてくる河の水は黄濁しているから、後世になって人は黄河と名付けた。初めは河の代表みたいに、ただ「河」という名で呼んでいた。

中国の古代文明は総べてこの大河のほとりに起こり、その文明を作り出したのが漢民族だと、彼らは黄河を誇りに思っている。

黄土地帯はその地質のため、深い森林などが無いから開墾がしやすく、少しの水があれば肥沃な耕地となるので、農業には恵まれた地帯であった。

こうして黄土地帯に最初の生活を始めた漢民族は、その黄土の恵みで早くから農業を営み、その文化を栄えさせることが出来たのである。だから彼らは黄河を「母なる河」と呼んでいる。

黄河見学にホテルを発ったバスは、城内を南北に走る迎賓路を北上して右折した。今は取り壊してしまったが、時計台のあった鼓楼の通りを左折した。威風堂々と闊歩したあの市街は移り変わりが激しく、正に「滄桑の変」（桑田が滄海となるような急変）と形容すべき状態で、夢想もしなかつた変貌ぶりであった。（前頁地図参照）

前方に現れた「宋都御街」（77頁地図の新街）の輪奐の華美に陶醉しながら、すっかり化粧直しをした潘家湖、楊家湖の湖畔を通り、北門大街を北へ進んだ。

街路樹の木の間がぐれに僅かに姿を見せる、竜亭の黄色い屋根瓦を左に眺め、右側に大きく広げた鉄塔公園の大変貌に肝をつぶし、右顧左眄（ワザン）しながら北門を通り過ぎていった。

一時とはいえあの当時、敵に占領された北門、砂丘地に疎林があった北関街も昔の面影を留めず、遠い過去のことは朦朧として夢のように思えてならない。

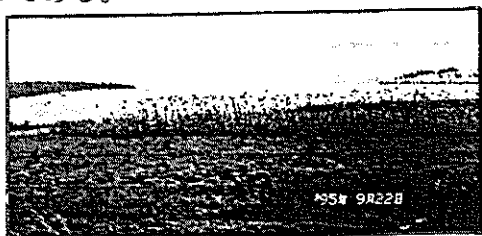
一面に黄金の稲穂が実った夢想だにしなかった変貌を眺めながら、開封北方約10㌔地点の柳園口に快走して、黄河の大堤防の手前でバスは停車した。

堤防の上の幅は30㌔ほどあるだろうか、黄河の水面との比高はどれ位であろうか、と一番それに気がかかって注目していた。私の中国戦線の戦闘は、敵と戦火を交える直接対決のほかに、魔の河・黄河との戦いが常に付きまとったからであった。

泥を運ぶ気狂い河の河床は年ごとに高くなり、堤防を毎年高くして堅牢にしなければ直ぐ決壊であった。日本の河の決壊とは桁が違い、数十㌔に及ぶ広範囲の平野は瞬く間に洪水に飲み込まれた。その物的損害は勿論のこと人的な被害もまた甚大で、私は幾度となくその惨状を体験したのである。

貴重な私の体験では、直接、流線部（最も流れの速い部分）が堤防に突き当たれば、堤防の下部分がえぐられ、如何なる堅固な堤防も崩壊の運命にあった。だから大黄河の堤防を見ると自然に私の心が痛んでくるのである。

中原を制する者は天下を制すと言われるが、黄河を制しなければ中原を制することは出来ない、と当時から常に念頭に思っていた。そのようなことを回顧しながら、楊柳が植林された河川敷を100㌔ほど歩いて展望台に立った。（右は柳園口の黄河の流れ）

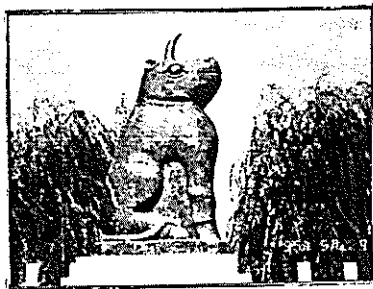


幅広く浩々とした千古の流れが悠々と東に流れ、「黄河の水、天上より来たる」といった平和な光景であった。本当に懐かしい景観である。

黄河の岸に立った孔子は「美なるかな水、洋洋乎」と、自分の人生の浮沈変転を顧みて嘆息したと言われているが、黄河の濁流と悪戦苦闘した私は孔子以上の感想をもっている。

いま眼にしている波一つ立たない平穏な黄河は、中国文明の母なる大河の様相である。しかし怒濤の如く逆巻く黄河は大砲よりも怖く、生死にかかわる危機意識を感じていた。

当時を回顧すると、年老いて物忘れがひどくなった現在の私に、黄河は何を訴えているのだろうか。それは平和であった。



河川敷の一隅に黄河を眺める「鉄犀」が孤然として立ち、その背中に「鎮河鉄犀」と刻まれていた。黄河の水中に住む竜が暴れると氾濫を起こすと言う伝説から、竜を食べてしまう想像上の動物が「鉄犀」であった。（上は河畔に立つ鉄犀の像）

この鉄犀は明の正統11年（1446）、当時の河南山西巡撫吏（役名）の「于謙」

が、黄河の氾濫を治めて庶民が安泰に暮らせるようにと、鑄造したものである。

于謙は中国・明時代の優れた政治家、軍事家で、一生を清廉な官吏として過ごした。河南山西巡撫の職に就いたとき、増水期になると自ら大堤防へ行き、洪水を防ぐ指揮をとっていたと言う。

開封城の南側に「禹王台」（77頁地図の右下）があるが、夏の禹王は治水の神様として中国全土に祀られている。開封の最大の難事は治水であり、神・禹王とともに明の于謙はこのような形で、川岸の鉄牛村に祀られていたのであった。

鉄犀は全身が真っ黒で角が天を指し、城を護る戦士のように逆巻く大河を睨んでいたが、一行は鉄犀の像を見詰めて帰路に就くことになった。幸いに我々は中国が誇る二つの大河に臨み、古代中国の文明に接した旅の意義は評価してよいだろう。

鉄 塔（77頁地図の右上）

黄河から南下して開封城の北門を通過すると、直ぐ左側（東側）が鉄塔公園の入口であった。北宋の1049年に創建された8角13層、高さ55、88尺の琉璃瓦の塔が、鉄色に見えるため「鉄塔」と呼ばれるようになった。

鉄塔は北宋の皇祐元年（1049）、「開宝寺」内の「上方院」の「夷山」に建立され、「開宝寺塔」と呼ばれた。これが正式名である。

度重なる歴代の戦乱と黄河の数次にわたる氾濫により、巨刹は跡形もなく消え去ったが、唯一、鉄塔のみが厳然として昔の姿を残して来た。

開宝寺の旧名は「独居寺」と言い、「宋東京考」によると創建は、北齊天保10年（559）である。

唐の玄宗皇帝が開元17年（729）、泰山での「封禪の儀」（天子が天に誓う儀式）が終わった帰路、汴州（開封）に立ち寄り、独居寺の傍らに行宮（アツグ、儀所）を建て、「封禪寺」と改名された。

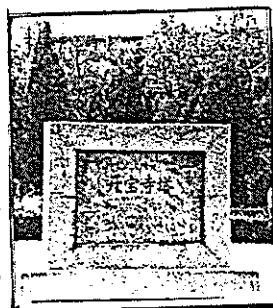
北宋時代に封禪寺は旧封丘門（77頁宋代地図の中央右上）の近くにあり、宋の太祖の開宝3年（970）に年号と同じく開宝寺と改名され、北宋の歴代皇帝は祈祷のため屢々行幸した。

以来、相国寺らと共に寺領が与えられ、全国の科挙の試験を行うなどで名声は高まり、国際仏教会に大きな影響を及ぼすようになった。

北宋の靖康元年（1126）12月、「金」の軍がこの地に入城した際、開宝寺は焼き払われ、ついに再起不能となって今日に到っている。

その間、中州八景詩、夷八景詩、梁苑八景詩、汴城八景詩などの詩に詠まれている。その普濟三千世界の声は、姑蘇（現在の蘇州）の夜半の声も比べられないほどであったと言う。

歴史の古い開宝寺は24院もあるほどの大寺院で、その中の上方院は開宝寺の東院であった。夷山の上にあったから俗称为上方寺とも呼ばれていた。そして俗称・上方寺に立つ鉄色をした琉璃塔を、後世の人は「鉄塔寺」と呼んでいた。（上は現在立っている開宝寺塔の碑、後方は河南大学）



「金」の正大2年（1225）に大修理した上方寺に漆塗りの菩薩5000尊、白玉仏、文殊・普賢の二菩薩が祀られたが、元末には戦乱によって鉄塔以外は総べて烏有に帰してしまった。

明の洪武16年（1383）上方寺は再建されて「祐国寺」の名を賜り、同29年（1396）鉄塔内に阿弥陀仏の琉璃像が祀られ、「上方祐国寺」の額が献納された。

天順元年（1457）、北京から僧が派遣されて「祐国寺」の賜額などが奉納され、明代には数次にわたって寺は整備された。上方寺の復興は往時の巍峨壯麗と思わせると書かれている。

前に山門、左右に脇門、門前には丈余の高い塀壁、東に鐘楼……………正殿の中には接引（阿弥陀仏のこと）の銅仏一尊、両側に羅漢仏、後方に八角琉璃塔があり、「天下第一塔」の扁額を賜った。

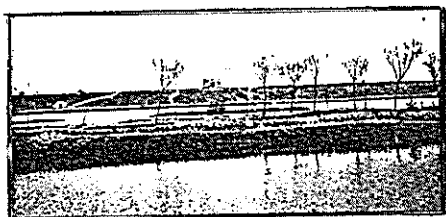
しかし明末の黄河の決壊時には、寺は総べて廢墟と化して鉄塔のみが残り、塔はぼつんと天の雲を破って立っていたと記されている。

清の初めに祐国寺は大修理され、乾隆15年（1750）に高宗は南巡した時に立ち寄り、「大延寿甘露寺」と「華嚴香海」の扁額、及び對聯を下賜されている。

今世紀に入った民国16年（1927）、馮玉祥（ヒョウギョクショウ、河北軍閥の巨頭で反蔣運動に終始）が河南省にいた時、仏像を毀して僧侶を駆逐し、遂に寺は全廢となつて一片の平地となつた。（上は戦時中の鉄塔と修理の状況）
上記した状態が常時、我々が眺めていた戦時中の鉄塔付近の光景である。



ただ「鉄塔」と「接引仏銅像」だけが無事で、民国22年（1933）、ここに河南省仏教学院が設けられ、院内に「上方祐国道場」の扁額が揚がっていた。



（右は駐屯時に鉄塔から城壁を眺めた写真）

河南省人民出版社発行の叢書によると、日本軍が駐屯していた河南大学の敷地を始め、次頁の地図のように城外までも総べて開宝寺の敷地であった。75頁の宋代の地図では更に拡がり広大な寺領をもっていた。

以上は鉄塔寺（開宝寺塔）の概要を記した。歴史は繰り返すと言われるから、若し鉄塔を除く建物が保存されていたとしても、彼の文化大革命では徹底的に破壊されただろうと思うと、中国は本当に不思議な謎の国と言わなければならない。

鉄塔公園は古代の夷山と開宝寺遺址の一部分に造営したもので、1958年に計画してから30年を経過して漸く完成した公園である。（14年前には無し）

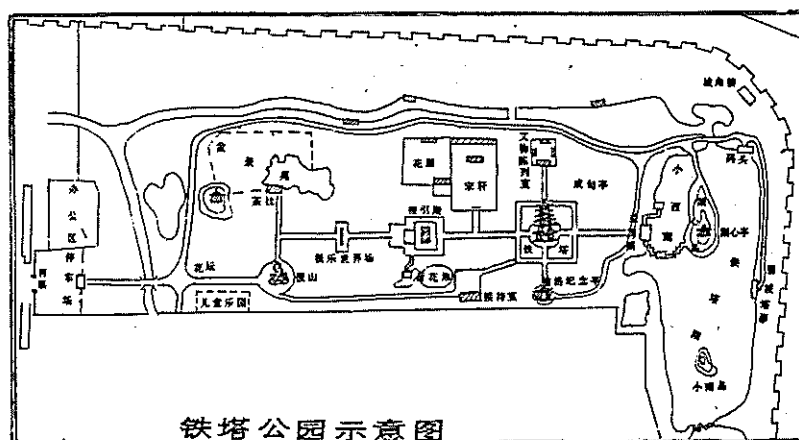
鉄製のフェンスに囲まれ、「鉄塔公園」の大看板が立つ園内を進むと、12本の白柱に薄赤の瓦を葺いた大門（入場券売場と弁公区）が建っていた。（右は大門）



鼓動が耳を打ち始めた。それは私の体の中に興奮の熱い血が流れ出した証拠であった。

しかし開封の象徴である鉄塔は、繁った樹木に隠れて未だ見えず、少々苛立ちさが募ってきた。

園内の小さな流れに架かった石橋を渡



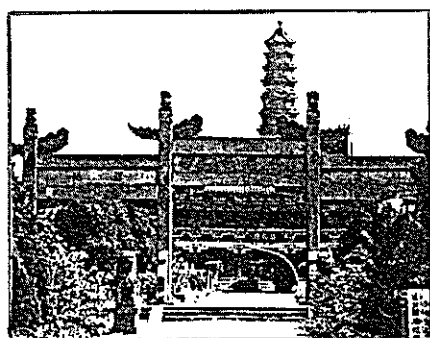
铁塔公园示意图

り、太湖石の假山（築山）の横に伏臥している、「天下第一之塔」と刻んだ黒光りの大理石と、真っ白い石刻の竜を眺めながら、天変地異が起こったような変化に驚きながら石畳の道を歩いた。（上は铁塔公園図）

道路上に高さ8呎、間口15呎の灰色をした石造りの牌坊が立ち、牌坊の中央に「極楽世界」、左右に「慈雲」「普護」と刻まれていた。

（右は牌坊、上の地図を参照）

灰色の牌坊を通した向こうに「接引殿」と、その屋根の上に鉄塔の上の部分が見え、この光景は「寿山福海」だと賞賛されていた。即ち、寿は山の如く、福は海のように、鉄塔は人々の寿福を祝っていると言う。（右は牌坊と接引殿、鉄塔）



牌坊後方の1986年に竣工した「接引殿」（铁塔寺の大雄宝殿のこと）は、宋代の古色と古香が匂っている殿堂である。鉄塔と接引殿は一直線上にあり、その一高一低と周囲の蒼松翠柏は一幅の巍峨壯観な画のようで、ぺんぺん草が群生していた往時を思うと、正に滄桑の変を夢見ているようであった。

接引殿の前には石獅子の像と鼎が据えられ、殿堂の周りの青石欄干には凡て小さな石獅子が飾られ、24本の大柱と相俟って栄えていた宋代を彷彿させていた。（右は接引殿）

大殿の中央に安置されている高さ5、14呎、重さ12トンの銅鑄造の接引仏は、前記した通り宋代のもので、極楽世界に導く仏として長く信仰されてきた。（阿弥陀仏のこと）



北宋・東京の開宝寺内の24禅院の一つである、上方院に祀られていた接院仏は、数次の兵火に遭遇し、黄河の大水害を受けたのに拘らず、鉄塔の南にあった八角堂に保存され、今日に至っているのである。

新築されたこの接引殿は鉄塔の西にあり（前頁参照）、仏像が東側に座って西方を向いているだけが宋時代と異なっている。殿内の三面（長さ42尺、高さ5、45尺）の周囲には、大小70余の仏像を画いた「西天極楽世界図」が、天国を思わせるように描かれていた。

（右は西天極楽世界図）

中でも観音、大勢至、阿難、迦葉の各菩薩はひときわ大きく描かれ、壁画の両端には弓や剣をもった金剛力士が立ち、五彩の芸術作品は人々の足を止めていた。

接引殿の後方、すなわち東側が「鉄塔」で、八角、13層、55、88尺の雄壮で美しい塔は毅然として聳え、昔と変わらぬ姿を留めて懐かしい限りであった。（右上は殿の中央に立つ接引仏の銅像）

中国にある千以上の古塔の中で開封の鉄塔は、完全な古代中国の伝統的な木造建築様式で、精巧に設計されている。飛天、麒麟、伎楽などの数十の図案を施した瑠璃瓦を貼り巡らし、正に天下第一の塔である。

（右は左より接引殿、八角堂、鉄塔の全景）

この塔が立つ以前は、開宝寺の福勝院内にあった木造の仏塔で、「靈感木塔」と呼ばれていた。釈迦の仏舍利（仏の骨）を祀る靈感木塔の創建は、宋・太宗の太平興国7年（982）であった。

中国に仏舍利が伝わったのは、現在の浙江省寧波の「阿育王寺」（私は訪問済）で、宋・太宗の太平興国3年（978）に阿育王寺から開封に分骨され、太宗は禁中（宮中）の塔に仏舍利を安置した。

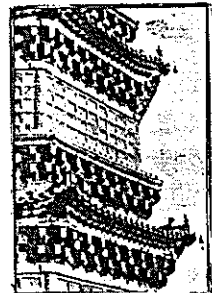
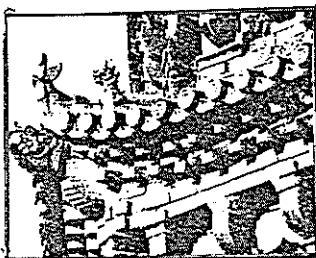
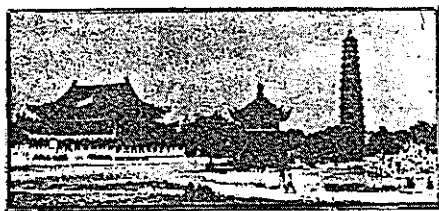
この木製の釈迦仏舍利塔が福勝院の木塔で、宋・太宗の端拱2年（989）に完成した。塔頂の銅製の宝珠が光を放ったことから、「靈感塔」の名を賜った。（上は鉄塔の塔身の局部）

宋の仁宗の慶曆4年（1044）、この塔が落雷により僅か56年で焼失したため、靈感塔の再建の詔が下った。そして前車の轍を踏まないように瑠璃瓦の塔に改められ、靈感木塔焼失の40年後に完成した。時は神宗元豊8年（1085）2月であった。

以後、今日まで鉄塔は900年、宋、金、元、明、清の5つの王朝と、民国年間の間に地震43回、水雹10回、猛烈台風19回、河川の氾濫等による水害23回の被害を被っているが、その都度、鉄塔の外面のみならず塔内の48尊仏も修理してきた。

民国27年（1938）5月6日、徐州会戦で追撃してきた開封攻撃の日本軍は、砲兵56門（1ヶ師団の砲兵）で鉄塔を砲撃し、80発が命中して破損した。これは鉄塔建設以来の惨事であったと、河南人民出版社の叢書に記載されていた。

戦史を繙くと、日本軍の攻撃は6月4日午後6時から8時までの約2時間で、城内



各陣地を砲撃している。叢書の日時と異なるばかりか、鉄塔を砲撃しても目つぶし程度の射撃であつと推察され、貴重な砲弾を鉄塔に集中することは弾薬の浪費で、そまような射撃を日本軍はする筈もなく、叢書の記述は疑問ばかりであつた。

私が駐屯した時に鉄塔の破損箇所を見たが、それを捜すのに苦労するほどで、数発の弾痕であつたと記憶している。恐らく日本軍の砲兵隊は照準点としただけで、80発を命中させて何の効果があるだろうか。

南京大虐殺30万人と同じく大誇張である。幸い現在は完全に修理して傷痕は完全に消えていた。

弾痕のことばかりでなくガイドの焦占有氏は、開封に駐屯していた日本軍は35師団で、城内には将校だけが居住していて、兵隊は城外に住んでいたと説明していた。（右は鉄塔の外壁の琉璃瓦の紋様）

これも事実に反した馬鹿げた話で、将兵が分離して戦闘行動がとれると思うのだろうか。8月の終戦前後の3ヶ月間、中国では日本軍の行動を辛辣に報道したが、これほど出鱈目とは想像も出来ないほどであつた。

現在は鉄塔の内部の参観は許可されていた。一行の中でも健脚の人たちは168の階段を昇り、開封市街を鳥瞰していたが、膝の痛む私は独り八角堂の方に進んだ。

「八角堂」（鉄塔の南側）は今は「唵浩記念亭」となっていた。唵浩は宋の有名な建築士で、上記した靈感木塔を設計監督した人である。現在の鉄塔は靈感木塔を基にして立てたから、亭の中に彼の塑像の立像が安置されていた。（右は駐屯時の八角堂と鉄塔）

鉄塔の東北方には修理された開封城の城壁が見えていた。この城壁の歴史は古く隋・唐の時代まで溯るものである。中国に現存する城壁の中では最大規模の古い城壁で、我々の故郷とも思える開封のために、何時までも「国の瑰宝」（かけがえのないもの）として保存してほしいものである。

（右上は駐屯時代の鉄塔と八角堂）

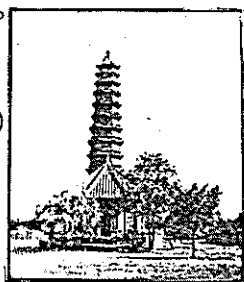
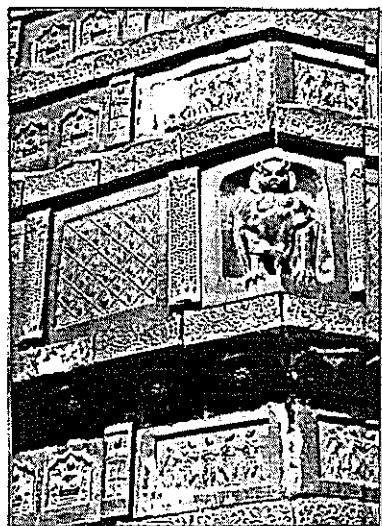
城壁の下に拡がる湖水には、往時のような葦の群生した汚い姿は消え去り、満々と碧水をたたえて無心の雲の影が湖面に映っていた。しかし、昔と変わらないのんびりとした風景を眺めていると、物は変わり星は移って幾度の秋を経たであろうかと、感傷的になってくるのであつた。

湖水のほとりで休憩しながら叢書に目を通していた。その中にあった日本国僧侶の「誠尋」の記事と、ビルマの白玉仏が私の視線を停止させた。

北宋の首都東京（開封）は、政治・経済・文化の中心として空前の繁栄をきたし、親善友好の使節として宗教徒も盛んに往来した。中でもインドと日本が突出していた。

北宋の時期に入宋した日本人の高僧の数は20余人で、特に大周（不明）、寂照、誠尋の3人は、日中文化交流に最大の貢献者であつた。

当時の都であつた開封の開宝寺は北宋の有名な巨刹で、国際上すこぶる影響を与え、外国の仏教徒が来訪して学習と仏法の伝授を受けていた。中でも開宝寺（鉄塔寺）と最も密接であつた外国人僧は、日本の誠尋である。



宋都御街と竜亭（77頁の開封図の中央上）

東京賓館で昼食を終えると、約束の時間通り1時30分、開封国際旅行社副社長の「邵珍」女史は、ハイヤでホテルに私を迎えにきた。それは日本出発の以前から依頼していた、私の古戦場「中牟城」の慰霊のためであった。

邵珍女史と運転手に日本から持参した心ばかりの手土産をわたし、中牟に向かう前に「宋都御街」と「竜亭」を望遠したいと希望を述べると、人生意気に感じた彼女は快く承諾してくれた。その厚意に感謝しながら、天に昇るような嬉しい気持ちで出発した。

午前中、黄河に向かった街道と同じく迎賓路を北に進み、鼓楼街へと右折すると、その一帯の私の記憶は克明に残っており、底知れない懐かしさを覚えるのであった。

宋都の「清明上河図」の殷賑を再現したような当手を想起すると、途端に全身に快感のようなものが駆け巡り、若者のように体の芯まで興奮して熱くなってきた。

栄耀栄華の夢の跡を鵠の目鷹の目で凝視している私を無視するように、車は北に向かって走った。昔の映画館が見えてきた。日本映画専門だったが、今では5つの上映館があると彼女は言っていた。

万感の思いが錯綜する金城湯池の界限は、その磚（せん）瓦（わ）一つ古瓦一つにも悠久の歴史を語らないものはない。

車は曹門（東門）と西門を結ぶ道路と中山路の交差点で停車した。そこが新しく作られた「宋都御街」であった。（77頁地図の中央上の「新街口」）

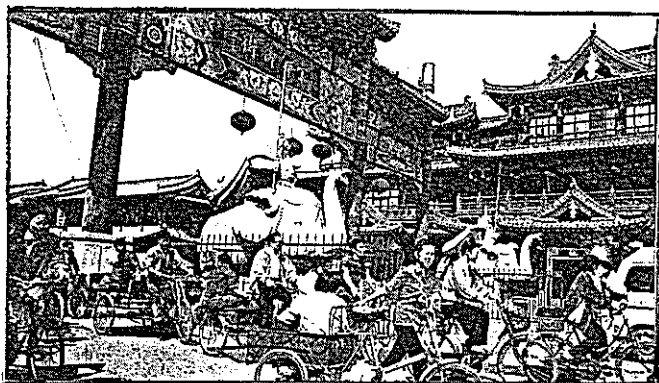
北宋時代を回帰させたような街並を再現した入口には、「宋都御街」と掲げた牌坊が立ち、その裏側には「安民泰園」と書かれていた。

日本の平安時代であった頃の宋都・東京（開封）は、世界一の栄えた都であった。その昔を思わせる宋都御街の中に一歩足を踏み入れると、本当に当時にタイムスリップしたような錯覚に、誰しも陥ってしまうのであった。

古い歴史のある街の一角に作った街並は観光の目的であろうが、文明開化の間もない江戸から東京へ変わった頃の街並を彷彿させていた。

（上の写真の上段は宋都御街の入口にある牌坊と、宋代建築を模した酒店、下段はその街並みにある絢爛豪華な建物の一部）

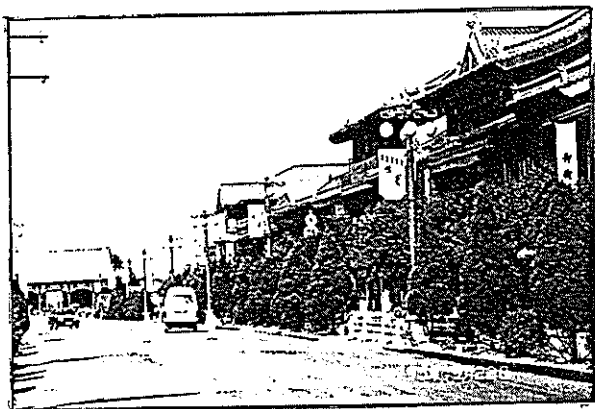
殷盛を極めた時代の宋の都を偲ばす新街は、両側に延々と料亭の建物が軒を連ね、「清明上河図」（75頁の写真）の在りし日の開封の繁栄を臉に浮かばせていた。



その当時の東京（開封）の市民たちは、日々華やかな刹那主義の享樂で街を賑わし、人情は輕佻浮薄で、風俗は趨媚嬌飾といった世相であったようだ。

そのようなことから政治も乱れ、遂に北宋第八代皇帝「徽宗」の時に「金」に滅ぼされることになってしまった。（76頁系図参照）

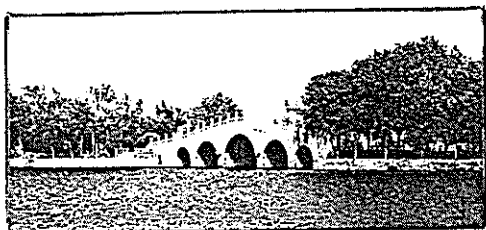
開封を懐かしく思う我々は、再びそのような弊害を冒してはならないと念じながら、華美な宋都御街を暫く眺めていた。（上は宋都御街と正面は午門）



鳳陽市でも鼓楼街を新設して観光客の誘致に努めていたが、古い街並みの再現は中国では一種の流行であろうか。否、開封は見るもの聞くもの全てが驚きで、開封の発展はお題目を唱えた絵に画いたボタ餅でなく、その意気に敬服しながら将来の大飛躍を祈るばかりであった。

宋都御街のきらびやかな都大路を歩いて午門から、北宋及び金王朝時代の宮殿の跡である「竜亭」へと車は走った。

眼前に迫ってくる光景は我が眼を狂わせるものばかりであった。私が駐屯していた時代は勿論、14年前に訪れた時とでは天と地の開きがあり、宋都御街と相俟って晴天の霹靂の感がする。（右上は潘家湖に架かる玉帯橋）

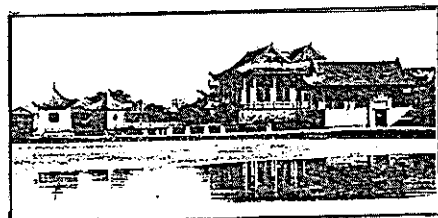


その時、若い邵珍女史は東側を指さし、この通りが昔のコリア街だったと説明した。何のために述べたのであろうか。



これも戦後50年の今年8月、日本軍の悪行の数々の一端として、テレビで放映したのに違いない。（右上は竜亭と潘家湖の景観）

陽に照り出された潘家湖と楊家湖は楊柳が蒼々として淵どり、碧空に浮かんでみえる竜亭は天上の宮殿のように聳えていた。



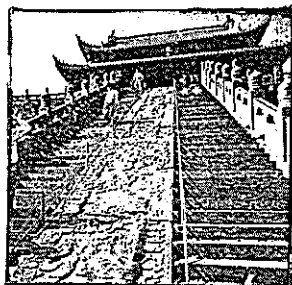
颯爽として闊歩していた軍服に軍刀姿の我が勇姿を、思い浮かべながら、湖面に映る恍惚となつて我が身を顧みて、過ぎた人生を回顧していた。

（上は駐屯時の潘家湖・楊家湖）

潘家湖と楊家湖は北宋の潘美と楊業の邸宅の跡で、両湖の境界をなす竜亭通りには朝房、玉帯橋、嵩呼（スウ、人民が天子の万歳を祝うところ）が新しく造られ、楊柳が延々と植えられていた。その光景は正に竜亭大殿と相俟って、開封の一大絵巻の美観と言わなければならない。（77頁の地図を参照）

車は湖畔の道路を廻って竜亭に接近した。血眼になって見上げる台上には大殿のほか、東西に新宮殿が建っているのが望遠された。新しい建物の説明を求めると、邵珍女史は宋時代の歴史的文物を始め、皇宮の立体模型、宋代皇帝や有名人の蠟人形8組が展示されていると説明した。

「竜亭」は別名を「天上の宮殿」と称され、特に江南の諸都市と水路で結ばれていたが、「天下の要会」の意味が理解できるようなのである。〔左上は現在の竜亭大殿（パンフレットの写真）〕
〔右上は14年前の竜亭で建物は1個、前に孫文の像あり〕
〔右下は駐屯していた時の竜亭及び湖水の情景〕



明の洪武11年（1387）、太祖・朱元璋は第5子の朱棣を開封に封じ、周王の号を与えた。朱棣はそこに壮大な周王府を造ったが、明末、周王府は黄河の洪水に没してしまった。そこに残った土山の上に清初期（1692）、河南総督の王士俊が万寿宮を造り、皇帝の誕生日に文武百官が集まり拝謁する場所とした。現存する大殿は万寿宮の正殿である。

竜亭の屋根瓦は皇宮らしく黄瓦で葺かれているが、易経によると黄瓦は「黄中の徳」を表していると言われている。

五色（黄、青、赤、白、黒）を四方（東西南北）に配せば、黄は五色の中央にあり、外に現れないと易経に書かれている。黄瓦は即ち禁中のことである。

竜亭大殿は「皇極」（こうごく）であった。政治を行うためには皇（き）、すなわち天子が先ず人のとるべき至極の道を確認し、人民の父母たるを期さなければならない。これを「皇極を建つ」と書経に書かれている。

〔「極」は中正至極の意味で、我が国の「皇極殿」はこれから来ている〕

以上は竜亭の記事だが、私は望遠したのみで拝観できなかったことは残念である。

北宋時代は東京と称して人口100万人以上もあった開封は、「天下の要会」とまで言われたが、その中心である竜亭は竜亭公園として発展していた。

郷愁を誘う景観にうっとりしていると、邵珍女史は公園近くにある宋時代の唯一の建物に案内してくれた。寺前先生、この建物はご存じですか、と彼女は指差した。しかし50数年も前の記憶は一瞬にして蘇らない。当惑していると開封で最も古い宋時代の建物だと説明した。



漸く私の記憶は蘇って思い出した。小高く盛り土した山の上の建物は洪水の難を免れたもので、駐屯時代に訪れたことがある。現在、これを観光名所として企画しており、下の看板には「清明上河遊楽園」と書かれていた。（上は宋時代の最古の建物）

「清明上河」の古建築を眺めてから、一路「中牟城」へとまっしぐらに快走した。眼は虚空の無限の彼方を見つめながら、漸く戦後50年にして具(ツナ)に中牟城を訪れ、「死を見ること帰するが如し」と、超然、従容、泰然として能力の限界を越えて戦った、古戦場の視察を予定通り終了した。

中牟を去って開封賓館に帰館すると若干の時間の余裕があり、間髪を入れず、中国では今流行の軽自動車のタクシに飛び乗り、懐かしい古都の中心街へと走った。夜はまた宋時代から伝わる鼓楼広場の夜店を見学した。

これらの紀行文は開封の項目に一括して纏めるため、「古戦場の中牟」の記事は時間は前後するが、開封の記事の後に記述することにした。

鼓 楼 (77頁地図の中央の鼓楼街)

鼓楼は宋時代から伝わる古都のシンボルで、煉瓦造りの城門のような台上に二層の楼台が建ち、更にその上に高い塔が聳え、時を知らせるために太鼓が打ち鳴らされていた。

又、塔の上に大きな時計があったから、昔は鼓楼あるいは時計台と呼んでいた。(右の写真の左側は今姿を消した鼓楼、右側は昔の鼓楼街)

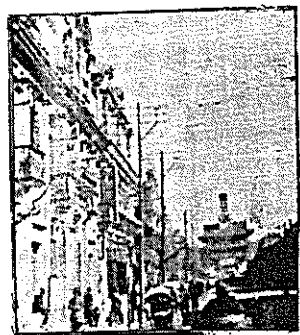
私が開封に駐屯して河南大学医学部の個室に居住していたのは、春秋に富む弱冠を僅かに過ぎた聯隊旗手時代であった。その後、中隊長として最前線に立って弾丸雨飛の間に身を投じ、時々、隊長会議(作戦)のために開封の土を踏んでいた。

生と死を超越して戦う戦士も矢張り一人の人間に過ぎず、心が奪われるほど美しく臉に映っていた古都開封は憧れの地であった。中でも赤い灯、青い灯のネオンが輝く鼓楼の界限は、青春を発散させる絶好の場所であった。

「中牟」の激戦場の訪問を終えた私は、息つく暇もなく自然にタクシに乗車していた。当時の紅顔の青年将校も今では老耄となり、杖をつく白髪の老人となって付録の人生を送っているが、昔の思い出が忘れられないように、ドライバーに鼓楼行きを指示していた。

血気の盛んな時代であった当時の歓楽の巷は、宋時代のように遊女と遊客で殷賑を極めていた。年老いた今では往時渺々として夢のようだが、私の両眼は虎視眈々として獲物を狙うような鋭い眼光を光らせていた。

鼓楼の手前にある弘法大師も参詣した縁の相国寺の前で停車を命じたが、境内に入る時間もなく大門の写真撮影で通りすぎた。門前は相変わらずの賑わいで昔も今も変わらない。(右上は相国寺大門前の賑わい)



相国寺で思い出されるのは、聯隊旗手時代に境内で私の手相を見た易者が、「大人（あなた）は32才で大将になる相がある」と、運勢判断したことであった。又、武運長久を祈願して鐘樓の鐘をついた記憶もあるが、3回も負傷しても生き長らえたのは祖国寺の鐘の御利益であろうか。

相国寺は北齊の天保6年（555）の創建で原名は「建国寺」である。唐の延和元年（712）、睿宗が相王から皇位を継いだ記念に相国寺と改め、明時代の大洪水で崩壊した後、1776年、清のころに再建された。

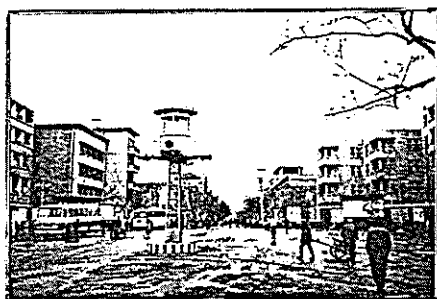
現在保存されているのは天王殿、大雄宝殿、八角琉璃殿、藏經樓で、八角琉璃殿には高さ7呎の千手千眼四面観音立像がある。これは清の乾隆年間に銀杏の大木を彫ったもので、特に有名である。（右の写真は昔撮影した八角琉璃殿）



最盛期には2000人もの僧侶がいたが、例に漏れず文化大革命で破壊され、僧侶たちは追放されてしまった。時間がなく境内の参観を割愛した関係から、現在の状態は私には不明である。

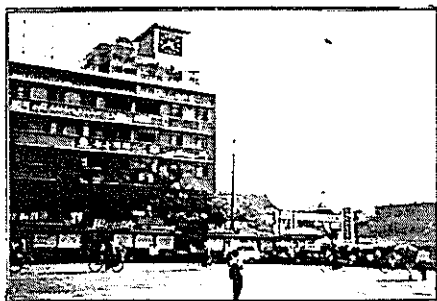
門前から眺める参詣する信者は群をなして昔と変わらない。しかし、表面上だけは仁者をよそおう権力主義と武力の政治は、霸道を行う覇者に過ぎないと中国の現状を感じながら、タクシに出発を命じ鼓樓へ向った。

相国寺の横の通りの馬道街（昔は馬が通れるほどの道）は、拡張されたが今は歩行者天国で車は入れず、東側を大回りして人込みの街の中の鼓樓街を走った。（右は14年前の鼓樓広場）



14年前に訪れた時には、既に鼓樓は取り壊されて広場となっていたが、今見たところでは交通整理の塔がなくなった以外は、変わりはないようであった。

金城湯池の古都の中心地は、変わるに変わることもできない状態で、鼓樓の建っていた北側の開封銀座の書店街だけは、50数年前の面影を残していた。（右は現在の鼓樓広場）



自動車の発達によって市街の幹線道路が拡張されたため、天上天下唯我独尊のような風格のあった鼓樓が、除去されたことは誠に慨嘆に堪えないことで、中国のみならず世界の損失と言わなければならない。

開封を愛して懐かしく思うのは我々だけでなく、限りなく郷愁を覚える古老の中国の人たちも、為政者を快く思っていないのではないだろうか。

（昔の面影を残す唯一の書店街）

宋時代を偲ばす金欄緞子（キランダス）の街に、胡弓の音が響き渡っていたあの当時が忘れられない。しかしながら、どんな美人でも遂には黄土と



なる運命は実にはかなく、運に恵まれなかった我が人生と同じだと眺めていた。

心身ともに弾けるような青春時代に闊歩したこの通りは、今も精気に溢れた中国の若者が如何にも楽しそうに往来し、その申々如とした光景を眼底に刻みながらホテルへと急ぎ、暫くの時間であったが回顧の散策を楽しんだのである。

夕食の有名な汴京料理は、宋都御街の料亭だろうと期待していたところ、東京賓館のレストランであった。我々より1週間ほど後に開封を訪れた当時の戦友たちは、宋都御街の料亭で汴京料理を味わったと聞き、忿懣やる方なしであった。

最前線の修羅場を潜る戦闘に従事して時たま開封に出張し、汴京料理に舌鼓をうつのは最大の楽しみであった。その栄耀栄華を極めた宋時代の汴京料理こそ、現在の中国料理の総べてだと高く評価され、最高の料理だと伝えられている。

900年以上も前の国都・開封は世界の食道楽の街であったのである。街には料理店が軒をつらね、有名店だけでも70軒以上を数え、その種類は200種を超えていたと記録されている。

これらは「東京夢華録」に語られているが、私もよく見学した京劇や雑技のような現代中国の源流もまた、疑いもなく汴京の開封であった。それほど文化経済至上主義の開封は、逞しい経済力を持っていたのである。

「経世済民」を略して「経済」と呼んだが、一行はそれを噛み締めるように汴京料理を味わった。色彩が鮮やかで肉は柔らかく、味と香りが豊かな鶏肉や鴨子卵、黄河でとれた新鮮な黄金色の鯉肉、それらを絶賛しながら満腹したことは忘れられない。

夕食後、我々の強い要望によって、鼓楼広場の夜市の散策に出掛けることになった。

夜店は我々が駐屯していた時代には一時的に中止されていたから、なおさら興味津々であった。

商業が盛んであった北宋の都・開封は、その頃から繁華街に夜店が出ていた。「東京夢華録」によると、夜店は真夜中まで開かれ、店が切り上げたかと思うと、明け方にはまた店が開かれ、夜通し群衆の絶えることがなかったと書かれている。



(上は中国最大の規模を誇る開封・鼓楼街の夜店の情景)

経済が復興して庶民の暮らしが良くなってきた近年、宋時代からの伝統を受け継ぐ夜店も復活し、人出は連日連夜5万人を超えと言われ、通常の中国の観光では味わうことの出来ない光景であった。

胡弓の寂しい感じの音色が響いた鼓楼街の夜は、中国四大料理は勿論のこと、各地の名物料理の夜店が延々と続いていた。一方、食だけではなく書店街には日用雑貨や家具、洋服など種々雑多な商品が並び、足の踏み場もないほどの混雑ぶりである。

我々一行はほどよい夜風を浴びながら、地理不案内のためにガイドに連れられて散策した。しかし私は別として、迷子になることを心配しての行動のため、食道楽を楽しむことも出来なかったが、中国人は思い思いの食道楽を広場一杯、繰り広げていた。

以上で開封の紀行文は終わりを告げることになったが、これから私の今次紀行の最大の目的である、「中牟の古戦場」の紀行文に移りたい。

古戦場の中牟城 (89頁4行目に続く)

開封を離れた車は私と邵珍女史を乗せ、古来中国の英雄たちが興亡の歴史を描いた中原の大平原を疾走した。

時は全ての恩讐を彼方へと流し、今の私は只、黄河の地に眠る幾多の彼我御霊よ、安かれと祈るばかりの心境であった。

昔は多岐亡羊(別れ路の多いこと)だった道も今は一直線の舗装道路となり、両側には青々とした楊柳の並木が延々と続き、活潑地(きわだち)の快適なドライブコースとなっていた。

後部座席の隣に座った通訳の邵珍女史は、寺前先生は35師団ですか、と言う切っ掛けから会話が始まった。

日本を出発する前に、私が中牟城の隊長であったことは通告してあったが、蒋介石軍が黄河を決壊した前と後では師団が異なり、それを確認したかったのであろう。

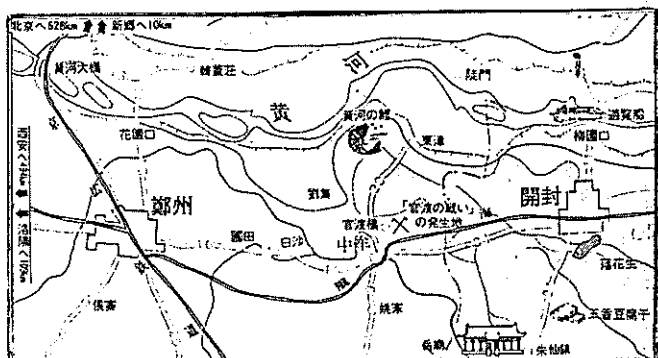
徐州大会戦に於いて開封から退却中の蒋介石軍は、日本軍の猛追撃に耐え切れず、中牟西北約20kmの花園口(上の地図の左上)付近の、黄河の堤防を決壊したのであった。(昭和13年6月11日の夜半で、蒋介石軍は日本軍が決壊したと宣伝した)

黄河の濁流は花園口から東南に流れ、中牟城を経て朱仙鎮に向かい、日本軍の追撃は新黄河の線で頓挫したが、地域住民の被害は莫大であった。その怨みは今でも骨髓に徹していることだろう。(下の写真は決壊当時の中牟付近の黄河の状況)

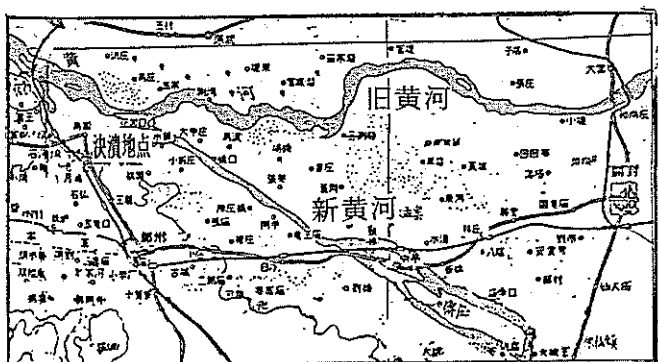
(決壊後の黄河の本流は上図のように中牟を流れたが、戦後は昔の流れに復旧した)

35師団の進駐したのは決壊後のことで、我々は決壊とは無関係だと彼女は納得した様子で、会話は更に続いた。彼女の主人は開封の公営企業の工場長を勤め、開封国際旅行社の副社長の彼女は広州生まれで、北京の語学専門大学を卒業したと自己紹介した。

早速そこで私は、共産党員になるのは試験があるのかと質問すると、推薦だと答えた。それでは共産



(上は現在の開封～中牟～鄭州間の地図)



(上は黄河決壊後の地図で、北側の本流は砂漠と化して水はなく、流水は中牟を流れて東南に流れて淮河に合流。新黄河は両軍の境界線となる)



党員の子弟でない者には不公平ではないかと追求すると、厳正な推薦制だからと言葉を濁していた。共産党政治の独裁性を如実に物語っている。

多分、彼女も主人も共産党員だと判断した私は、その後は共産党についての会話は中止した。党員でなければ美人とは言え、若い彼女が国際旅行社の副社長になれる筈もなく、公営企業の工場長の夫は恐らくエリート党員であろう。

会話を続けながら眺める街道は、夢を見ているのではないかと思うほど変化し、いくら記憶の糸をたぐっても思い出せない。しかし車だけは悠久の蒼天に真綿のような白雲が浮遊する中を、直線コースの舗装街道をまっしぐらに走り続けていた。

坦々として砥石のように平坦な中牟街道は深閑として人影はなく、時世は移り変わって黄金の絨毯を敷きつめたように稲穂が実り、豊年満作を祝うような光景は、昔を知る者にとっては胡蝶の夢を見ているような驚きであった。

街路樹が澄み切った青空に反射する輝きも亦、現在の自分の存在を疑うような安居楽土の風光で、妙齡な彼女と昔話を続けていると、中国人の平均寿命は日本人より10才も短命なことを知った。

我が隊が死を決して一致団結し、100倍もの優勢な敵軍と攻防を展開した中牟城は、全く無人の街であった。しかしその後、黄河の氾濫と敵の猛烈な砲撃によって城内は廢墟と化した。それを知っている古老を捜し出し、具に尋ねて見たいという希望も、50数年も経過した今では寿命から判断して、不可能になってしまった。

顧みれば昭和16年、必死の覚悟で黄河の敵前渡河を敢行して中牟城を占領し、鄭州（前頁地図参照）を攻略した進攻作戦後は、独り我が隊は将来の進攻作戦の橋頭堡（渡河拠点）を確保するため、敵陣の中に包囲された中牟城に残留し、文字通りの背水の陣を敷き、死力を尽くして戦った古戦場である。

三方を数万の敵に包囲され、後退することが出来ない黄河を背にした中牟城の死守は、支那派遣軍の注目の的となった戦闘となり、内地の新聞にも大きく報道されたのである。

自軍を絶対絶命の窮地に置けば、かえって生き残る道を見付けるものだと、三国志の兵法家・韓信は述べているが、戦う当事者はそう簡単に割り切れるものではない。それは尊い部下の生命を預かる指揮官の心理であった。

任務を完遂するため心を鬼にして、部下を叱咤しなければならない指揮官は、生と死について悟りを開かなければならなかった。端的に回顧すると、それは「生寄也。死帰也」（生は寄り、死は帰る）という、禹王の辞の実行であった。

人生はこの世を身を寄せる仮の宿としているだけである。そして死は故郷へ帰るようなものである。それは、夏の禹王が河を渡る時に竜が舟の下にもぐり、舟をくつがえそうとした。人はみな恐れたが、ただ独り禹王は天を仰いで泰然自若としていた、と史記に書いてあるが、指揮官はその心境に立たされるのであった。

（右の写真は私が計画して築城した中牟城の陣地の一部と、厚さ1尺もある煉瓦造りの兵舎と城門）



中牟城の戦闘は、私にとって最初の死を覚悟した戦闘であり、死の悟りであった。最前線の戦闘指導に於いては戦闘技術(戦術)は重要な要素だが、それ以上に部下の戦場心理を重点にした戦闘指導が肝要であった。だから今でも強く印象に残っている。

100倍以上の衆敵を寡兵で迎え撃つ極限状態に立たされると、自ずから諦めの心情となるのは掛け値のない真理である。死は安らぎに帰るだけだと悟り、「人事を尽くして天命を待つ」という心境になってくる。しかし、それに達するまでには時間がかかるのは当然であった。

良くその心境を表現しているのは、宋の忠臣・文天祥(1238~82)が述べた「人生古より誰か死なからん」の言葉で、天命はそれぞれの身に備わったものと、悟ってくるのであった。

そのような思い出が車中の私の脳裏に自然に浮かんできた。天下分け目の阿鼻叫喚の巷と化した中牟の戦闘が、網膜に浮かんでは消え、消えては浮かんでいったが、通訳の邵珍女史が中牟に入ったことを告げると、そこには立派な高速道路が走り、火力発電所の高い煙突が見えていた。

戦後50年目の節目の年に当たり、鵬程万里の万水千山を超えて訪れた中牟城は、桑田が変じて滄海となったように変貌し、杜甫が詠んだ「国破山河在」どころか、城壁もなくなって昔の面影は全く消えていた。

目を皿のようにして凝視しても、敵砲兵の巨弾が殷々轟々と唸りをあげて命中した跡形はなく、神経を磨り減らした暴虎馮河(豹ヒョウが、彪ヒョウで立ち向かい、大河を徒渉で渡るような危険なこと)の古戦場には、輪奐の美を備えた高層建築が林立し、極楽浄土のような街並は想像もできない別世界となっていた。

開封を出発して約40分後(当時は2時間)、車は中牟県人民政府(県庁)の正門に達し、門をくぐって奇麗に植栽されている広場を通過し、正面玄関で停車した。

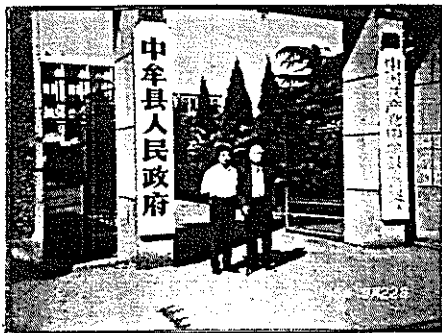
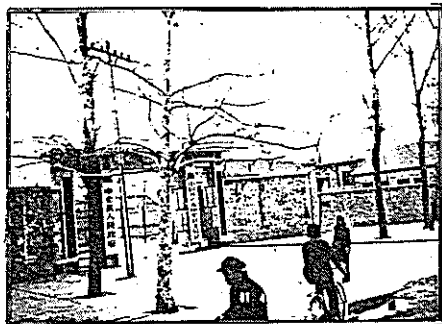
通訳の邵珍女史は私を車の中に待機させ、県庁舎の中に入っていった。私が県知事に是非とも面会したいと願い出ていたから、その交渉のためであった。

交渉が難航しているのか10分を経過しても戻ってこない。思い余った私は車から降り、表情を強張らせながら素早く四方を礼拝した。それは仰々しい慰霊は、住民感情からも差し控えたいと考えていた予定の行動であった。

中国各地の住民は政府の指導もあるのか、日本人に対して怨みこそあれ、決して慰霊には快く思わないようで、友好は外貨獲得の一手段に過ぎないことを私は熟知していた。

(上の写真の上段は14年前の県庁、下段は現在の県庁正門に立つ秘書課長と私)

必死敢闘の心血を注ぎ、人知の及ぶ限りの創意工夫を凝らし、超人的な努力で築いた鉄桶の陣地を彷彿として臉に浮かべながら、戦後50年目の節目の年に慰霊に来た



ことを亡き戦友に告げ、靈魂を慰める祭儀に替えたのであった。

「往時悠々浩嘆を成す」、過ぎ去った当時のことは夢のようだが、私にとって中牟の激戦は、ただ大きな嘆き悲しみとして残っていると言う心境であった。

黄河を背にして死闘を演じたあの時、死んでいた筈の私の人生は、その後は借りた時間を生きてきという感じで、肉体的にも不全が慢性化して駸駸（シシシ）と迫る老醜となった今日、慰霊の誠を捧げられたことに安堵の胸を撫で下ろしていた。

漸く姿を現した邵珍女史の言によると、知事は重要会議のために面接する時間はなく、知事に代わって秘書課長が面会に応じるということであった。

肩書きのない私に県知事が面接する筈もなく、秘書課長に面接できる喜びの余り、足を踏み手の舞うも知らずといった心境で、彼女に連れられて階段を上って2階の秘書室に入った。

「帰来」（カイトン）、中牟に帰ってきたという喜びの表情で名刺を差し出した私は、戦時中、中牟城で戦った当時の隊長であったと自己紹介し、先ず第一に、当時の貴地住民に対して御迷惑を掛けました、と御詫びの言葉を述べた。

どのような態度に出るか心配していたところ、天天如（ヨヨヨジョ、若く動かなさま）とした秘書課長は穏やかな笑いを浮かべ、古くからの知己のように手を差し伸べて固い握手を交わした。

何から会話の糸口をつかもうかと考えていると、自然に中牟の偉大な大発展を称賛する言葉となり、続いて現状の質問に移っていった。彼は県全体の人口は64万で、市内人口は約10万人だと答えたが、当時の中牟周辺の疲弊した農村を思うと、考えられない天文学的な数字であった。

産業としては大小併せて約1000の工場があり、主として自動車製造業（耕運機を含む）、製紙工場、農産物加工業であった。農産物は灌漑用水の完備により米作が主体だが、落花生や養豚・養兔業も盛んで収入は増加し、昔からの古い百姓の家屋は、10分の1も見られないと説明した。

教育方面の現状は小学校が400以上、中学校が30以上、高等学校が6校、医学（西洋・漢方）及び農業専門大学が2校である。昔の農業県では小学校が2校程度しかなく、県知事でさえも読み書きが出来なかったことを思うと、長足の進歩である。

産業発展の原動力の火力発電所の建設資金は？と質問すると、日本人の個人からの30万ドル（100万人民元）の借款の御陰だと感謝していた。

その日本人は、鹿児島市鷹師2～5～1 錦江産業株式会社取締役社長「篠原昌幸」氏、鹿児島市「富原誠治」氏、他に林業を営む1人の計3人であった。

上記の人たちと中牟との関係は分からない。私が陸大の試験に合格して日本に帰還後、我が隊は南方戦線に転戦したから、その後を引き継いだ部隊の人であろうか。実に奇人な人が居たものだと感激しながら聞いていた。

いろいろと秘書課長に伺った私は、中牟県の歴史書があれば分譲してほしいと申し出ると、決まり悪そうに照れ笑いを顔に浮かべながら、実は未だ出来ていないと返答した。その点は他の文化都市に比べて後進県だと思いながら会話を続けた。

中牟の名が最も古く歴史に出るのは、私の知っているところでは論語であった。孔子と子路の問答の中に、『晋の太夫・趙簡子の臣「仏昧」（ヒツキツ）が、中牟という町を治めていたが反乱を起こした。子路は孔子に中牟に行くべきか否やを質している』

次いで官渡の戦い（中牟東北方、92頁地図参照）である。漢末の混乱の時、建安元年（献帝の7年）に献帝が洛陽に帰還すると、曹操は直ちに兵を率いて入朝し、帝を許（今の河南省許昌）に迎えて天下に号令した。

その時、河北・山東・山西を領有していた袁紹（エシヨウ）は精兵を率いて許を攻め、曹操は袁紹と官渡（中牟県）で戦い、曹操が勝利をおさめて華北を領有した。時は紀元200年であった。（下図は92頁下段の中牟の拡大図）

中牟という名称は、県城の北方約2㌔にある砂山の「牟山」（右図の中央上部）に由来しているのかと質ねると、その通りだと答えたが、課長は良く知っている人だと思ったことである。

優勢な砲兵を擁す衆敵との緒戦の攻防戦は、約1ヶ月間にわたり連日連夜、臓腑をえぐるような百雷に似た巨弾を浴びながら、鉄条網を乗り越えて突撃を敢行する敵と戦火を交えた。

甘を分かち苦を共にした我が隊の将兵は力戦奮闘、薄氷を踏むような思いで敵の猛攻を撃破し、死力を尽くして中牟城を死守した。

その結果、敵の大軍に甚大な犠牲を続出させ、遂に敵をして中牟城の難攻不落を、思い知らしめさせたのであった。（戦闘経過は拙書「両忘」に記述）

井中に火を求めるような不可能に挑戦し、勇奮敢闘した我が隊の名声は全軍を風靡した。その善戦した戦跡を視察するために、当時の支那派遣軍総司令官を始め北支那派遣軍司令官、その他の軍の上層部は中牟を訪れた。その際に状況を説明した場所が黄河北方の「牟山」の砂山であった。

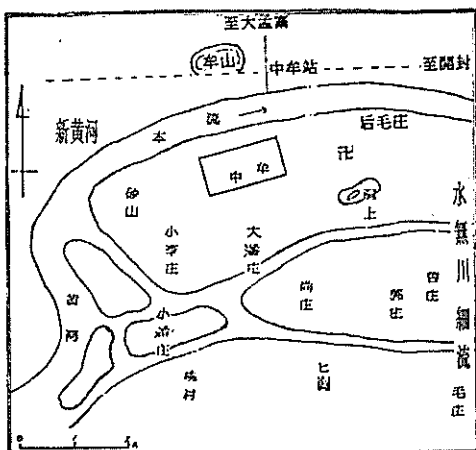
（上図の黄河本流は中牟の北側を流れ、中牟南方の河は水無川で砂漠化していた）

当時の中牟を中心にした数種類のコピーした地図を秘書課長に渡し、図上にある部落の洞上、大潘庄、小李庄、廟高地（㊦）などは現在、どうなっているかと質問すると、これらの部落は市内に取り込まれて市街地となり、その地名は今も残っていると答え、高地であった洞上も廟高地も総べて、平坦地となっているとのことであった。

私が日本から土産品として持ってきた加賀百万石の置物「獅子頭」の贈呈が利いたのか、秘書課長は現地を案内すると述べ、椅子から立ち上がって車の所へと足を運んだ。

私も通訳の邵珍女史も椅子から離れ、同席していた秘書課の職員に挨拶すると、最も若い職員は「さようなら」と日本語で応えてくれた。この言葉は何時までも印象に残っていたが、これは前記した鹿児島の出資者から学んだのであろうか。

早速、県庁の正門前で秘書課長と並んで記念写真を撮り（94頁下段のに写真）、市の中心部の写真も撮影した。（上の写真は鄭州に通じる中心街の景観）



毎日が飽（か）で背骨が削られるような思いで戦った無人の城内は現在、天変地異したように高層建築が軒を連ねて櫛比し、テレビ塔も空高く聳えて市民生活は裕福そうに見える、喜びに堪えないような明るい街並みを形成していた。（右の写真は開封に通じる中心街）

中心部にある県庁から南に伸びる市街地にも高層建築が林立し、乗車した車はその街道を真っ直ぐ走った。

秘書課長は車から降りて、ここが「大潘庄」だと教えてくれた。しかし記憶に残るものは一物もなくアパート群が立ち並び、我々を苦しめた敵陣地だったとは思えない発展ぶりであった。

中牟城の正面の大潘庄の空に昇る月を眺めては、安堵の胸を撫で下ろし、沈む太陽を見送っては不安を感じた村影は、忘れようとしても忘れられない。（右は現在の大潘庄）

それは月夜は月光により遠くまで視界が利くため、敵の夜襲を早期に察知できるからである。

月齢を気にしながら戦旅の枕を重ねて連日眺めた大潘庄と、いま目にする光景の間には感慨無量の深い感激があったが、「渺渺たる我が思い」という以外に表現できなかった。（前頁の地図参照）

体の芯まで燃えるように熱くなった私を乗せた車は、大潘庄を左折して東に進んだ。当時は敵陣だった一帯を戦後はじめて足跡した私にとっては、まるで夢を見ているようである。

平坦な畑地の中を走る道路上で再び車は停車した。ここが中牟城の陣地にとって最大の竈であった「洞上」（前頁の地図の中央右側の高地）であった。

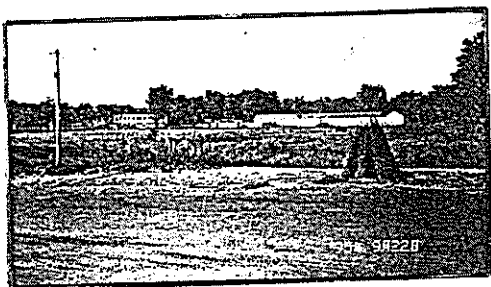
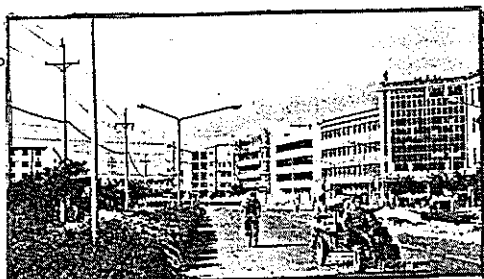
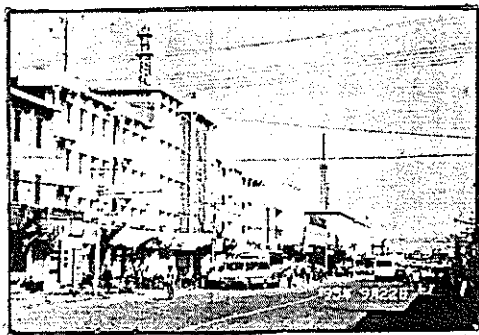
高地の中に深い洞窟を掘った洞上の敵陣は我が砲兵の威力も及ばず、四六時中、我々を悩まし続けた高地は今とはなくなり、農家が点々と散在する閑閑な光景を呈していた。

洞上高地の北側にあった堡壘のように頑強な廟高地（㊦）も亦、姿を消して平坦地となっていた。悲壮な気が満ち満ちていた当時の戦場は、一木一草まで私の臉の裏に鮮やかに焼き付いているが、いま対面してみると懐かしい思いがする。（右は現在の洞上の景観）

当時の洞上や廟の両高地から黄河の水面を射撃する敵弾は、我が中牟の生命線である補給路を常に脅かし、渡河工兵隊の舟艇は危きこと累卵の如しであった。

しかし、これに対する中牟の我が将兵は意気軒昂で、英気の盛んなことは北斗星や牽牛星をも貫くほどであった。「断じて行えば鬼神もこれを避く」と、乾坤一擲の勝負を決意した私は、2回にわたって両高地に出撃を敢行した。

友軍砲兵の殷々たる援護射撃によって鎧袖一触、両敵陣を奪取して破壊し、撒毒を



した後、中牟城の我が陣地に引き返したのである。

この出撃を回顧すると、川霧に包まれた闇夜を利用して敵陣300mまで接近し、我が砲兵の突撃支援射撃の最終弾を合図にして、先陣に立った私は日本刀を振りかざして敵陣の鉄条網を突破し、不意急襲して突撃を敢行した。

頬を紅潮させて突入した私は敵兵1人を袈裟斬りに斬った。突撃に於いて敵を斬ったのは洞上が初めてのことで、今でもその時の状況は鮮明に脳細胞に刻まれている。

血濡れた軍刀をぶら下げて洞上高地の上に立ち、出撃部隊を掌握して満足の笑みを漏らしたこの地は、忘れるに忘れられない。

いま洞上高地の跡に立って古戦場一帯を眺めると、50数年前の中牟の戦闘は一体、何であったのか、と考えさせられた。彼我の犠牲者には誠に申しわけがない、と思う涙が込み上げてくるのであった。

それらは全て天命であつたと言えないが、何と人間は馬鹿であろうか。戦争は何の為であったのかと反省させられるのであった。

100倍もの敵と対峙する我が隊は、中牟城から后毛庄（中牟東方、96頁の地図参照）までの約4kmの正面を、僅かな兵力で布陣しなければならなかった。

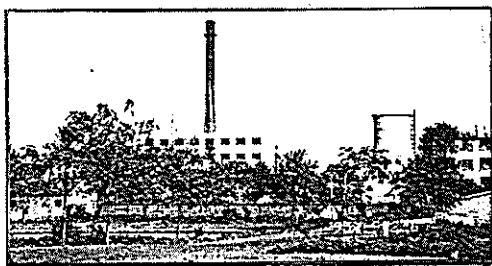
当時の我が戦力は私の直属の隊のほか、后毛庄守備の歩兵1小隊、重機関銃1小隊（3銃）砲兵隊（野砲2門、15cm榴弾砲1門）渡河工兵1小隊（舟艇4隻）迫撃砲隊（約10門）野戦病院（軍医以下10名）等の配属部隊を加え、総兵力は約300～400名程度であった。

対する敵は蒋介石直系軍の最精鋭部隊、衛立煌第1戦区司令官隷下の砲兵を擁する約2ヶ師団（約2～3万）であった。運命は不思議なもので、私がビルマ戦線に赴任して戦った敵も亦、衛立煌の指揮する雲南遠征軍であった。それだけ彼は蒋介石に信頼されていたのである。

笑い話になるが当時の敵の情報によると、一介の若い中隊長に過ぎない中牟城守備隊長の私が、大佐級の隊長が指揮していると判断されたばかりか、私の首に懸賞金まで掛けられていた。これらは中牟の全隊員の奮戦の功績である。

天空高く聳え立っている1本の煙突が洞上の東に見えていた。この火力発電所は鹿児島県の同胞の賜物だと思ふと、私までも罪滅ぼしの責任逃れのように眼底に写るのであった。

（右は洞上に新設された火力発電所）



私にとって天にも地にも掛け替えのない中牟の視察は終わり、車中から変貌した地形を眺めながら県庁舎へと向かった。かつて城内で釣りを楽しんだ湖水も埋められ、懐かしい食うか食われるかの古戦場は、いづこも文字通りの滄桑の変化であった。

庁舎の前で秘書課長に礼を尽くして懇懃に感謝の言葉を述べ、末永く唇齒輔車の友好関係を保ちたいと懇願し、娑婆のに見納めだと市内を見渡して乗車した。盛者必滅会者定離は世の習いと言われるが、別れを惜しむ彼も我も涙ぐみながら、いつまでも手を振っていた。

愛惜の余韻は長く尾を引いて、どこまでも続く細い糸のようであった。中牟を去って行く道は無限に伸びていたが、再び訪れる機会がないと思うと寂しいものである。

しかし、それが人生であり、人の一生は夢のようだとされるのである。

車中の人となっても矢張り思い出されるのは、生き地獄のように凄まじかった緒戦の攻防戦の様相である。兵（戦い）は心を攻めることが上策だと、一睡もせず叱咤激励して廻った自分の姿を想起していた。即ち率先垂範の陣頭思想である。

幾分平穩となって対陣状態に移行した後、無い知恵を絞って得た私の戦闘指揮の方針は、戦闘になれた部下を信頼して些細なことは拘束しない一種の放任主義と、自己の責任に於ける冷静な判断力の養成の二面であった。それが殺伐とした対陣の心理を克服する方策だと考えたからである。

中牟の守備から学んだ統率の哲学は上記の通りで、生きるか死ぬかの戦闘場面では、自ずから死を超越して戦うものである。その思想は即ち、旺盛な責任感の自覚から生じるものであった。

走馬灯のように脳裏に浮かぶ鬼哭啾啾の古戦場を去り、開封に向かった街道上に新築された大きな建物が立っていた。ここが「官渡の戦い」の発生地である。

寡兵で以て大軍を破った戦例として有名な「官渡の渡し」の戦いは、曹操が袁紹を破った戦闘で（92頁地図参照）、三国志に詳しく書かれている。

戦いの決戦場となった地点は中牟県城北方の黄河の北岸で、当時も現在も中牟県（県境）である。（右は官渡の古戦場の記念の建物）

建安5年（紀元200）、5万の曹操軍と数十万の袁紹軍との戦いにおいて、5千の曹操の兵は袁紹軍と同じ服を着用し、その軽装した騎馬部隊は夜間隠密に黄河を渡河して、袁紹軍の後方を奇襲した。

奇襲部隊は袁紹軍の補給路を遮断して、兵糧を焼き払って潰滅的な打撃を与え、袁紹は病にかかって病死した。曹操はこれに乗じて袁紹の故地を攻略して、華北を平定したのであった。

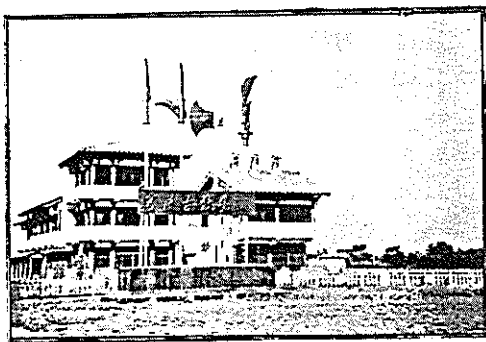
観光資源の乏しい中牟が「官渡の渡し」を目玉にして、観光方面にも手を出したことは喜ばしいことで、開封を訪れる観光客を積極的に誘致してもらいたい。

官渡の渡しの建物の前には「官渡古戦場」の大看板と、当時の戦闘に使用した兵器（上の写真参照）が立っていたが、まだ未完成のため参観はできず残念であった。

官渡を眺めた感想は、兵は国家の大事にして用うべからずと、「礼記」にも書かれている通り、どこまでも中牟は平和であって欲しいと願い、私は中牟の人たちと平和な心の友になりたい一心であった。

余韻嫋嫋として万感交（こもも）に到る中牟の陰影は我が網膜から消え去り、彼の新黄河の濁流も今は昔話で、当時の人たちの多くは過去の人となってしまった。私に残されたものは只、慰霊を含めた戦友道だけである。

日がたち月が訪れ、人が来て人が去り、過去から現在となった中牟を改めて回顧すると、中牟の戦闘は大東亜戦争からすれば極めて小戦に過ぎない。しかし私に与えた教訓は実に大きく、拙い体験から得た小さい事だが、以下その教訓を列記してみたい。



- (Ⅰ) 大胆であることは肝要であるが、一方では小心で注意深いことも必要である。
- (Ⅱ) 激戦を身を以て体験した人を軍の中樞に据えなければ、第一線部隊の真の戦場心理は理解できず、作戦計画や指導も極めて杜撰で実戦的ではない。碁・将棋を始め勝負の世界と違って兵にはルールはなく、経験豊かな部下が頼りであったことを思うと、紙上の学問だけでは千差萬別の実戦には応じられない。即ち学校等の成績だけの人事には甚だ疑問を感じる。
- (Ⅲ) 勝つことだけを急いで、負けた場合のことを忘れてはならない。先ず負けないことを考えるべきである。
- (Ⅳ) 万一の勝利をたのんで行動すべきではない。
- (Ⅴ) 最前線に立って孫子や呉子を学んだが、感銘をしたのは、「戦いの勝敗の契機には四つある」という、次の呉子の教えであった。
- ①は「危機」で、指揮官の気分が士気を左右する。
 - ②は「地機」で、地理地形の良否が戦勢を左右する。
 - ③は「事機」で、軍の事態である。即ち上下の人々の満不満が戦いを左右する。
 - ④は「力機」で、戦力としての諸装備の優劣が勝負につながる。
- この「四機」が完全であれば、戦闘態勢は万全である。

9月23日～24日

(土・日) 晴

開封～鄭州～成田

昨夜は中牟城訪問の念願を果たし、「笑みを含んで地に入る(死)」ことができた
と安らかに眠り、東京賓館を9時に出発した。邵珍副社長から沢山なお土産を頂戴し、
厚く感謝の言葉を述べて鄭州へと高速道路を驀進し、中牟のインターを通過した。

絨毯を敷き詰めたように、たわわに実った稲穂は陽に輝き、玉蜀黍や落花生の取り
入れに忙しい農民の姿や、黄河の水を引き込んだ養魚池などを眺め、中原の地も見納
めだと懐かしく思っていると、1時間後には鄭州市街(人口140万)に入っていた。

早い昼食を市内のレストランで摂っている時、「中国青年報」の報道が思い出され
た。鄭州では旧日本海軍を代表する戦艦「大和・武蔵」の玩具販売を巡る大論争が起
こり、売場から旧日本軍の玩具が撤去されると言う出来事があったことである。

侵略者の強力な殺人兵器を売ることは民族感情と、自尊心を傷つけるものだと、販
売反対派から批判の声が上がった。日本文化の流入を規制している韓国まで引き合い
に出し、愛国主義を強調して氣勢を上げていた。

販売容認派は市場経済を強調しながら、生産許可を受けた商品をなぜ売ってはいけ
ないのか、と大論争となったが愛国主義の圧力は強く、旧日本軍の艦船や戦車の玩具
は結局、お蔵入りとなった。上からの圧力も想像されて日中友好は甚だ疑問である。

殷時代(前16世紀～11世紀)に早くも都市が形成されていた鄭州は、黄河文明
の発祥の地の一つであり、中原に覇を競った將軍たちの争奪の地となっていた。過去
3000年間に1500回も黄河の流れが変わって砂漠化し、「風はなくとも土ぼこり
3尺、一雨降ればぬかるみ」、と言われている懐かしい古戦場であった。

鄭州を飛翔して1時間後に上海空港に着陸し、当夜は上海西郊賓館に宿泊。翌24
日は中国東方航空に搭乗して成田に安着し、17回目の中国の旅は幕が引かれた。

あとがき

今次の旅の成果を簡潔に表現すると、「麻雀で満貫をつもった」という感じの旅であった。或いは「満願成就の旅」であつたとも言える。

戦後50周年の節目の年に当たって生存戦友を代表し、一死以て国に殉じて黄泉の客となられた亡き戦友の英霊に対し、古戦場に於いて具に「慰霊」の誠を捧げられたことは、我が人生の総仕上げであつた。

旅の順を追って簡単に回顧してみたい。南京の「南京大虐殺30万人記念館」は、今後の両国の友好関係を修復したいと言う我々の熱意を明らかに阻害し、将来も起伏の多い道を歩むことになるのでは、と私は心配している。

戦争は殺人を伴う悪行で、日本政府は幾度となく謝罪している。しかし若しも意図的組織的な虐殺が南京で行われていたならば、これは世界の目を隠し通すことは到底不可能で、日本は喧喧囂囂(ケンケンガウガウ)とした世界の非難を浴び、戦争継続は立ち往生をしていた筈である。

極東軍事裁判は西欧の過去の侵略を棚に上げ、日本だけを増幅して「勝者は正義、敗者は全て悪」としている。それを巧みに利用した強権力の中国首脳に、私は東洋哲学を教育された者として、一言申し述べたいのである。

「論語」(顔淵)に曰く、「その惡を攻めて人の惡を攻むるなし」と。自分の惡はとことんまで戒め、他人の惡に寛大であるべきだと、孔子は教諭している。日本の謝罪を何と心得ているのだろうか。

また「論語」(顔淵)に曰く、「駟(シ)も舌に及ばず」と。一度おかした失言は四頭立ての馬車で追いかけても、取り返すことは出来ないのである。「懸羊頭売狗肉」と言うような偽善な言動(親善)だけは、本家の彼らは範を示して慎んで貰いたい。

日本人の訪問が少ない「烏江」の「項羽廟」も亦、多くの教訓を残していた。項羽には「籌策(ハカリト)を帷帳(バリ)の中でめぐらして、勝利を千里の外に決す」、といった名將が部下になく、一方の劉邦には韓信・張良・蕭何らの名將が謀議に参加していた。これだけで戦いの勝敗は自ずから決していたのであつた。

「不敢進寸而退尺」、一寸前進するよりも一尺後退せよ、という兵家の言葉がある。即ち、如何にして戦争を始めるかを考えるよりは、如何にして戦争を終わらせるか、が重要なのである。

若しこのことを忘れ、勝つことのみを考えて戦えば必ず敗戦に終わる。これは項羽に該当する言葉で、大東亜戦争の日本軍の首脳部も「正に然り」でなかろうか。

「左伝」に曰く、「武に七徳あり」と。その第一に「暴を禁ず」と書かれている。歴史を繙くと、項羽は秦の軍隊の捕虜20万人を穴埋めにするという暴挙を行っている。この武の徳に反した行動が住民の信頼を失い、遂に敗戦になったと考えられる。

「滁州」は名も知らない泥くさい田舎町であつたが、早朝の散策で見た「馬頭壁」には愛着を感じ、更に琅琊山の醉翁亭に於ける大歓迎ぶりは、日中民族の近親感を覚えて涙ぐみ、生涯忘れられない一時であつた。

「鳳陽」は、書物で読んだ鳳陽と直接眺めた現地とでは、気を呑むような開きがあつた。特に明皇陵は「孝経」を地でいくような感じを受け、強く胸が打たれたのである。

（孝経は孝の道を教えた孔子の著作で、今は余り教えていないが、孝は不変の人間の道である）

「人の道は孝より大なるはなし」で、親を愛す人は他人を憎むことはしない。人を憎めばその結果、必ず親まで禍の及ぶことを惧（おそ）れる。又、親を敬う情の深い人は他人を憎む心になりえないのである。即ち愛と敬は孝道の根本である。

鳳陽の「中都城」の広大な規模は訪れる人々の肝を抜いていた。しかし、朝があれば暮れがあり、暮れがあれば朝があるのと同じく、国の栄枯盛衰の悲しみを感じさせ、昔を学べば必ず得ることがあると教えていた。

「亳州」は殷湯王が都した古都で、老子、曹操、華佗という偉大な人物を生み、想像を上回る古代中国の歴史的文化名城であった。又、現代中国第一の漢方薬市場の盛況を見て、指導する大人物が居れば、その社会は必ず栄えると言うことを如実に物語っていた。

「開封」や「死を見ること帰するが如し」と戦った「中牟城」は、私に懐かしい青春時代を追憶させ、人生の黄昏の良い思い出となった。付録の人生を送る現在の私にとっては、思い出は「最高の宝」であった。

長江から黄河への未知の大地に触れた今回の旅路は、古代中国を思い起こす歴史探訪の紀行であり、古い文化と素朴な庶民生活に接して感動一杯だったと評価している。これまでの美しい景観を鑑賞する中国の旅と比較して、「日を同じくして語るべからず」と言わなければならない。

天地に万古あるも、この身は再び得られず、年老（トシ）をとるのも天地の運行と同じだ。これからも人生は万事出たとこ勝負だと、若さを保つ生活の知恵として残りの余禄を行楽せんのみ。

惚け防止と老化を食い止めるため、一回一回が最後と思いながら書き続けてきたが、今度もまた「世の中は嫉妬と羨望と怨恨の歴史」だと感じて、温故知新の蛙鳴蟬噪な拙劣極まる紀行文を綴ってみた。

